
バッドカクテル！

DDZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バッドカクテル！

【Nコード】

N1998W

【作者名】

DDZ

【あらすじ】

【旧題：魔術師は甘え（キリツ）】ケイリオスの学園迷宮。そこにはなんでもあつて、けれど謎があることしか分かっていない場所。

仲間を集め、ジョブといわれる自らの天職の加護を受け、今日も冒険者達はあらゆる物を求めて迷宮を突き進む。

主人公であるレーゼIIゼフィスもそんな冒険者の一員。

なのだがそのジョブは、空前絶後の地雷職と言われる呪術師で

この作品はArcadia様のオリジナル板にも投稿させていた
だいています。

呪術師はじめました

第一話 呪術師始めました

無機質な靴の音を響かせながら、俺は迷宮を歩いていた。

壁は不思議な力でぼんやりと発光していて、地下6階にもなるこの場所は、日の光から遠い地下でもなお明るい。

辺りには魔物の声か、魔物が立てた音が微かに響いていた。その中に混じる形で、俺は足音を立てている。

「六階層、か。そろそろキツくなってきたな」

ぼつり、と。雨が上がった翌日に溜まっていた水滴が落ちたかのように、か細い声で呟く。

大声を出せば魔物が集まってくる可能性もある。

そうになったら、たった一人で歩いている俺には対処しきれなくなる可能性が高い。

そんな事を思っ、ひとつ大きな溜息を吐いた。

今俺が居るこの迷宮は、詳しい説明は省くが名を「ケイリオスの学園迷宮」と言い、本来は三人から四人ほどのパーティで行動する場所だ。

義務ではないのだが命を賭けて歩く場所だ、基本的には一人よりも二人、二人よりは三人で歩いた方が危険は少ない。

そう、一年生の時に習った。

習ったのだが、俺は、一人でこの迷宮に挑んでいた。

量産しそうになる溜息を飲み込んで、ただ歩く。溜息ばかり吐い

ていると、運が逃げると聞いたから。

Luckというパラメータが存在する以上、そんなヨタ話も信じざるをえない。

曲がり角に差し掛かった辺りで、俺は壁の影に身を隠す。

壁を背に、辺りに気を配りながら角の向こうに視線だけを投げかける。

……大丈夫、モンスターはいない。

モンスターの集団に出くわすなんて珍しいことでもない。

この階層の敵なら、流石の俺でも問題なく勝てる。だが、それは一対一でのお話。

ソロで迷宮にもぐっている俺にとって、一対多とは何よりも忌避すべき事なのだ。

これが多人数のパーティだと、対して確認せずに突っ込んでもなんとかなる場合が多いのだが

人間対魔物の二対四と一対二は大きく意味が違ってくる。ので、俺はこうしておっかなびつくり進んでいるというわけだ。

たまには何にも気にせずダンジョンを進んでみたいとは思うが、それで命を落としちゃ洒落にならない。だからこうして俺は慎重に進んでいる。

安全を確認した上で角を曲がり、歩を進める。

しばらくは真っ直ぐ。挟み撃ちが怖いが、まあ進むほかあるまい。

ああ、後ろを警戒してくれるパートナーがいりゃあおっかなびつくり進むことも無いのになあ。

さて。コレだけ愚痴っていれば分かるとは思うが、別に俺はソロプレイなんぞしたくてしているわけではない。

一匹狼を気取ってみたりだとか、一年次の座学がNo.1だったから力みたいなの奴らとは一緒になれない、とかお高く留まっている訳ではない。

むしろ散々言っている通り仲間が欲しくてしょうがないくらいだ。もう半ば諦めているけれど。

じゃあ何が原因で、二年生になってダンジョンにもぐる事が解禁されて早々にソロでの探索なんて、馬鹿な真似をしているかという

と
「(……いるな)」

長い一本道を何事も無く歩ききり、また曲がり角に差し掛かる。

顔だけ出して覗く必要も無い、魔物の気配だ。曲がり角の近くに一匹、魔物が居る。

恐らくは気付かれていないので、こうしてこっちが先に気付ければ先手が仕掛けれる。

少人数な分(と、言うよりか一人なのだが)敵に気取られづらいのはソロの数少ない長所だろうか。

魔術職にも関わらずソロの俺が魔術を唱えるには、先制攻撃を取るしかない。

普通ならば、前衛の戦士職が詠唱の時間を稼いでくれたりするが、ソロの俺にそんな甘えは許されない。

戦闘に入ってしまったえば呪文の詠唱などしている暇はないのだ。俺は、自分の『ジヨブ』の初期スキルの詠唱を始める。

全てに仇成す存在よ

我の呼びかけに応じ、仇成すものを引きずりこめ、その汚泥の底に同胞を増やそう、共に呪おう、この世の全てを

全てを呪い、万物を汚泥と化せ

「『ポイズンプール』！」

スキルの名をはっきりと発声し、魔力を解き放つ。

曲がり角の向こう、スキルで指定した範囲が黒い輝きを放つと同時に、俺は駆け出した。

角を曲がる直前、敵の姿よりも先に見えたのは毒の沼。

これはダンジョンに仕掛けてある罠ではない。俺が今唱えた呪文スキル、『ポイズンプール』に依る地面の毒沼化だ。

そしてこの曲がり角を抜ければ、俺が作成した毒沼に浸かる敵の姿が

無かった。

「……………飛行型の魔物ですかそうですね」

其処にあったのは、戦闘開始直前から既に毒状態にかかった敵の姿などでは断じてなく。

突然地面が黒く光って驚いた、という様子を見せる、飛行中の洞窟（こうもり（Lv4））。

……………ポイズンプール。それが我が初期スキルの名前。

初期スキルにしては異例とも言える詠唱の長さ。

敵味方問わず、毒沼に足を踏み入れた毒耐性の無い者を、問答無用で毒状態にするスキル。

範囲の場所は指定だが、大きさの融通が利かず固定（スキルLv上昇で高燃費化&広範囲化）。

仲間を巻き込むくせに飛行中の敵にはまるで効果が無いという駄目駄目仕様。

そのくせ消費MPは高め。

救いようが無い。本当に救いようが無いスキルだ。

呆れていたと思われる洞窟こつもりも正気に戻り、俺に襲い掛かってくる。

……勿論、下の毒沼を無視して。

そう、俺がソロでの冒険を強いられている理由は。

「ちくしょう、せめてダメージ与えるスキルくれよおおおッ！」

選択のやり直しが効かない、ダンジョンを進む上で最も大切な『ジヨブ』の選択肢が一つしかなく、そのジヨブが途方も無く嫌われるかつ使えない『呪術師』だったという一点に尽きた。

こうして俺（Lv8）は洞窟こつもり（Lv4）に近接戦闘で立ち向かっていく。前衛職じゃないのに。

この階層の適正レベルは5あれば楽勝！なのにレベル8で慎重に進んでいく。

ついでに言うならたった一人で。

俺の名前はレーゼIIゼフィス。

空前絶後の超絶地雷ジヨブ『呪術師』に21年ぶりに就いたいや、就かねばならなかったいち男子生徒だ。

ケイリオスの学園迷宮、と呼ばれる場所がある。

世界最大の大陸、その中心に存在する、正に世界の中心とでも言うべき場所。

この迷宮が発見されてより700年、人は常にこの迷宮と共にあった。

時には夢の様な効果を持つ霊薬を。

時には竜すら屠る伝説の名剣を。

時には歴史を数百年分進めるとてもない技術を。

その迷宮の中には何があるかも分からず、それでもその迷宮の中には、なんでもあった。

それゆえに人々は生命を、種を維持するという最重要の行為の次に重要な行為として、その迷宮の探索を位置づけた。

高みを、生物としての進化 技術を進歩させるには、それが一番の近道だったから。

だが知識の足らぬ冒険は、悪戯に死者を生むだけだった。

なにせその迷宮は、まだ謎があることしか分かっていないのだ。輝かしいばかりの宝物も、幸運な敗北者がその一端を掠め取ってきただけに過ぎない。

だから人々は、その迷宮に入る者を育成する事にした。

分かる限りの情報。それは良く姿を確認される魔物の情報であったり、メジャーな 冒険者の多くを飲み込んでいった 畏の対処法であったり。

最初は小さな集まりだったものは何時だか教室になり、学校へとなっていた。

はじめは迷宮から離れた場所にあった学校は、何時しか迷宮に挑むものの義務になり、学校は迷宮のすぐ傍へと移転した。

これが、その迷宮が『ケイリオスの学園迷宮』と呼ばれるようになった起りである。

「と、まあ、二年生になったお前達はこれくらいは知っているよな」

大きな黒板の前に立つ女性が、長い教鞭で黒板を叩きながら、声を教室の隅々にいきわたらせた。

今日はノーム曜日。休む事が義務であるウイスプ曜日を前にした、一週間のうち唯一の座学の日である。

この俺、レーゼ「ゼ」フェイスも与えられた席に座り、その内容を白紙の書物に写していた。

俺達第412期生が二年生になってから早一ヶ月。

本日二時限目の授業となる『迷宮歴史学』の内容は、一年次の復習と言う内容だった。

いつもは迷宮に関する偉人や、様々な事件や逸話について語られるこの授業だが、今日は何故だかこういった運びになった。

多分来月のテストに出るんだろつなあ、なんて思いながら、俺は黒板から視線を外さない。

この学園では、二ヶ月毎にテストがある。たぶん、去年の内容は今年第一回目となるテストの範囲内なのだろう。

それに気がついていてる奴はペンを動かして、そのほかの奴らはだいたいが寝ていた。

日々、迷宮探索に精を出しているのだろう。疲れが死に繋がるこの学校で、居眠りは大した罰を受けない。授業態度が少々マイナスになる程度だ。

だが結局のところ、大切な情報　たとえば、強敵に出くわした時の対処など　を聞き逃せば、困るのは自分。

こういう授業は兎も角として、授業はマジメに受けるほかない。……まあ、他の授業で寝ている奴も多いけど。

とはいえ、そんな比較対象がいるせいか、俺の授業態度は教師陣には中々好評だった。

こうしてペンを走らせる類の授業は、大体学年トップなのだけが自慢だ。実技　迷宮の探索になると途端に成績が落ち込むだけに。

「さて、授業の内容は一年次の復習だ。誰かに答えてもらおうか。ええと……ゼフィス。ジョブの起こりについて軽く説明してみる」

物思いに耽りつつも真面目に授業を受けていると、黒板の前に立つ女性　言うまでも無く教師　が自分を呼ぶ声が聞こえる。どうやら回答権を渡してくれたようだ。無言で行われた立て、との指示を受け、席を立つ。

「はい、ジョブとは　」

掻い摘んで説明しよう。知っている事さえ伝われば、悪い評価はつくまい。

「ジョブとは、迷宮の発見から200年から300年の間に発見された　システム、とでも言うべき技術の事です」

ある日、迷宮のどこかでとある鉱石が発見された。

水晶に良く似た見た目の、まるで透明な石。とある冒険者がそれを手に取った瞬間、その冒険者は不思議な体験をする。

その冒険者以外に確かめる方法は無いが、冒険者は「自分の思考の中で可能性を選択した」と言った。

当時居合わせた仲間達は幻覚を見せる類のトラップアイテムだろう　と取り合わなかったが、すぐにその考えを改めることとなった。

水晶を取った冒険者　名前をギルと言う　の動きが、見違えるようによくなったのだ。

こうなれば仲間達も話を信じざるをえない。

時には協力し合い、時には見つけた水晶を奪い合い　そうして彼らはたどり着いた。意外にもアツサリとした真実に。

とある階層にその石版はあった。

当時、唯一ジョブの力を持つ者達だからこそ手に入れえた、失われた英知。

水晶の名前は『潜命石』と言い、手にした者の可能性を示す石だと言う事。

手にした者が持つ可能性を発現させる役割を持つ、と言う事。既に石を手にした者が触っても、何も起きないということ。

当時から迷宮を旅するにあたって、数人のパーティで役割を決めて旅することは珍しくなかった。

体を鍛えた者であれば前に出て魔物と切り結んだり。魔法が使えるものであれば、前衛が敵を食い止めている間に後ろから魔法を撃つ、などがそれだ。

潜命石は、その可能性をその場で発現させる、というものだった。例えば戦士の才能を持つものであれば、その場で石の加護を得て、戦士になれる。

魔術師と剣士の才能を持つものであれば、どちらかから選択して加護を得る事が出来る。

才能に依存するとは言え、手っ取り早く、大きな力を得るための手段。それが潜命石だった。

ちなみに、その場で一番有用な情報はその他諸々の情報ではなく、潜命石が当時の技術でさえ作れるという事だった。……しかも思いのほか安価に。

見つけた潜命石を奪い合って殺しあつた冒険者たちも居たことを考えると、随分と皮肉な話である。

ともあれ、そうして石を得る事によって目覚める『天職』を人々は『ジョブ』と呼んだ

とまあ、ざっと説明するとこんなものだろうか。

因みにこの俺、レーゼ^{レゼ}ゼフィスは7つあるジョブの内、最も使えないと評判の呪術師に就いている。

この職に就いた冒険者はゆうに21年振りである。あまりにも地雷すぎるので。

ともあれ、黒板の前に立つローレル教諭は俺の答えに満足してくれたようだ。

彼女は頷きながら俺に着席を促し、自身の説明に戻る。

「うむ、いい答えだ。ジョブには『戦士』『魔術師』『探検家』『剣士』『アーチャー』『ヒーラー』そして『呪術師』の7つがある。

二年生となつたお前たちは、必ずどれかのジョブに着いているだろうし、説明は不要かな？

……まあ、なんとというか、呪術師に関しては私も説明できんしな

ばつが悪そうに、ローレル教諭は俺を見た。

……教師ですら分からないブラックボックス。それが呪術師だ。
21年も情報が全く更新されなかったマイナー中のマイナー。
ポイズンプールによるフレンドリーファイアからなるマイナスイ
メージだけが先行した結果、いまの呪術師がある。
その所為で俺はソロでの冒険を余儀なくされているのだ。全くだ
うしようもないジヨブだ。

……などと考えていると、二時間目の終了を告げる鐘が鳴る。
誰とも無く天井を見上げ始め、先生が手を叩く。

「よし！ それでは二時間目は此処までだ。皆ご苦労だったな」

言いながらに荷物を纏め始めるローレル教諭に続き、生徒たちも
昼食の準備を始めた。

二時限目が終われば昼食の時間で、それが終われば一時限の授業
を受けて解散。それが我が校のシステムだ。

因みに一時限は約一時間半である。

学校が終わればその後は自由時間だ。

ウィスプ曜日を満喫する為に早めに休むやつもいるし、フライン
グして思う存分遊ぶ奴、迷宮に軽くもぐる奴もいる。

俺は今回、三つ目の選択肢を選ぶ事にした。

そろそろ十階層を突破する二年生も出てきている。俺も負けては
いられない。

ソロが厳しいのは重々承知だし、レベルだけでも上げておかねば。
俺は奮起する。ジヨブのハンデくらいでめげられるか。俺には
目的があるのだ。この迷宮を研究し尽くすという目的が！

ともあれ先ずは学校を終わらせないと。

そのためには先ず腹ごしらえだ　と、俺はカバンから自作の弁

当を取り出した。

すると、隣から声がかかる。

「終わったね、レーゼ君」

響く鈴の様な声は、クラス委員長のイレイン「カートニックスさんのものだった。

席が隣同士と言う事もあり、彼女とは話す機会も多い。

「ん、ああ、終わったな。今日の内容テストに出るっばいよな」

「そうだね。きちんとノートは取ったかい？ って、聞くまでも無いか」

二人で軽く笑い合い、それでも昼食の準備は休めない。

お互いに場所を移動する気は無く、最近はよく一緒に昼食を済ませていた。

「しかしレーゼ君は流石だね。細かい雑学までよく覚えているものだよ」

女の子らしい小さな弁当を広げ、委員長が言う。

話の内容は、先ほどのジョブの質問についてだろう。

個人的には必要最低限の知識を話しただけなので、これで褒められるというのは少々むずがゆい。

「そうか？ こんなもんだと思うけどな。

でも賛辞は素直に受け取っとくよ。なにせこれだけが取り柄みたいなモンでね」

ちょっと自虐を含め、それでも俺は笑う。

座学の成績だけで見れば一応はまだ学年一位だし、俺が人に誇れるものなんてこれくらいしかない。

実技 迷宮の探索になると、途端に駄目になる以上、座学で成績を稼ぐしかないのは悲しいものだ。

因みにこの委員長、俺が手間取っている（到達した事すらない）10階層は二年生に進級してから一週間でクリア済みだ。此处数年間の最速記録らしい。

つまり俺よりずっと強いつてことだ。なんだか情けない。

「そんな事はないと思うんだけどね。

勉強以外の頭も切れるし運動神経もいいし……はあ、ジョブが残念でならないよ」

だが、そんな委員長はやたらと俺を買ってくれている（流石にジョブは認められないらしいが）。

既に誘われていなければ、パーティーを組みたかった、と言ってくれたほどに。

「ジョブは正直しようがないさ、もう諦めてる。

せめてパーティーメンバーさえいれば、もういっそ前衛でもやるのになあ」

溜息と共に財布からステータスカードを取り出し、眺める。

そこには文字と数字の羅列が並んでいた。

俺の名前を筆頭に、レベルといわれる強さの目安。力や魔力などの名詞の横に、数値。

ステータスカードとは、二年生以上の学生ならば必ず持っている、身分証明の様なもの。

レベル幾つ以上 などの入場制限が成されているダンジョンに

入る際の証明のほか、自分の強さを知る目安にもなる便利なカードだ。

そのカードに目を走らせれば、他のジョブでは先ず見れないくらいに均等に整った数値の数々。

ジョブに就いている人間は、戦闘経験を積みレベルが上がれば、そのほかのステータスも連なって上がる。

その際の上昇値は自らの行動とジョブに依存するのだ。戦士や剣士ならば力が伸びやすく、魔術師ならば魔力が伸びやすいといった具合に。

そして我がジョブの呪術師だが　上がりやすい能力が無い。故に生まれたこの平均。

スキルが使えなくて、特化した技能も無いとか本当に泣けてくる。

「悪いけどちょっと見せてもらっても良いかい？」

身を乗り出してカードを見ようとする委員長。

それは持ち主の強さを数値化するカードだ。個人情報のお塊であるソレを見せるのは本当は褒められたことではないが、友人である委員長を信用して俺はカードを差し出した。

「なるほどねえ、やっぱり呪術師なんだなあ……」

しみじみ、残念そうに委員長は眉を吊り下げた。そんな目をしないでくれよ、悲しくなるから。

因みにこのカード、偽造しようが無い。

感応鉱石と呼ばれる特殊な材質で出来たソレは、いくら何を書こうと掘ろうと、瞬時にあるべき姿に戻ってしまうのだから。

「全体的に高くはあるみたいだね。同レベル帯の特化職には負ける

けど、低い能力が無いといつかなんと云うか……確かに前衛職もギリギリできるかも」

ステータスカードを返しながら、苦笑いをする委員長。
一応、見た目もやしな俺でも前衛に必要なステータスは揃っているのだ。

同レベル帯は流石に無理があるが、数レベル下の戦士となら余裕で渡り合える。そんなステータス。
だが

「魔法職なんだよねえ」

「魔法職なんだよなあ」

呪術師は後衛で戦う魔法職なのだ。

本来ならばこの『力』は魔法職の死にステと呼ばれる無駄な数値である。前で戦わざるを得ない俺はフル活用しているが。

勿論戦士や剣士ならば必須とも言えるステータスのだが、魔法職がこの数値に頼るのはまさしく『この身ひとつ』の時しかない。

ああ、仲間が欲しいなあ。仲間がいたらこんなにめきめき力ばかり伸びないのに。

「本当にごめんね、私が組んであげたいんだけどさ」

盛大な溜息。

Luckが逃げるぞ委員長。

「気にすんなって。なんかソロもなれてきたしさ。

それよりメシ食べようぜ。俺、放課後迷宮にもぐるから体力くらいはつけとかないと」

これ以上空気が暗くなる前に、本来の目的に誘導する。
昼食時くらい明るくいこう。

どうせ迷宮に潜ればデロデロした毒出すしか能が無いんだから。

……あれ？ おかしいな。

瞳から涙が出てくるヨ？

ともあれ、俺達は昼食を開始する。

そこに先ほどまでの暗いムードは無く、俺達はしばしの休息を楽しんだ。

地味な用語

『呪術師』 ジョブ

レーゼがこのジョブしか選べなかったことにより21年ぶりに現れた希少ジョブ。絶滅危惧種というか、絶滅していた。

初期スキルが圧倒的に使いにくく、初期スキルによるフレンドリーファイアから一気に地雷の名を欲しいがままにしていた。

一応後衛の魔法職にカテゴライズされる割に、魔力が低め。代わりに他の能力と合わせて均等に伸びる。

選択する者が居なかった故に情報が殆ど無く、ただただ使えないイメージが定着してしまった悲しいジョブ。

書物によると、凄まじく地味なスキルばかりを覚えるらしい。

『レーゼ』ゼフィス』 人間/呪術師

物語の主人公、16歳。

身長はさほど高くは無いが、そこそこの顔は整っている。

髪色はこの大陸では珍しくない銀。

一年次は座学で常にトップを取っていたため多くの期待を集めていたが、一年次最後のジヨブ選択で21年ぶりに呪術師に就いた生徒として悪い方向で話題になる。

現在、二年次生に二人しかいないパーティ無所属のうち一人。

運動神経は良いのがせめてもの救いだろうか。

第二話 不意打ちと弱いものいじめは迷宮の華

生徒たちのアフタースリー。午後三時を回って少し経つたいま、俺は迷宮の受付に向かっていた。

世界最大の施設であるケイリオス学園は途方も無く広い。

ちよつとした移動でも10分、20分を要するのは当たり前といった具合だし、端から端までを歩いたらどれだけかかるか、俺には想像もつかないほどだ。

ちなみに受付、とは迷宮の入り口に設置された、いわば検問のことである。

ケイリオスの学園迷宮は途轍もなく危険な場所なので、この中に入るには資格が要るのだ。

具体的に資格とは、この学校に在籍中かつ二年次以降に進んだ生徒であることか、学校の卒業生であることの二つ。

言うまでも無く俺は前者だが、後者の存在もあって学園には大人も入り混じり多種多様な人間で溢れている。

受付ではその資格をチェックし、学園側が可と認めた者を迷宮へと通す作業を行っている。

資格だのなんだのと、堅苦しいことを言ったが、ぶっちゃけ卒業さえしてしまえばいつでも入れるというのが現状だ。

まあ迷宮内で殺人等の罪を犯せば資格を剥奪される事もあるが

しばらく歩いているうちに俺は受付へと到達する。

いつもながら混んでるなあ、と行列を見て、またその一部となった自分に苦笑する。

こんなに大人数だと、迷宮内が混雑するんじゃないか？ と最初は思っていたが、どうやら違うらしい。

迷宮は日々変化し、また、幾つもあると伝えられている。

同じ入り口を同時に通った筈でも、いつの間にか冒険者たちは散り散りバラバラ。全く違う迷宮にたどり着いてしまうのだ。

この現象から、一説には迷宮が異次元にあるのでは、との仮説が立てられてたりする。実際、最近になってかなり有力な説らしいことが分かった。

……まあ、ぼっちの俺には関係ない話か。

溢れる涙を留め、しばらく並んでいると近くから怒鳴り声が聞こえる。

声の方向を見てみれば、そこには野次馬と、その中心のパーティと思われる人々が居た。

どうやら4人パーティのようだが……あの感じだと三対一で割れてるって所か？ 恐らくは喧嘩なんだろうな。

「信じられないわ。あんた達、それでも前衛職？

魔術師の魔法が怖くて、どうして前衛が出来るって言うの？」

少数の方には、少しばかり見覚えがあった。

確かあいつは現在成績学年トップの シアっつたっけ？ シアッウィーアディとかそんな名前だった気がする。

ああ、思い出した。一年の時いつも突っかかってきた人だ。

なんか何時も学年二位だったのが気に食わなかったらしい。

現在はなんでも天才魔術師として名を馳せているそうだ。

しかしまあ、あの言い草はまずいだらうなあ。

魔術師というジョブは強力だ。迷宮内で強敵を相手にすれば、主力となるのはまず魔術師。そう言い切って良いくらいに。

強烈な威力のスキルがあったり、覚えていくスキルの豊富な属性

のお陰で知ってさえいれば必ずといって良いほどに敵の弱点を突けたり。

指定した敵に状態異常を付加、なんてのもあったかな？ 呪術師がそれをするためには毒沼等必ず何らかの接触が必要なのに。

世間での魔術師の評価は『冒険に必須な大火力』だ。指定型の状態異常付与とスキルの存在により、時たま呪術師の上位互換とも言われる。呪術師が冷遇される原因のうち一つだ。

兎も角、そんな高評価の魔術師だからこそ、他の職業よりも自己を高く見る奴等が多い。

今の台詞なんかその典型だろう。前衛職は時間を稼ぐためだけのもの、範囲に入っても根性で避けて当然。暗にそう語っているのだから。

「なんだと！？ てめえこそ前衛がいなきゃ呪文の一つも唱えられねえクセに、調子乗りやがって！」

そんな風に言われれば、前衛の方々も黙っちゃいられない。

なんだかんだ言っても魔法職がスキルの詠唱を出来るのは、前衛の仲間が詠唱の時間を稼ぐ、というのが前提条件だから。

戦士は安定した攻撃力や素早い身のこなしで、仲間を守ったり敵の足止めをしたりするのが得意な職業。

だが魔法は愚か、派手な威力を持ったスキルなどは戦士には無い。硬い敵が相手だとジリ貧になり易いのだ。

そして、前で戦う戦士たちに長期戦による肉体の疲労は禁物。僅かな疲れでも長い迷宮を歩くたびに蓄積しては、疲れきって当たる攻撃も当たらないし、滅茶苦茶な剣閃は敵を切る事もままならない場合がある。

俺から言わせれば、お互いに依存しあっているのにお互いが自らを立てようとしてしまうのだ。

だからこそ、あんな風な喧嘩は日常茶飯事と言うくらいに良く見

る。パーティ組めるだけ境遇に感謝しろよ！ と叫びたくなるのはぼっちの秘密。

受付の順番を待つあいだ、俺は遠目にそのやり取りを見ていた。

大きな声で罵り合って恥ずかしくないのかな。

野次馬も煽るし、治まる気配がなさそう。

と思っていたのだが、唐突に少女が片手を裏返し、呆れた口調での宣言により喧嘩はアッサリと幕を閉じた。

「……はあ。付き合ってらんない。

勝手にすれば？ 魔術師の重要性もわからない馬鹿と、パーティなんか組んでられないわ」

そう言つて、手に持っていた袋の中から何かを投げ捨てる。

空しい音を響かせて地面に叩きつけられた何か 音からすると金属 を無感動に見つめ、身を翻して歩き出す少女。

(元)仲間達もとうとうその様に何かを諦めたようで、三人揃ってどこかへ行ってしまった。勿論、別れ際彼女の背中に思い切りの罵詈雑言を浴びせかけて。

周りから「あーあー」といった空気が伝わってくる。

俺はソレを、パーティを組んでも確執とか大変なんだなあ、とどこか他人事のように見つめていた。

周りの噂話が聞こえる。彼女がこんな風にパーティを一方的に解散したのは、分かっているだけでもこれで3回目らしい。とすると……単純計算で平均10日の使い捨てパーティか。なんと贅沢な。

ボーっとしながらも人の流れに沿って緩やかに歩いてゆく。

すると自分でも気がつかないうちに受付にたどり着いていたらしい。喧嘩騒ぎに意識をさいていたら、思ったよりも列は早く進んで

いたようだ。

恐らく自分を呼んでいるであろう声で、俺は自分が何故此処にいるかを思い出した。

危ない危ない。列を混雑させて周囲の白い視線を横取りするところだった。

「では次の方どうぞ……あ、ゼフィスさんじゃないですか？」

その声はやはり自分に掛けられたもので、もはや顔見知りとなった受付の少女の声だった。

「お久しぶりです、シャーテさん」

最初に会ったとき、呪術師！？ と驚かれてはや一ヶ月。

迷宮の入り口と学園内で時たま出会うこの少女とは、知り合いと呼べる仲になっていた。

名前をシャーテ・エレデトク。『管理部』に所属する、俺と同じ年の少女だ。

管理部とは、冒険者候補とは違う枠組みでケイリオス学園に入学した生徒のことである。

学園の事務やこう言った受付等の仕事を学ぶ、いわば未来の学園事務員である。因みに国家資格。

こうして受付をしているのは授業の一環だ。……と、前に聞いた気がする。

「最近会わないね？ また今度一緒にご飯でも食べようよ。」

っと、後がつかえちゃうから仕事モードに入るね」

受付と学園内で幾度か会ううちに意気投合。最近では委員長と一緒に

にいるから昼時に会うことは少なくなっただが、何度か食事を共にした仲でもある。

友人かどうかと言われると、仕事仲間の感覚に近い、とはその時の話だ。

「本日のご利用はお一人ですか？」

「一人です」

「ですよねー」

こうして人の心を抉るのが上手い人でもある。無自覚って怖い。だがまあ、俺に対して以外は仕事内容も接客態度も良いらしく、ひそかに人気らしい。

一度くだけた仲になるとこうなるんだろうなあ、なんて思いながら、生徒証とステータスカードを提示する。

「はい、確認いたしました。では此方へとお進みください。

……頑張つてね！」

基本的には良い人、と頭の中でカテゴライズした少女の声に導かれ、指示された方向へと移動する。

指定されたゲートから迷宮のエントランスへと進み、係りの人に軽く挨拶。

「本日は一階層からのご利用でよろしいでしょうか？」

質問に対してはい、と頷くと、いくつかある迷宮の入り口へと案内される。

この迷宮が、何階層まで続いているかはいまだ定かではないが、迷宮を進むうちに分かった数少ない迷宮のシステムの一つに、チェックポイントがある。

迷宮には十階層ごとにボスと呼ばれる強力な魔物がいて、それらを倒すと魔石と呼ばれるアイテムが手に入るのだ。

今案内されなかった入り口のどれか数個がそうだったか　そこにある転送装置に石をかざすと、倒したボスの魔石に応じてそのボスが統べていた十の倍数階に転移する事が出来る。

例えば、十階層のボスを倒して魔石を手にいれ、その魔石をかざせば十階層へとワープする事が出来る、と言った具合に。

このシステムが無ければ、多くの冒険者はまだ五十階層を突破してないといわれる。長く続く迷宮は、装備を整えて下っていくだけでも重労働なのだ。

余談だが、魔石の売買や譲渡には凄まじく重い罪が科せられる。生徒であれば即退学、卒業生であれば資格の即剥奪は当たり前、といった具合。

十階層を突破できない奴が、二十・三十階層に行くなんて自殺も良いところ。既にその階層を踏破した者に着いていくならまだしも、という話だ。

まあ兎も角だ。

指示のあった場所を進んでいき、通路が薄暗くなる。

もう、係りの人はついてこなかった。

なぜならば、そう。

あと数歩を進めば　そこは迷宮の中だからだ。

暗かった通路は突然に、不自然な明るさを持って、通じていた場所を照らす。

ぼんやりと発光する壁、どこかから聞こえる魔物の声。命がかかっている以上、何度来ても緊張する。

そう、ここが　ケイリオスの学園迷宮。

「さて、ちいとはかし気合入れないとな」

眼下に広がる無機質な壁の連続を見て、俺は緊張の糸を引き締め
た。

自分に言い聞かせるように宣言し、俺は入ってきた出口から遠ざ
かる。

勿論、来た道を戻れば元いたエントランスに帰ることが出来る。

あまり使われる手段ではないが

まあその辺はそのうち説明するでしょう。

「しかし……何時見ても不思議だな。

あれだけいた人が、一人も見えないなんて」

慎重に歩き始めた俺は、ふとそんな疑問を口にした。

行列と言うに等しい、受付前の人々。その全ては、この迷宮を目
指していたし、軽い手続きを終えた人々は、皆この迷宮の中に入っ
た。

だが、こうして広がる迷宮に人の姿は俺以外に無く、俺はやっぱ
り一人身で探索をしている。

あの入り口は異次元に繋がっていて、その異次元に入るとランダ
ムで幾つもある迷宮のうち一つに飛ばされる　とある冒険者は言
った。

そしてその説は、現在最も有力な説である。

それを思い出して、俺は納得した。だって、それ以外につけれる
説明が無いのだから。

因みに、そんな不安定な迷宮でのパーティ行動を可能にした

のが共鳴鋼である。

同じ共鳴鋼から作った何かを持つ人間は、同じ迷宮へと移動する事が可能になるらしい。これで作られたアクセサリーやプレートは、仲間の証として冒険者にとって特別なものとして扱われる。先ほど喧嘩していた魔術師 シアが別れ際に捨てた金属も、恐らくは共鳴鋼だろう。

原理はまだ不明だが どこかのキザな冒険者が、冒険者仲間の女性に一つの鉱石から打ち出したおそろいのピアスをプレゼントしたことから偶然発見されたとか。偶然とは怖い。

余談だが、これをもたない人間同士が同じ洞窟に行く事もたまにあると聞いた。確か、マッチングとかいうらしい。

物思いに耽りながらも慎重に、俺は歩みを進める。

俺は、今日こそ十階層に到達してやる、とやんわり決意していた。一週間前からコツコツ貯めた回復薬（傷を治す）と強壮剤（体力を回復する）。この量なら、俺でも行けるはずだ！

なるだけ魔物との戦闘を避け、それでいて傷と疲労は薬で回復する。

慎重なゴリ押しという謎の作戦を立てた俺は、燃えていた。

とりあえずのところ、最優先は階段探し。

どんな迷宮でも律儀に上層と下層をつなぐ階段だけは存在する。

本当に どうなっているのやら、この迷宮は。

（まあ、ソレを解き明かすために潜ってるんだけどな……っと、クロウバイツか。こっちにゃ気付いてないな？）

自らの好奇心を再確認し、俺は身を潜めた。

眼の前に、見知った魔物の後姿を見受けたからだ。

クロウバイツLv1。鋭い爪と牙を持つ、体高60cmほど

の魔物。

人を殺傷するだけの力は持つ、魔獣に分類される魔物だが、ぶっちゃけさほど強くない。

1年次の締めくくりとして、4人組の班でこいつを倒すという内容の授業があることから、クロウバイツ先生のあだ名で親しまれる(?)こともある。

俺も、二年生になってからしばらくはお世話になった。

二階層に下った瞬間、敵の強さに大泣きさせられた俺は、よくコイツを狩って経験を積んだものだ。

そんな私も今ではLv8。感謝しています先生。

「だが見逃さん」

感謝など何処にいったか、思考の最中にも気配を消して忍び寄っていた俺は、クロウバイツの脳天に剣を突き刺した。

声を上げる間もなく絶命するクロウバイツ。その体が血を吹き出しながらも、空气中に溶けるようにして魔力へと分解されていく。

魔物を避けるといったがアレは厳密な意味では正しくない。

此方が無傷で殺れるようなら殺る。そうすればドロップアイテムが出るかもしれないし、僅かな経験でも得る事が出来る。

まあ要するに天秤にかけ続けて進んでいくということだ。

今日十階層を攻略するとは言ったが、まだ焦るような時間でもない。在学期間中に50階層に到達すれば良いのだ、むしろ焦りは禁物である。俺のやりわり決意は柔らかい。

だから、受けるダメージと消耗するであろう体力、それと敵から得るものを天秤にかけて、傾いた方を取るのだ。

この場合、敵は完全に油断していて、此方の状況は万全。

一発で倒せる自信があったし、それによる疲労も疲労の内に入らないような微細なもの。

なら殺すしかないでしょう。

甘い事言っていていられないんだよ！ こっちは！

ちなみにドロップアイテムは出ませんでした。俺のLuckは高くないからしょうがないね。

何の感慨も無く、俺は再び行動を開始した。すると、進行方向にまたも敵の気配。

（む、またクロウバイツ……けど今度は2体か。

ノーダメージはムリかな、回り道しよう）

今度は戦わず、敵前逃亡を選択する。

こうしてずる賢く立ち回るのがソロ行動のコツだ。

それにこうした回り道が思わぬ近道に繋がったり、宝物の発見に繋がったりすることは珍しくない。逆もまた然りだが。

良いことばかりではないが、逃亡は恥ではない。それが、一年次に嫌というほど叩き込まれた教訓だ！

実際に、そうこう逃げ回っているうちに俺は二階層へと下る階段を発見した。

一々戦闘をしているよりかは時間も早く、疲労も少なく見つけれられたうちに入るだろう。

自分の選択に自分で評価をつけ、俺は階段へと足を踏み出す。

この階層での僅かな経験のみだが、ダメージはゼロだし疲労もまだそんなに感じない。

支出で言えば十分にプラスだろう。

珍しく幸先の良い（これでも良い方だと言える）出だしに満足しながら、俺は階段を下りていく。

その最中。ふと、小さく、どこか遠くで　恐らく女性のものと思える、叫び声がした気がした。

いやまさかな。嫌な予感に別れを告げるため、頭を振るう。

耳に走った違和感をただの気のせいと結論付け、俺は再び階段を下りていった

地味な用語解説

『ポイズンプール』　スキル/呪術師

指定箇所を毒の沼とする呪術師の初期スキル。

足を踏み入れた者を毒にする事が出来る。

効果範囲は初期に覚えるスキルにしては広い。

だが詠唱が長く、MPの消費が高い。直接のダメージを与えられないことが最大の弱点。

ついでに仲間や自分にも容赦なく毒状態を与えるので使用には注意が必要。

毒への耐性が高いものでも、無効を持たなくばほぼ確実に毒にする事が出来る。

使い方しただいでは強力なスキルではあるが、無難な他のジョブのスキルと比べると、やはり強烈な使い勝手の悪さが目立つ。

何かの間違いで体内に摂取すると、量や耐性に依るが毒の上位バッドステータス「猛毒」を引き起こす事もある。

物質としての毒性自体はさほど高くないが、徐洗が非常に難しいため、迷宮外での使用は法律によって禁じられている。

『クロウバイツ』　魔物/魔獣　L V 1

迷宮最弱のモンスター。

鋭い爪と牙を持つが、これと戦う頃にはまず負けることはない。ポーッと突っ立っていれば、殺される事もあるかもしれない。一年次のメに四人組でクロウバイツ1体を倒す授業があり、更には最弱故に迷宮最序盤のレベル上げに利用されることが多く、最も人が多く狩った魔物だろう。

余談だがその授業の際、直前で呪術師になっていたレーゼは教師二名&委員長に組んでもらった。

上記の事柄から「クロウバイツ先生」というあだ名で親しまれている。

ドロップアイテムはクロウバイツの爪。市販のナイフが買えないほど貧乏であれば、ナイフの代わりにするのも良いかもしれない。刃を潰して首飾りなどに加工されるのが一般的。

『共鳴鋼』

数百年前に見つかった、古参技術のうち一つ。

同じ共鳴鋼から作り出した何かを持つ者達を、同じ迷宮に導く効果がある。

打ち出したアクセサリ等は一定以上の大きさでないと効力が無い。そのため、五人以上のパーティを組めるほど大きい共鳴鋼は歴史で数えても両手の指の数に届かない。

基本的に冒険者が四人程度のパーティで行動するのも、このため。生徒達は申請者含め四人までの仲間を揃えて申請すると一度だけ人数分セットの共鳴鋼製のバッジをもらえる事になっている。

レーゼ？ 未だに申請できていませんよ。

入り口から深層まで、意外と何処にでもある鉱石だが、見た目の美しさやその『絆』を表す性質から迷宮外でも需要は凄まじく、これ売る事で生計を立てている生徒達も多い。

第三話 勝てば官軍、毒殺大将

目的のモノを見つけて、俺は足を止めた。

地面と靴が擦れて、硬い何かを引っかく音が迷宮に小さく響く。

宝物でも、ドロップ目当ての魔物でもない。シンプルな目的
次の階層へ進む階段だ。

此処に至るまでの自己最短記録を更新しつつ、同時に自己最深記録を更新しようとする俺は、その更新を前に足を止めていた。

「……やっぱ、どう考えてもおかしいよな」

俺にとつての未知、第七階層へ続く階段を眼前に見据え、俺は呟いた。

引っ掛かりがあるというか疑心が払えないというか……

いや、理由は分かっているのだ。第一階層から此処へいたるまで

戦闘が少なすぎる。調子というか、運が良すぎるのだ。

無論、戦闘が無いわけではない。

最初のクロウバイツ戦（戦いとは言えないかもしれないが）を含め、此処までの戦闘は6回。

魔物が徘徊する、入り組んだ迷宮を練り歩くのに、こんなに戦闘回数が少ない事ってありえるだろうか？

否だ。ありえない。

一階層につき一戦闘、なんて少ないにも程がある。

いつもなら……もっと気を張っていても二倍以上は確実に戦って

いるのに。

「やっぱ、マッチングかな？」

ならば、と疑問を口にした。いかな、どうも考え事をすると独り言が多くなる。

まあ階段を目の前にしたこの位置ならば敵に見つかっても構うまい。

より強い魔物がうろつく下層に、上層の魔物達は近づかない。魔物が来そうだったらさっさと下つてしまおう。

……とはいえ、何故だか下層の魔物も上層に昇ってこないんだけどな。この辺の生態もよく分かっているんだよなあ、本当に謎だらけだ、この迷宮は。

それはさておき、俺の考えは多分合っている筈だ。

先ほど、一階層から二階層に移動する際に聞いた叫び声は、確かに実在するものだったという事だろう。十中八九そうだとは思っていたが。

俺が魔物と遭遇しないのは、恐らくと前置きが付くが、マッチングした冒険者が行く先々で暴れているんだろう。

今もホラ、耳を澄ませばかすかに女性の声が聞こえてくる。

怒っているような恐怖しているような、俗に言う半狂乱な状態の声が、かすかに響いてくるのだ。

これも憶測だが、魔物と戦っては叫んで、叫んでは魔物を引き寄せているんだろう。

基本のキの字もなっていない。まあ、そのお陰でこちらは助かっているが。

考えてみれば、今までの戦闘は全部階層を下りてすぐだった。見

知らぬ冒険者が俺と同じ階層に下りてくると、魔物が全部そつちに集まるんだろ。ありがとございます！

「ま、気の毒だけどほつとくか」

その方がこつちは助かるし。まだ見ぬ冒険者に礼を言いながら、俺は足を再び動かし、階段へと向かう。

どれだけ魔物を引き寄せようと、あれだけ叫べば自業自得だ。迷宮に入ったらパーティ以外信じるな、が鉄則だ。いま暴れまわつてる誰かさんとかかわりの無い俺には、関係の無い話。

叫ぶ元気があるんだ、きっと大丈夫さ！

一度だけ後ろを振り向き、俺は指を立てた。頼りにしてるぜ！とまだ見ぬ冒険者に指を立て、階段へと進んでいく。

一定の間隔を保つ段差の連続を、しっかりと踏みしめていく。

そして 最後の一段。

第七階層、俺にとって未知の世界到達！

他の同級生達はもうかなりの数が突破しているが、そんな事はどうでも良い。

最深部へ到達してみせる。そんな夢に新たな1ページを刻んだのだから！

……まあ、そんな感慨なくなるほど変わらない光景が続いているんだがな。

ここは階層を進むごとに見た目が変わる、なんて洒落た場所でもない。

何階層まで進もうと、延々と同じ光景が続くだけだ。俺は別にど

うって事ないが、中には代わり映えない光景に精神をやられる冒険者もいる。

とはいえ冒険で生計を立てようとすると、そういうのもしょうがないことなのかな。言ってみれば死の危険と隣り合わせの場所なんだし、死ぬまで冒険を続けなければならぬと思うと嫌になる人もいるのかもしれない。

だが光景なんぞどうでもいいと俺は思う。

見た目がどうあれ、その階層ごとに生息する魔物は違っし、財宝のグレードだって上がっていく。

問題はここから、俺の知らない魔物が出てくるということだ。

知識はあるが百聞は一見にしかず。注意はしすぎても足りるって事は無いだろう。

(さ、張り切っていいこうかな)

なんだか、こう……十階層を突破するのは今日しかない。そんな気すらしていた。

この階層の適正レベルは、たしか前の六階層と代わらない5レベル。

ボスフロアは8レベルと言われている。無論、これは三人から四人のパーティーで戦った時の話だが、適正レベルは若干高めに設定されている。

ならば、あと二回か三回くらい戦えばレベルの上がるこの俺がボスと戦うのは、回復系の道具をどっさり買い込んだ今日しかない気がする。

最悪回復薬がぶ飲みゴリ押しで詠唱を済ませて、毒を食らわせてガン逃げとか、それなりに方法はあるだろう。

魔術師を入れたパーティーだとたまに取られる戦法だ。魔術師の代

わりに俺を入れてくれれば良いのに。

……新しいフロアに着たし愚痴ばっか言ってるられないな。

とにかく、新天地を求めて頑張ろう。十階層を突破すれば背伸び狩りも出来るしな。そろそろこの辺りの敵じゃ限界だ。

決意を新たに、俺は行動を開始する。

場合によっては戦闘をしていくのもいい、なんて考えながら……が。

考えが甘かった。

最初の死角、迷宮に幾つあるか分からない曲がり角。

階段下りてすぐそこを曲がった瞬間に、俺は早くも魔物と八チ合わせてしまった。

しかも、五体ほどの団体さんに。

ユニゾンデビル。群れで行動する、二足歩行の獣。

浅い階層に限定すれば、唯一連携を披露してくる厄介な魔物として有名だ。

それでも獣は獣。深層にいる魔物の様なテレパシーなどは使わないので、その連携自体は拙い。此方もパーティならば各個撃破で容易に撃退が可能だ。

そう、パーティなら。

ソロの俺が最も会ってはいけない類の魔物が、ここに！

「ええー……」

いやいやいや。ちょっと現実逃避してよろしいですか？

「ギイイイーツー！」

あ、ダメですか。

じゃあ見逃していただくって言うのは……

「ギギヤ！ ギイイ！」

あ、そちらも難しい、と……

左様でございますか、はい。

「ギイイイイーツ！」

とかやってる場合じゃあねえっ!？

冗談じゃねえ、一対多で立ち回る能力とか、呪術師にはないんだよ！

故に此处は……逃げる！ 誰だよ今日の俺が運良いとか言ったの！
踵を返し、階段へと全力でダッシュする。

当然、奴らもついて来る。ここでまた違う魔物と出会うのが最悪のケースだが、今回、階段を降りてすぐにこいつらと出会ったのは、不幸中の幸いだらう。

階段を降りるさいちらつと復習したように、魔物が階段を上ってくることは決してない。今回はその習性を利用する。

幸い、AGI（敏捷）は俺の方が若干高いみたいだ。ソロなぶんレベルだけは高いので、それが幸いしたか？ いやいや、パーティいたら戦ってるか。

……よし、冗談を言う程度には落ち着いてきたみたいだ。そのおかげか、なんとか追撃を食らう事無く、俺は階段まで到達することが出来た。

ラストとばかりに階段へと飛び乗ると、中ほどまで駆け上がって

踵を返し、ユニゾンデビルの姿を確認する。

「ギイ……」

ユニゾンデビルの群れは悔しそうに此方を見ている。

あいつらが遠距離攻撃を持っていなくて本当に良かった、と安堵した。

こうなると、何故だか近接型の魔物ですら此方を追う事はなくなる。この状況に持って行き、遠距離攻撃で魔物を倒す事を俗に階段ハメと言う。

実戦とはかけ離れたものだからか経験は全くといって良いほど上らないが、一応ドロップアイテムは出る。

深層では戦利品狙いでこうした戦いも繰り広げられるらしい。

とはいえ、俺は遠距離攻撃を保持しない呪術師。この状況に持っていても、正直一時しのぎだ。

だがやる事がないわけじゃない。遠距離を攻撃する手段が無くとも、遠距離に嫌がらせする手段はある。

本当に使いたくない、最後の手段だったが仕方あるまい。

「『ポイズンプール』！」

詠唱を済ませた、地雷スキルを一発！

かわす間もなく、ユニゾンデビル達は沼に飲み込まれていった。

危険を感じ、慌てて退避するが触った時点でもう遅い。お前らに毒耐性が無いことなど既に知っている。座学No1舐めんな！

「ギ……ゴ……」

そうして、待つこと数分。次々と倒れていくユニゾンデビル達。

毒沼からは出たものの、俺を狙う事は諦めなかったのか、ユニゾンデビルは階段からさほど離れて居ない場所で倒れていった。状態異常の毒のみで魔物を　しかも群れを倒したのは初めてだが、なんというか……

「後味わるっ」

ぱたりぱたりと倒れていく二足歩行の魔物。

そしてそれを見つめる俺。悪趣味にも程があるだろう。

しかも毒殺つて結構えぐい。死体は白目むいてるし、迷宮の床は吐瀉物や吐血で汚れてるし……地獄絵図というに相應しい。

時間経過で死体も汚物も消えて行くとはいえ、見てて気持ち良いもんじゃないなこれ。

まあこれからも必要があれば使わざるを得ないんだけどさ。……

お？ あれドロップアイテムかな？

ユニゾンデビル達の死体が魔力へと還ったあと、ユニゾンデビルの毛皮がたった一つだけ迷宮の床に取り残される。……毒沼の中じやなくて良かった。

……しかしポイズンプール、か。使い方を間違えなきゃ強力かもな。

今回は関係ないが、どんなに防御力や持久力が高い敵でも、時間経過が相手にとってメリットでなくなるのは大きい。

新たな戦術を考察しながら、俺は階段を再び降りていく。

そして、眼下に広がる光景を見て、頭を抑えた。ああ、だから使いたくなかったんだよ。

……この戦術には物凄い欠点があるのだ。

ポイズンプールの指定範囲は、床。残念ながら、高さを指定する事は出来ず、念じた空間の一番低い場所に毒沼を作るスキルな

のだ。

そして俺は、今回階段の一段目の辺りを指定した。正確には、階段の周りを取り巻いているユニゾンデビル達を中心だろうか。

ともかく指定範囲の近くで、一番低い場所は言うまでも無く第七階層の床だ。

……そう、いま階段の真下には、毒沼が広がっているのである。助走のつけれない階段から、それをジャンプで飛び越える事は出来ない。一番身軽な剣士でも難しいんじゃないか……？

そんな状況でユニゾンデビルの毛皮を取りに行くには……っついていうか、この先に進むためにはどうしても通らなければいけない。自らが作った毒沼を。

なので、覚悟を決めて足を踏み出す。

やたらと粘着質な毒沼が、俺の脚を取る。

「うえ……かかってみるとキツいな……」

毒沼に足を踏み入れた俺が率直に抱いたのは、そんな感想。

接触すればほぼ100%かかる故、即効性があるんだな、とは思っていたが……毒ってこんなに即効性があったのか。

こみ上げる吐き気を我慢しつつ、毛皮の方へ。

魔力に還らないうちに毛皮を回収し、袋から解毒薬を取り出す。

ちなみに、魔力製のものだからか、衣服等に毒液の付着はない。

あくまでも指定箇所から動く事は無いようだ。飲み込めば別だが。

「っは、生き返る……」

この解毒薬も即効性があるようで、俺を襲う不快感はすぐさま消えていった。

こりゃあ呪術師が嫌われるのも納得だわ……へたにファイアーボ

ール食らうよりよっぽどキク。

しかも……俺は懐から、ステータスカードを取りだす。

やっぱり。LIFE（生命力）、思ったより減ってるな。秒間ごと
にそれなりに減っていると見た。

毒という状態異常の強さを確認しつつステータスカードをしまい、
今度は回復薬を一気に煽る。

不味いと緊急時に吐き出してしまふ事があるらしいので、回復薬
は爽やかで意外と美味い。

一息を付き、再び先に進もうとする。

……が、大切なことを思い出した。

そういえば今マッチング中なんだっけ……階段直下に毒沼とか笑
えないよな……

「勿体無いけど解毒薬と回復薬一個ずつ置いてくか……」

まだ見ぬ冒険者にはお世話になっていることだし、と袋から二つ
の薬を取り出した。

こんな事してるから地雷って言われるんだろうな。せめてもの配
慮として、使ってもらおう。

簡易地図用の用紙に一筆、『申し訳ありません、毒沼を作成して
しまいましたので、解毒薬等置いて行きます』と書き、その上に回
復薬と解毒薬を置き、その場を後にする。

……しかしもう対団体戦はこりこりだ。そのうち毒を使ってくる
魔物が現れるだろうが、毒はもつと勘弁。

俺は先程よりも自気配の隠匿と敵気配の察知に努め、迷宮を歩き
出した。

敵に鉢合わせないよう、注意しつつ迷宮を進んでいく。

その数分後、今度は割りと近くで叫びが聞こえてきた。

「……何よこの毒沼っ！？ もうやだー！ 帰りたいうっ！」

さすがに良心が痛んだ。

……あれ？ 呪術師が嫌われる理由がポイズンプールなら、毒沼作成者の特定なんか余裕なんじゃないのか？
俺は、背筋に冷たいものを感じた。

地味な用語解説

『ユニゾンデビル』 魔物/亜獣

人間と獣の中間で若干獣寄り、といった具合の種族、亜獣の代表的な魔物。

常に数体の群れで行動し、ある程度の統率を持って『狩り』をする。先手を取られると戦力的に勝る冒険者達ですら苦戦を強いられる。反面、一個体はそれほどの戦闘力は有さない。

各個撃破を心がけると案外楽に倒せるが、数で劣ると急に辛くなる。この用語解説は物語の外のモノなので、ぶっちゃけてメタ的に言うて猿っぽい見た目をしている。

ドロップアイテムは「ユニゾンデビルの毛皮」。

白色の毛皮は美しく、コートなどに用いられる事もある。耐火性能が高いので、火消しを職業とする迷宮外の人間が好んで着る事も。

勿論、迷宮内の冒険者が火属性対策に服を作る事もある。

『回復薬』 道具／消費

グレードによつて正式名称はあるが、冒険者の中では回復薬で通る冒険必需品。

飲むといくらかの傷を癒し、減ったLIFEを回復する効果がある。下のグレードから「キュアボトルブロンズ」「キュアボトルシルバー」「キュアボトルゴールド」の三種がある。

因みに、下から順にオレンジ味、メロン味、イチゴ味である。やはり人気はイチゴ味。高いだけある。

勿論回復量もグレードに応じて多くなる。値段も。

傷やダメージを受けたそばからこれを飲み、ダメージのやり取りを度外視して攻撃し続けることをゴリ押しと言う。

大怪我は治せず、減ったLIFEを減ったそばから回復する程度にしか使えないので注意が必要。要するに飲み続けないと死ぬ。

迷宮の中には、大怪我や死んで間もない者を治す霊薬も存在するらしい。

『強壮薬』 道具／消費

疲労を取り去るお薬。必需品のうち一つ。

疲労は冒険者のポテンシャルを劇的に下げるので、休息等の手段により定期的に取り去る必要がある。

そこで生まれたのがこの薬で、これを飲むと疲れが一気に取れていく。無論、全てではないが。

それでも必需品であるには関わらず、十階層ごとのボス戦に向かうとき、これを忘れたら引き返せ、という程である。

一回の冒険において、ほぼ確実に使うことになる道具の一つ。ウィズプ曜日の前などにも使われる冒険者の味方。

味は不思議な味と表現するほか無い、好き嫌いの分かれる味である。現実的に言えば栄養ドリンク。

『ドロップアイテム』 システム

魔物を倒したさいに時たま出る遺留品。

魔物を倒すと、魔物の体は魔力となって迷宮に還ってゆくが、なんらかの原因で体の一部が迷宮に残る事を言う。

迷宮のほかでは見られない性質を持った物質が多数であり、これら売る事を生業としている冒険者もいる。

質から出やすさ、出にくさまでピンキリであるが、基本的に深層であるほど凄まじい性質を持ったものが多い。

特定の倒し方でないとドロップしないものもあるとか。

第四話 めいきゅうらんでぶー

「……こそ」

ぐい、と一気に強壯薬を呷る。

今日使用した強壯薬はこれで三本目。

健康のため飲みすぎても一日五本くらいまでと目安が定められている以上、これ以上は出来れば飲みたくないなあ、と考える俺は、まだに第七階層を降りることが出来ずにいた。

降る事ができない理由は単純明快、階段が見つからないからだ。

どうやらマッチングした冒険者も同じのようで、先ほどからちよくちよく叫び声が聞こえてきていた。

そのせいで魔物たちは殺気立ち、いたるところで戦闘態勢をとっている。やり辛いつたらありゃしない。

まあ、俺も階段直下に毒沼作成なんてとんでもないマネをしでかしたし、マナー違反だなんだとのたまつつもりはないが。

それを考慮してもやりづらさは変わらないが、俺にそれを責める権利は今のところないし、仕様が無い。

(……ここ、さっき来たな)

こんな思考ももう十回目くらいになるだろうか。

戦闘を避けての探索に、限界が訪れようとしている。俺はそう感じていた。

さっきまでは凄い調子良かったのになあ。

軽く、表面をなぞる程度に頭を掻いた。

(っと、この辺やばいな)

いつものように曲がり角にて、顔のみを動かし、徐々に視界を広げていく。

……沢山いらっしやる事で。そこには、今階層での初戦闘を飾ったユニゾンデビル達の群れが辺りを警戒していた。

音を立てない程度に急いで顔を隠し、踵を返す。

ポイズンプールで先制すれば、流石に勝てない事はない。だが、それをすれば小さくないダメージを受けるだろうし、強壮薬をもう一本使う事になるだろう。

気配を隠匿しての探索は、意外と体力を使う。出来れば次の強壮薬を飲まずに九階層くらいまでは進みたい。

とはいえ、それが難しいであろう事は良く知っている。できるならば、こんなところでくすぶっているものか。

しかし、どうしようか。

今魔物を確認した箇所から離れつつ、俺は考える。

当たり前というか、前提として魔物がいたから通らなかつた道の先に階段があるのはもはや確定している。

見つかった時点でこの階層に俺は居ないし、それは当然のこと。考えるべきは、どう魔物がいた箇所の先に行くかだ。

移動してくれているのがベストだが、それは望みが薄い。

あちらこちらを巡回するタイプの魔物は少なくないが、この階層に出現する主な魔物のユニゾンデビルとリザードモノリスは、あまり動くタイプではないのだ。

とくにリザードモノリスにいたっては石像。近づかない限り絶対に動かない。逆を言えば遠距離攻撃があれば余裕なのだが……そんな便利なもの、呪術師には存在しない。

ならばポイズンプールは、というと石像に効く筈がない。もう近接戦闘を挑むしかないのだ。

しかし後衛職が鉄製のショートソードで倒すには、リザードモノリスは少し厄介だ。

石像だから第一に硬いし、それなりにA G Iも持っている。戦士か剣士なら、そんな問題にはならないだろうし、俺だってそれなりのレベルだから倒す事自体は問題ないのだが

なにせ石だ。叩くだけでも凄まじく疲れる。

しかもあいつら、一度戦闘態勢に入ると階段の前まで絶対に諦めず追ってくるのだ。

では、先にユニゾンデビル等がいた道を突破すれば となると、今度は戦闘の難易度が上がってくる。

ならば逃走はどうだろうか。一応ユニゾンデビルは、この階層で一番A G Iの高い魔物だ。俺は、そのユニゾンデビルより若干A G Iが高い。不意について全力で走れば、先ほどのように振り切る事も可能だろう。

……しかしそれは逃げた先に階段があつてこそ有効な手段。行き止まりでもあれば今度は命すら危ない。結局は全力疾走する時点で疲れているし。

だが戦えば、数の暴力が待ち受けている。勝てないわけではないが、ソロの俺では苦戦は必死。

ううむ、八方塞である。

(さあて、一体どうするか……ん?)

辺りに注意を払いつつ、壁を背に歩いている俺は、背筋に感じた嫌な予感に足を止めた。

壁は背に接面してはいない。何かに背中を触られたわけでもない。なのに感じる、背骨を直接掴まれたかのようなこの感覚。

……その寒さは、耳からやってきているかのような気がする。

勘違いだと良いんだけどなあ。

はは、と乾いた笑いを浮かべる。勿論、声は出していない。

だがこの状況になると、もはや意味が無いと、そんなどうしようもなさも、理解していた。

災厄が、来る。俺はそう予見　否、確信した！

聞こえるのだ！　声が！　声が！

今俺が居る場所に通じる唯一の曲がり角。そのうちユニゾンデビルの群れがいない方　俺が歩いてきた道の先から！

しかも、その声は此方に近づいてくる。逃げようにも、来た道から来るのならば、行ける先はユニゾンデビルの群れのみ。

つまり　挟み撃ち。逃げ場がない。

いや、それだけならば良い。魔物が相手なら、まだ間に合う今のうちにポイズンプールの詠唱を済ませ、毒沼を作成すれば良いだけのこと。

毒沼は状態異常を与えるだけが仕事ではない。その毒沼で足を取る事すらが可能な地形呪術。

その効果のみを見れば使えないスキルではないそれは、逆に言えば足を踏み入れた時のディスプレイアドバンテージが高いからこそ味方から嫌われるスキルでもある。

この速度で声が近づいてきているという事は、声の主は走っているのだろう。仮に足をとって転倒させてしまえば、猛毒の発生すら見込める、ある意味美味しい状況だ。

しかも、この声から察するに敵はユニゾンデビル。

リザードモノリスならば声を上げることはないの、仮にリザードモノリスが混じってしようと、此方に向かう敵の中にユニゾンデビルが含まれる事は確実だ。

ならば何故、俺がソレをしないか？

答えは単純。ユニゾンデビル……というより、魔物が何の意味もなしに叫びながら迷宮を駆けずり廻るなんてありえないから。だかもつと分かりやすい理由があつて

「いいいいやあああつ！ たすけてええええつ！？」

その声の中に、人間のものが混じっていたのだ。

曲がり角を曲がってくる団体さんたちの先頭は、人間の女性だった。

と、いうか

「シアァウィーアデイ！？」

「あつ！ あんた、レーゼァゼフィス！」

さきほど、迷宮に入る前にトラブルを起こしていた魔術師 シ

アァウィーアデイその人だった。

名前を呼ばれたということは、一応覚えられているという認識でいいのだろうか。

……しかしコイツ、魔術師のくせにソロで来たのか？ いや、呪術師のクセに、な俺が言う言葉でもないんだけど……そんなこと言っている場合でもなさそうだ。

読みどおり、後ろに着いてきたのはユニゾンデビル六体。俺のときよりも多い。

というか、こいつらと追いかけることが出来るなんて、魔術師の割りにAGI高いな。

凄まじい勢いで走ってきた魔術師と、それに引率されてきた魔物

を見据え、戦術を組み立てる。

こうなつた以上どうしようもない。今まで必死に戦闘を避けてきたのはなんだつたんだか……ともあれ、戦う他ない。

一度戦闘が始まってしまつたと、もう呪術師である俺には、やる事はたった一つしかない。

……前で戦う、か。それが嫌だからコソコソ歩いてたのにさ！

「……時間を稼いでやる。あとは分かるな？」

「へ……？ あ、うん！」

シアとすれ違つようにして、戦列に躍り出る。最悪のパターンが今此処に。さつき見てきたユニゾンデビルたちも、間もなく此方と合流するだろう。

出来るだけ敵の数を減らしたい。

「つえああッ！」

気合を入れて、ショートソードを振りかぶる。

予期せぬ敵の援軍と、それからの思わぬ反撃に反応が遅れたか、鉄の剣はユニゾンデビルの頭をすりと通過して二つに割いた。鮮血が飛び散つた瞬間、正気に返つたほかのユニゾンデビルが攻撃を仕掛けてくる。

勿論と言つべきか、全力で剣を振り下ろした直後に、後衛職が動ける筈はない。受けると分かつていた攻撃をなるだけダメージが少ない腕で受け、ダメージのままに転げ回つて戦線を離脱した。

ひとまずは安心　するヒマもなく、立ち上がった俺は再びユニゾンデビルへと駆けた。

魔術師に呪文を命じた以上、攻撃を通すわけにはいかない。

普通は前衛職の仕事だが、この際仕様が無い。

爪が出ていたか、少し血が流れる腕を視界の端に捕らえつつ、再び突進……すると見せかけ、魔物の前で僅かに前で止まる。

「迎撃せんと振り上げていた爪を、勢い良く下ろした個体に隙が生じる。その隙を俺はつこうとするが、周りの仲間がその隙をカバーするように俺に襲い掛かる。」

「ちくしょう、その戦い方にどれほど憧れたことか……！ 慣れぬ乱戦に歯噛みしつつ、バックステップで距離を取る。」

「距離が離れれば、こんどはユニゾンデビルたちがお互いの隙を消すように固まった。こうなっては、俺も奴らも簡単には手が出せない。」

「結局このやり取りで得たものはお互いにゼロだった。しいて言えば、ほんの少し体力を消費した。あとは、時間もだ。」

「そろそろなんだろう？」

「言葉で語る事無く、俺はシアとユニゾンデビルをつなく直線から離脱する。」

「『エナジーボム』っ！」

「刹那、紡がれるスキルの名。」

「迷宮の外でやり取りを見ておいてよかったぜ、あのまま突っ立つてたら巻き込まれてた……というか、俺だけ直撃してたかもしれない。高密度の大きな魔力球がユニゾンデビルたちへと向かっていく。魔力球の速度は決して速くはないがこの階層の魔物じゃあ、目の前に迫ってから避けれる速度でもない。」

「猛り狂う魔力はその群れの中心とも言える個体に直撃し、小規模の爆発を生み出した。」

「迷宮の壁全体が揺れたかのような、爆ぜる轟音。そして巻き起こる爆発と爆風。その余波に立ち向かうようにして地面を踏みしめる。」

……すげえ威力。これ、魔術師の2番目のスキルなんだぜ？
でろでろ毒出してる俺とは大違い。

その威力を見てあっけに取られていた俺だが、足元で何か蠢いたのを確認して、瞬時に間合いを確立する。

爆風に弾かれるようにしてユニゾンデビルが一体、俺の眼前へと転がってきていたようだ。

あの爆発でよく生きてたな……爆発自体にはあまり触れていない感じだろうか。

まあ 殺すけどさ。

「ギョッ！ ……」

脳天に、ショートソードを突き立てる。

一瞬だけその体を振るわせた幸運 なのか分からないユニゾンデビルは、その生命活動を停止させた。

次いで、爆発の中心を確認するが動くものはゼロ。体の大半を欠損した奴ばかりで、五体満足の個体はいない。

……魔法耐性（RES）が高いとは言え、俺、直撃してたら死んでたな。そのへんは天才魔術師といったところか。

つと、そんな考察よりも俺にはやる事がある。

「自分の後ろ警戒してくれ、さっきそっちの方にユニゾンデビルが群れてた」

ソレは、再びスキルの詠唱を命じる事。

さっき俺が見て逃げてきた群れは、間違いなく来る筈だ。

そのとき、例え途中までも詠唱をしている状態で状況は大

大きく変わる。

一方、俺の目の前……シアが来た方向からも、音で俺達の存在に気付いた新規の魔物が来る可能性がある。故に、俺もポイズンプールの詠唱を開始していた。

まあ大抵の魔物は轟音を聞けば逃げていくが……例外もある。油断しないに越した事はない。

「ゼフィスっ！」

しかし今回はソレよりも早く、先ほどのユニゾンデビルたちが駆けつけたようだ。

暗に語られる、詠唱の保護を受け、後ろへと向きなおす。

俺を呼んだということは詠唱はまだ済んでいないんだろ。俺はポイズンプールの詠唱をキャンセルし、再び前衛へと躍り出た。……おかしいね、後衛職なのに。

「あいよっつ！」

早速防衛線を確立し、時間稼ぎ目的の剣を振るう。

ユニゾンデビルの群れはすぐ其処まで迫っていた。数は四体。コレくらいなら、時間稼ぎくらいはなんとかなりそうだ。

先ほどのデیفエンシブな構えで俺を迎撃しようとしていた群れとは違い、今度は一斉に襲い掛かってくるユニゾンデビル達。

流石にこれでは反撃できない。比較的攻撃の薄い箇所へとドッジロールし、後ろから斬りつける。

ショートソードは体勢の崩れたユニゾンデビルのうち一体の背中を抉るが、一撃で倒すには至らなかつた。

振り向いたユニゾンデビルが俺に反撃しようとしているところ。シアの詠唱が済んだのを捉える。

やばい、やばいって！

敵の攻撃よりも大きな危機感を感じ、全力で横に飛びのく。

「『エナジーボム』！」

先ほどのように、魔力球が俺と魔物の方向へと迫る。

避けられたらかなり危ないぞ、これ。そう思いつつも、今度はバツクステップで後ろに下がる俺。

幸いユニゾンデビルたちがソレをよける事はなく、また小さな爆発　とは言ってもそれなりに大きい　が巻き起こった。

爆発が巻き起こした暴風が、俺の体をあおる。なんとかして体勢を立て直し、床に着地できた。壁に打ち付けられてたらそれなりのダメージを受けていたところだ。

急いで立ち上がり、再び周囲の確認。

先ず、ユニゾンデビルは全滅。いくら密集陣形を取りやすいユニゾンデビルとは言え、魔物四体を一発で殲滅するなんて恐ろしい破壊力だ。

次に増援が来ないかの確認だが　数十秒を待っても、増援は現れなかった。

とりあえずのところ、安全を確保した。

近くにあったユニゾンデビルの毛皮を拾い、地面に敷いてその上に座り込む。

……はあ。

疲れから来る溜息を吐いて、ようやく一息をついた実感を得た。

とりあえず、回復薬を一気飲み。傷による感染症を防止する効果もあるとか、凄い便利さに脱帽だ。

まさか魔術師と戦うのがこんなにデンジャラスだなんて。その辺の魔物と戦うよりよっぽど死の危険性があるぞ。

思い返すと縮み上がる胃を押さえ、先ほどシアと喧嘩していたパーティの苦労を垣間見た。

横目でシアの方を確認すると、どうやらあちらも安全を確認したようだ。

俺と同じようにユニゾンデビルの毛皮を持って、此方に歩いてくる。

「……オツカレ」

「お疲れ様」

お互い面倒くさそうに挨拶を交わす。

右手を軽く拳げながら近づいてきたシアは、毛皮を敷いて俺の隣に座った。

タイミングよく、二人で溜息を吐き出す。

しかし、疲れた。

乱戦がこんな疲れるとは思っていなかった。いや、多分戦闘だけが原因じゃないんだけど。

一度にほぼ十体との連戦なんて俺は初だからな。凄まじい疲労感だ。多分、もう少し休まないと強壮薬の効果が実感できそうにないレベルまで疲れている。

シアの方もそれは同じようだ。

呪文に分類されるスキルを唱えるのは非常に精神が疲れるし、そうでなくとも全力で走り続けた後のはず。魔術師って意外とタフなんだな、と俺は思った。

向こうも疲れているのか、うつむいて何も話さない。

俺は一応、辺りの警戒はしているが、こいつはどうなのだろうか。

ようやく息が収まったのを自覚して、俺は袋から強壯薬を取り出した。

もつこの際一日五本とか言ってるれん。喉を潤すように、多すぎず少なすぎずを喉に通していく。

……相変わらず形容しがたい味だな本当に。結構好きではあるけど。

「ねえ」

改めて小さな一息を吐いた俺を見て、隣の魔術師がジト目を向けていた。

なんだよその目……と言おうとしたが、心当たりがあるので、その言葉を発する事はなかった。

「はい、なんででしょうか」

故に、敬語。

覚悟は出来ている、といわんばかりに顔を神妙にした。

「あの毒沼あんたでしょ。……聞くまでも無いかもしれないけど」

やはりか、と頭を抑える。

呪術師である俺はよくも悪くも……いや、だいたいが悪い意味で有名だ。ついでにスキルのポイズンプールも噂が一人歩きしている程度には。

さつき頭をよぎったとおり、特定は余裕だったらしい。言い逃れは不可能。ちくしょう、きまらずい。

仰る通りでございます と、極めて低い腰で答える。

「やっぱり。解毒剤と回復薬が置いてあるの見て確信したわ。」

毒沼なんてこんな低層にある地形じゃないしね、呪術師だって一発でわかったわ。

あの薬置いていかなかったら、あんたにエナジーボム撃つてたところよ」

まあソレもそうか　と納得した。

置いていった薬はいくらか印象を良くしたようだ。

エナジーボムなんて撃たれたら当たり所によっては即死だぞ、殺る気を削いだ俺の選択は正しかったらしい。

二・三、シアの責めと俺の謝罪が続いた後、再びシアが溜息を吐いた。その後を訪れるのは、沈黙。

何かを言いづらそうにしている。

もしかや　俺を戦闘に巻き込んだことに罰の悪さでも感じているのだろうか。

「なあ」

「何？」

「今の戦闘なら気にしてねえから気にすんなよ」

「……ありがとう」

気遣ってちょっとだけ懐の広さを示してみる。

考えてみると、毒沼とコレでイーブンかも知れない……いや、戦闘の巻きこみ行為と毒沼設置のどっちが罪が重いかなんて知らないけど。

けれども、返ってきた返事は意外と淡白なものだった。神妙では在るんだが、そう　『それもあるんだけど』と言った所だろうか。

パーティ解散したばかりだし、色々悩みとかあるんだろうかね、天才魔術師とか言われてても。

肩書きが付く前に、呪術師こそが肩書きの俺には分からない何かがあるんだろう。

沈黙は先ほどのように気まずいものでもない。

先ほどまでであった敵意も感じないので、いくらか許してくれたのだろうか。

お互い様な所も在るし、根が深いわけではないのかもしれない。

「……ふう」

とりあえずのところ降りた肩の荷に、一息。

そういえば、さっき俺レベル上がったつばいんだよな。

二発目のエナジーボムが放たれた後、俺はひらめきの様な何かを感じていた。

頭によぎる独特の感覚。アレこそが、レベルアップの瞬間だ。

俺は懐からステータスカードを取り出し、そこに書かれている数値を見る。……やっぱり、レベルが上がってる。

祝、レベル9。ひっそりと、心の中で自らに祝福を送る。

「レベル上がったの？」

ステータスカードを見て、表情を緩めた俺を見ていたのか、隣からそんな疑問が投げかけられた。

……あたりに魔物の気配はまだない。

そろそろ立とうかと思ってたけど、もう少しだけ喋ってても良いか。

「ああ、そうみたいだな」

レベル9になった、と続け、ステータスカードを仕舞う。

思ったよりも俺のレベルが高かったからか、シアはほづ、と息を吐いた。

「良かったじゃない、おめでとう。ソロだからかしら？ 意外と高いのね」

「経験は全部俺のだからな、そりゃ成長もするさ。そろそろこの階層じゃ得るモノも少なくなってきたけどな」

先ほどと比べれば友好的になった態度で、二三言葉を交わす。

……む、新スキルが開放されてるな。

頭の中に浮かんできた、新たなスキル……ゴーストタッチという名のスキルを確認し、俺は少しだけテンションを上げた。

「嬉しそうな顔ね、新スキルでもあった？」

その辺の事情を知っているシアが、少し笑みを含んだ顔で、再び疑問を投げかけてきた。

……なんだか、ムリに会話を続けようとしている不自然さがなくもないな。

向こうは未だに気まずさを感じているのか？ 俺は新スキルの試したさにそろそろ立とうとしていたのだが。

「ご名答。ゴーストタッチって言うらしい。攻撃スキルだと良いんだけどな」

とはいえ、無碍にするのも今度は此方が気まずい。

先ほどまでの空気を水に流し、友人に語りかける程度に気安く返してみた。

これで少しでも気まずさが無くなってくれると良いんだがな。

毒沼を設置するという超大マナー違反をしでかしてしまった以上、

未だに頭は上がらない。

「へえ、やっぱ初耳ね。呪術師の情報なんて殆ど入ってこないから、どんなスキルか気にはなるわね」

「一応、対象は敵対関係推奨の対象指定みたいだな。詠唱は……やっぱり長めみたいだ」

俺のそんな態度は功を成したのか、いくらかシアの態度も軟化していた。

コレなら次に出会ったとき、一触即発なんて状況は避けられそうだが、因みに、会話を聞いていただければご理解得るかもしれないが、新スキルを習得した時に分かるのはスキルの名と詠唱、それに対象だけだ。効果は分からない。

とは言え他の職業は研究が進んでいるし、スキルの名前で効果は分かるのだが。

しかし呪術師にそんな便利な情報網などありはしない。

最後に確認された21年前の男性が、スキルを覚えていく前に自ら退学したらしい。故に分かっているのは、初期スキルのポイズンプールのみだった。

絶滅危惧種と絶滅を繰り返してきたジョブだ、書き記して伝える必要もないと言ふことか市販しているような本や学園内図書館に普通においてあるような本などでは、殆ど情報を得る事は出来なかった。

古い文字で書かれた歴史書でも紐解けば、他のスキルも分かるかもしれないが、その作業には時間がかかる。最悪、自分でレベルを上げて覚えていった方が早いかもしれない。

呪術師とは、まあその程度には就く者が少ないジョブなのである。

そんなわけで現在ブラックボックスな新スキル、ゴーストタッチ

は敵対関係にある者への使用を推奨する、対象指定のスキル、という事しか分からなかった。

このタイプのスキルだと、オーソドックスなのは攻撃呪文スキルと状態異常スキルだろうか。できれば前者であってほしい。

「へえ、攻撃スキルかしらね？ 私は魔術師だし、そのタイプだと攻撃呪文ってイメージがあるんだけど」

シアも同じ考えのようだ。尤も、此方は俺のように祈るのではなく、単なるイメージの話のようだ。

ともあれ、さっさと使ってみたいな。一匹で行動している魔物がいれば、戦闘してみるのも良いかもしれない。

さて　そうと決まれば、再び行動を開始するかな。

この疲労具合じゃボスマでは厳しそうだし、進めるところまで進んで還ろう。

先ほど立てた誓いを簡単に破棄し、俺は立ち上がった。

新しいスキルを覚えてだけでも、今回の旅路は成功といえよう。

まだ十階層を突破してない二年生なんてゴロゴロいるし、六年制のこの学校で、其処まで焦るような時間でもないはずだ。

とりあえずの予定を決め、俺は毛皮から腰を浮かせる。

今回の目的は、できれば九階層までの視察、といった具合にグレードダウン。

回復薬はそれほど使っていないし、強壮薬を買い足せばすぐに準備は整う。休み明けには新スキルを引っさげて再度探索できるだろう。

「んじゃ、俺はそろそろ行くわ、ソロだけに」

つまらないと自分でも思う下らない駄洒落で締め、歩きだす。
だが　俺は、前へと進むことが出来なかった。

ふと、俺を引き止める力がかかる腰の辺りを見れば、服の一部がシアに掴まれていた。

……まさか、そんなにつまらなかつたというのか今の駄洒落が。俺を態々引き止めるほどだと？

まあそんなはずはない……と思いつつ、恐る恐るシアに語りかける。

本当に殺意を抱かれていたらどうしよう。

「あの……ウィーアディさん？　服放してくれねえか？」
「……」

シアは黙して語らない。

先ほどまでの空気の好転が嘘のようだ。

気まずさが肥大化して、この場に戻ってきやがった。

辺りに魔物の気配はまだない。

石像が意思を持ったリザードモノリスには気配はないが、あいつは近づかない限りその場を動く事はないので、俺の気配感知は間違いないはず。

……呪術師でソロをしていたら、不思議と身についた気配感知の精度は高い。ひよっとしたら、生命を感知する　みたいな呪術師の特性なのかも知れない。……この職業にそんな気の利いたものはないか。

兎も角、魔物の気配はないのでこの場に留まっても問題はないし、この先に進んでもリザードモノリスがいるかもしれない、程度には安全な状況なのだが何故コイツは俺を引き止めたのだろう。

一体どうしたものか。

シアを振り払って進むことも出来るが、そんなことしたら次にあったとき何をされるか分からない。

容赦なく味方のいる射線に魔力爆弾を打ち込むような女だ、怖がるだけ怖がっても損はないと思う。

「なんか言いたいのか？ 気に触ったことでも言ったなら謝るから、放してくれないか？」

故に、出来るだけ穏便に交渉をする。

頭なんぞいくらでも下げる。

命の危険に比べれば安いからだ。

だが

あいも変わらず、シアからの敵意は感じなかった。

強いて感じる感情は　そう、羞恥心の様なものだろうか。

……まさか、な。

一瞬だけ脳裏によぎった考えに否定を打ち、俺はシアの言葉を待つ。

やがて、シアは口を動かした。

だが、何を言っているのかは分からない。

その類は真っ赤だ。よっぽど恥ずかしい事なのだろうか。

「悪いが、聞こえんよ。もっと大きな声で話してくんねえかな」

流石に何時までもこうしているわけには行かないので、俺は決着を付けに動いた。

服のすそに加わる力は弱くなっていたが、同時に俺も歩みを止めていた。

する、と俺の服からシアの手が離れる。

そして、シアは真つ赤な顔を俺に向けてきた。

そこから放たれた言葉は　先ほど、俺が想像したとおりのものだった。

「だから、さ。一時的に私とパーティを組んでくれない？　って言うてるの……！」

正に屈辱、といった様子。

そんなに呪術師にパーティ申請を送るのが嫌なのか……じゃなくて。

「なんでだよ？　そんなに嫌そうに頼むなら、さっさと帰ればいいじゃねえか。

転移符くらい、持ってないわけないだろ？　無いと迷宮に入れないんだからさ」

俺にはどうしても解せない。コイツほどの魔術師が、態々俺なんかにパーティを申請するのが。

こいつほどの魔術師なら、いくら性格に難があろうとパーティを探するのは容易いはずだ。……それが長持ちするかはどうとして。

パーティメンバーが欲しいなら、さっさと迷宮から帰って希望者を募れば、評判とその容姿ですぐに人を集められる筈だ。

ならば、考えられる理由は……どうしても必要があるときのみ。やむにやまれぬ事情、ってやつだ。だがコレは可能性が薄い。

パーティ申請を『しなければならぬ状況』なんて基本的には『卒業できるか危ういので五十階層までつきあってほしい』か『どう

しても欲しいドロップアイテムがあるので手伝って欲しい』のどちらかだ。

一人では来た道に戻るほどの体力が無いorbosを倒せなきゃ帰れないので付き合っただけ欲しい、はコレに含まない。なぜなら

俺の言葉の最後についた、転移符というアイテムの存在が在るか
ら。

この転移符と呼ばれる紙に術式を刻んだアイテムは、発見された際ジョブに並ぶ史上最大の発見と言われ、今もなおそう呼ばれ続ける迷宮の至宝だ。

見た目はただの難解な模様が描かれた紙切れだが、それを自力で破るだけで迷宮の入り口へと転移できる、奇跡のアイテム。

この転移符を一日一回、持っていないときのみただで支給される学生の迷宮内死亡率は極端に低くなっている。

転移符を持たずに迷宮に入る事は、自殺と同じ定義をされるほどに愚かな行為とよばれ、回復薬や強壮薬などとは比べ物にならないほど重要なアイテムといわれている。

実際、学生の死亡理由の殆どはこれの紛失だ。あとは油断や、畏
だるうか。

生きてさえいれば、これを破って即座に迷宮のエントランスへと
転移でき、そのエントランスにはヒーラーが待機している。

つまりとこころ転移符とは、これさえあれば死ぬ事はない、と言わ
れるほどに便利なアイテムなのである。

まあ、もし 仮に、ありえないことだが。

転移符をなくしたとすれば、そんな、『一人じゃ帰れないから』
という理由が生まれるのだが

「転移符、なくしちゃったの……っ」

「そうか……って、何？ 何だった今？」

まさか、本当にやらかす奴がいたとは。

「え？ なくした？ 転移符を？」

その事実 らしきものが、どうしても信じられなくて。俺はシアへと指を向けた。それが一般的には失礼な行為だと分かっていたが、それを止める事はできない。

あまりの言葉に、我を忘れていたから。

あっけに取られる俺を見て、ばつが悪そうに、シアが続ける。

「さつき、パーティーメンバー……じゃない、元パーティーメンバーと喧嘩しちゃった、んだけど。」

その時にバッグから共鳴鋼を捨てたの。で、その時に、その……転移符も外に出ちゃった……のかな？」

いや、聞かれても俺にはわからないって。

確かにその光景は見ていたが、それほど大きくもない紙切れが一枚落ちたとて、音が立つわけじゃないから気付かない。

喧嘩の直後の奴に声を掛ける勇気がある奴なんてそうそういないだろうし、転移符が共鳴鋼と共に落ちたとしても指摘するものはいなかった、という事だろうか。

まあそれなら信じられない理由でもないが……転移符をなくしたまま迷宮に突っ込むという神経が分からん。

「普通、迷宮の入り口……もしくは、入ってすぐのところ荷物確認しないか？」

っていうか、なんで魔術師がソコで突っ込む必要があるんだよ」

対して考え込むまでもなく、魔術師なんてたぶん、呪術師以上にソロに向かないジョブだ。

力はなく、防御力は紙切れ。下級スキルの詠唱は長くはないが、不意打ち以外じゃ先ず完成させる事は出来ない。

この階層まで走り回り、その上でユニゾンデビルから逃げれる程度のAGIはあれど、間違いなくソロで戦っていける類のジョブではない。

ましてその非力なジョブが、転移符も持たずにこの階層へ？

「お前、パーティを失ったショックで自殺でもしたかったのか？」

「なっ、何言ってるの！？ あんな奴らいなくなつて、私一人ですうにかなるって見せたかっただけよ！」

あまりの呆れに、思ったことをそのまま言ったら激昂された。

要するに見栄と？

……救えないなコイツ。結果が逃げ回るだけの競技的フルマラソンかよ。

「その……ちょっと、いやかなりあたしも苛立ってたっていうか……ストレス発散のつもりできたら、詠唱するヒマもなくて……逃げ回って一時しのぎに階段降りてたら下った先で魔物に会って、それから逃げてたらまた下る階段で……」

それで帰ろうと思ったら転移符なくしてることに気がついて……もう、一人じゃ帰れないところまできて……

お願いするからっ！ このままじゃあたし、死ぬしかないのっ！」

言葉の語尾に行くにつれ、涙と嗚咽でくしゃくしゃになってくるシア。

完全に完璧に完全無欠な自業自得だ。

とはいえ、そんなヤツでも見殺しは後味が悪い。なにか出来る事をしなきゃ、後悔するんだろつなあ、俺。

半ばヤケ、といった具合で頭を掻く。こんどは、少しばかり音が立った。

コイツを救うには、転移符を渡すほかには階段を下ってボスを倒すか、今来た道を『昇って』戻るしかない。

転移符を渡すのは論外。身代わりになってやるほどの義理はないし。

ならば……何らかの方法での迷宮の正規脱出。

来た道を帰るのは、不安が残る。強壮薬は残り二本。俺が飲めるのは残り一本だから。

階段を昇って行くのは、体力的に限界に近いモヤシ魔術師を連れて行くには難がある。

ならば、自然と選ばれるのは、もう一つ。

極力敵に会わずに、あと三階層を下り、ボスを倒してポータルからエントランスに戻るほかない。

回復薬はむしろ体に良くくらいだからいくらでも飲めるが、強壮薬は飲みすぎが毒なため、来た道を戻るほどの余裕はないということだ。

……危なくなったら俺だけでも転移符で戻るかなあ、なんて思いつつも、半分以上は決まっていた。

流石に、見捨てるわけにはいかんだろうよ。

「……フレンドリーファイアした時点で契約破棄だ。その時点で俺は転移符破る。」

ついでに言うなら、迷宮外に出た時点で契約破棄。まあこれは望むところだろうけど……ソレで良いなら、付いて来いよ」

思いつきりの溜息を吐きながら、毛皮を回収して歩き出す。

後ろで、心配事であつぷりな俺の溜息とは対象的な、安堵の吐息が音を立てる。

「あ、ありがと……」

言葉の意味を理解したのであろう、天才魔術師 勿論皮肉である が俺に連なって歩き出す。

「後ろの警戒はする事。不用意な音は、立てないこと。フレンドリーファイアをしない事、戦闘は極力避けること。

ついでに、ドロップアイテムは俺のモノ。落ちてる宝物類も迷宮出るまでは俺管理。

ソレさえ守れば、ボスを倒すまではパーティでいてやる。

……契約に依存はないか？」

契約概要を簡単に話し、意思を確認する。

パーティが欲しいとは言ったが、モンスター以上に危険な要素なんて、本当は傍に置きたくない。もしエナジーボムを受けたら多分あと4レベルほどは上げないと、一発食らった時点で行動不能になるとみている。

故の、不条理条約。これが飲めないようなら、俺は一人で行く。暗にそう語りつつ、後ろを見ないままに契約内容を提示した。

もちろん、命と引き換えでは断れよう筈も無い。

シアは、しぶしぶといった様子でそれを承諾した。

「……分かったわ。意外とちゃっかりしてるわね、あんた。
でもしょうがないか……呪術師にパーティ申請なんて、くやしい
わ」

そのときにはもう、迷宮外での喧嘩のような傲慢な態度を取り戻
していた。

……今からでもソロ活動再開するかな、なんて後悔をしつつ、俺
『たち』は迷宮を歩き出した。

程なくして、道を塞いでいた魔物がいなくなった先ほどの曲がり
角の先に階段を見つけたのは、不幸中の幸いだろうか。

先ほど、ユニゾンデビルを倒した後に休憩を取ったのはいい判断
だったかもしれない。

強壮薬を飲まなくても、ある程度体力を回復できたのは大きい。

こうして俺達は、階段を降り、八階層へと到達した。

……ああ、不安だなあ。

初めての……いや、研修とさっきの戦闘を含めたら次が三回目に
なるのか。

ともかく経験のないパーティ戦をするにおいて、誤射学園一（暫
定）シアと組む事に多大な不安を感じつつ、俺は迷宮の無機質な壁
を伝っていった。

地味な用語集

『シア＝ウィーアディ』 人間／魔術師
学園きつての天才といわれる魔術師。

異常な伸びを見せる魔法攻撃力（INT）や高いAGIを備え、そ

のステータスは同学年では群を抜いている。

……のだが協調性がなく戦闘技術も低めで、仲間が前にいようと容赦なく攻撃魔術を放つので、評判はすこぶる悪い。

到達階層や、そのステータスで評価をつけられる学園内では好成績を得ているが、実際はかなりの問題児である。

過去の出来事からプライドが高く、また非常に寂しがりや。

おだててあげると、意外と上手くパーティを組んでいけるかもしれない。

『エネルギーボム』 スキル/魔術師

魔術師が初期中の初期スキル、ファイアーボールの次に覚える下級魔術。

触れることで炸裂する魔力の球を放つ攻撃呪文スキル。

下級魔術といえど、魔法攻撃力（INT）の影響を受けやすいという特性からの攻撃力の高さや詠唱の速さ、無属性による汎用性は魅力的。最後までお世話になるスキルだろう。

高いINTからのエネルギーボムは、対象の周りをも爆発により範囲内とする事が出来る。

魔法耐性（RES）が低いものならば、フレンドリーファイアで死に兼ねない凶悪な呪文でもあるが基本的には速度が速くないため、前衛職であれば回避は容易。

とはいえ、爆発の余波や爆風はそれなりに強いので、パーティ戦で使用する際は仲間の許可を得てから使うほうが好ましい。

『転移符』 道具/消費

破れば術式が発動し、破った者をエントランスまでワープするといふ凄まじい魔法具。

職人が手間をかけて一枚一枚作っているため、個人での保有制限がある。

学生であれば、一日に一回まで、非所持の時に支給を受けることが

出来る。生徒以外は、それなりに高い金額で購入する事となる。このお金が、学園の主収入の一部をにあっていたり。

支給を受けたあとは生徒証に判子を押されるため、受付では手続きの簡易化のためこの判子を確認する。つまり生徒は転移符を持っていなければ迷宮には入れない。

だがシアのようにごくたまに転移符忘れの生徒が発生することもある。その末路は3割以上の確率で死亡するという恐ろしいものである。

逆を返せばこの道具さえ持っていれば死亡の確率はきわめて低く、若干の緊張感のなさを生んでいる黒幕とも言える道具。

ちなみに学生証の判子は転移符とリンクしており、転移符に押してから生徒証に押すことで、転移符が破られると連なって生徒証から判子が消えるという微妙にハイテクな魔術が込められている。また、使用せずに三日が経過しても転移符が効果を失い、判子が消えていく。

購入する場合には回復薬の一番上のグレードが6つほど変えてしまいう良いお値段。出せないわけじゃないのがまた憎い。皮肉って迷宮入場券と呼ばれることもある。

第五話 地味って言わないで涙が出ちゃう

第八階層を、二人で歩く。

俺にとつては脱ソロという記念すべき階層になるのだが、これがちつとも嬉しくない。

いま、後ろを付いてきている天才魔術師 仮とつきたい が頼りないどころか、マイナスの存在だから。

「ねえ、ねえつてば」

「……なんだよ。頼むから声絞れつて。あと足音も少し大きい。もうちょっと気をつけてくれよ」

最早何回繰り返し返したか分からないやり取りを、また繰り返す。

まだなんとか戦闘は回避しているからその真価は分からないが、この女 気配を隠匿するつもりが全く無い。

先手を取るかとられるかで戦局は大きく変わる。せめて、その辺を理解してもらいたいものだ。

恐らくも何も、四人のパーティで極々普通に敵を倒しながら迷宮を進むのが、こいつの基本スタイルなのだろう。

中途半端に魔力（MP）が高いやつはコレだから困る。

お陰で俺の精神的な疲労はいつもよりも多い。敵に出くわさないのが奇跡だぞ、この状況。

「分かってるつて。だから少しだけ小さくしたじゃない」

こめかみに来る小さな苛立ちを我慢しつつ、溜息を吐く。

ちくしょう、人間関係と隠匿難度の上昇で胃に穴が開きそうだ。

こんな馬鹿でも死ねば後味が悪いので、俺が我慢して進まなけれ

ばならない。

俺の溜息が聞こえたのか、今度は本当に小さくなった声で、シアが鈴の様な声を紡ぐ。

人間性と声は比例しないんだな、と当たり前前のことを思った。

「ゴーストタッチ、まだ効果が分からないならその辺りの敵に使ってみたほうがよくないかしら？」

ボスと戦う時に、微妙なスキルだったらピンチにならないとも限らないわよ」

ただ、紡がれた言葉は結構まとめた内容だった。

言われるまでも無く、ソレは分かっている。

しかし、試すに適切な相手がいないのだ。

この階層で出会う主な敵は、前の階層から引き続き登場のリザードモノリスと、洞窟こもりの上位種キラバットの二種。それに、今までの階層の敵がちらほら、といったところだろうか。

そのうち、この階層で見かけた敵は現在、リザードモノリスのみ。近づかなければ動かないのなら、新スキルを試すにはもってこいじゃないか、と思うがヤツラは石像。

もし、ゴーストタッチが状態異常を与えるスキルならば、不発に終わる可能性が高いのだ。

故に試すのならばキラバットその他が単体で行動しているときが好ましい。

が、先ほどから出会うのはリザードモノリスのみ。

良い感じに、魔物の巡回ルートと俺達の行動が噛み合っているのだろう。本来ならこのまま階段を降りたいところだし、階段を見つけたらそうするつもりだ。

だが階段が見つかるほど運が良くは無いらしく、俺達はどうして八階層の探索を続けていたのだ。

思ったことをそのまま伝えようと、シアは対して興味もなさげに相槌を返した。

……話題振ったんなら最後まで付き合えよ。

そうして再び訪れる沈黙。

喋りながら練り歩くよりは当然魔物との遭遇率が低いとは言え、どうしてこう、一人でない沈黙は空気の重さに変わるのだろうか。それでも、そのうちシアが沈黙を破るのだろう。4人で組んでいた時、こいつは一体どういう感じで迷宮を探索していたのだろう。

しかし、沈黙を破ったのは、自身の予想に反して俺の方だった。

掌を後ろ　シアに見えるように横へ出し、語らずに静止する事を伝える。

シアもそのサインの意味は分かるらしく、何がなんだか分からないと言った様子で一応は足を止めた。

その表情は明らかに疑問を浮かべていたので、俺はごく小さな声で、簡単に疑問を打ち払う。

「……魔物だ」

文字にすればたったの四つ。

けれど迷宮内という場所を考えれば、このサインと四文字だけで伝えたい事を伝えるには十分すぎる。

手を招き、敵の姿を確認するよう手で合図を出す。

流石にもう、シアも喋る事はなかった。恐る恐る足を踏み出すように、音を立てずに分かれ道の右を覗き込む。

敵の姿を確認したであろうシアはその魔物との距離を確認し、俺

の顔へと口を近づけて、ささやいた。

(ラッキーじゃない、うってつけの相手よ)

声というよりは、空気とでも言うべきか細い音。

シアと俺が確認したのは、進行方向へと進んでいく、紅い蝙蝠の姿。

あれこが、今までで最強のモンスター『キラーバット』だ。……いや、まあ階層を降りるたびに最強は更新されるのだが。

俺はシアのささやきに頷きで返し、敵を見据えた。

対象指定のスキルは、ポイズンプールのように場所指定のスキルとは違い、対象となるモノを視界に入れる必要が有る。

極論を言えば場所指定のスキルは土や壁の中にでも発動させる事が出来るのだが、対象指定のスキルはこうして、敵を見れる状況に無いと発動が不可能なのだ。

シアが俺をじつと見る。

元々、冒険者なんてのは金稼ぎが目的か好奇心に動かされて始めるやつが殆どだ。シアは、俺と同じく後者だと見た。家が金持ちらしいし。

いくら視線の先にいる者が呪術師といえど、殆どの者が知らないスキルが放たれようとしているのだ、好奇心をくすぐらない筈がない。

ともあれ、魔物が此方に気付いていない今がチャンス。

魔物の視界の外から、此方が先に発見できたのは大きい。

俺は精神を集中し、頭に浮かぶ呪言を描く。……先制攻撃は、貰った！

全てに仇成す存在よ
生ける者を呪おう、我らの怨恨を分かち合おう
足を引け肩を引け頭を掴め
我らと同じ位置へと引きずり込もう

「ゴーストタッチ」

スキルの名は確かに発声され、心の力である魔力（MP）がどこかへと消えていく感覚が体を包む。

……だが、何かが起こった様には見えなかった。攻撃魔法は愚か、敵に何かの状態異常が発生した様子すら見えない。

強いて言えば、俺が放った声で此方に気付いたキラーバットの仕草こそが、起きた変化だろうか。

まさか、不発？ いや、ありえない。魔力がすっかり減った以上、スキルは確かに発動した。

ならば、考えられる事は一つ。

「……状態異常スキルみたいね」

発動はしたが、成功はしなかった。これに尽きる。

どうやら、呪術師というジョブはそう簡単に攻撃呪文なんて与えてくれないらしい。

此方に向かってくるキラーバットを受け入れる体勢を整えた俺達と、キラーバットの戦いが幕を開けた。

……はは、初めて使うスキルの効果が敵を此方に気付かせただけなんてな。

「笑えねえんだよっ！」

怒りに任せ、ショートソードを一閃。

ステータスではユニゾンデビルを上回る筈のキラーバットは、その一閃を避けれずに羽を切断される。

隣で肩を震わせたシアの様に、驚いたのだろうか。対して素早くもない呪術師の一閃を避けきれず、キラーバットは地に落ちた。

「ビックリさせないでよ……あんたのがよっぽど大声じゃない。

……ま、まあ気持ちは分かるけど」

その同情が心にしみる。まさか、こいつに慰められるとは。

傲慢だが、人の気持ちが分からん奴でもないらしい。……ははは、暫定パートナーの良さに気付けただけでも収穫か。

溢れる涙に心で栓をし、地でもがく蝙蝠に剣を突き立てた。

……しかし、妙だな。

すばしっこい事で厄介さの殆どを担うキラーバットがこんなに簡単に一撃を許すとは。

もしかして、『ゴーストタッチ』は相手の素早さを下げるスキルなのだろうか？

だとすれば、単体相手ならばそれなりに使えるのだが……

「うーん、でも妙ね……ねえフェイス、もしかして」

シアの言葉も、俺の予想と同じように続いた。

だとすれば、前衛職には劣る前衛能力の俺でも若干は前で戦えるようになるのだが。

まあ雄たけびで怯んだ可能性を考えると、早計は愚行か。

スキルの名前は、ある程度そのスキルの内容を表している。

例えば、魔術師のファイアーボールは火球を飛ばすスキルだし、

同じくエナジーボムは魔力……爆ぜるエネルギーを打ち出すスキル。毒の沼を地面に作成するスキルの名はポイズンプール。勿論、全てがそういうある種のネーミングルールがあるわけではないが、ほぼ全てのスキルはこうして名に意味を持っている。

ならば、素早さを下げるスキルがゴーストタッチなのか？ というと、正直に言って可能性が薄い気がする。

単に状態異常を発生させるスキルが不発し、雄たけびで意表をついた、というのが自然な考えなのだが……

間違いない一つ言えるのは、攻撃スキルじゃなかった、という点だろうか。俺のソ口道はまだ辛そうだ。

今のところは考えても分からないか。

自分の思考にとりあえずの決着を付け、一息を吐く。

折角気遣ってくれたことだしな。苦笑ながらも笑顔を作り、シアへと向き直る。

「取り乱した、悪い。んじゃ、行くか？」

シアと組んでから、一番友好的な態度だったかもしれない。

少し意表を付かれた、といった様子のシアも、若干表情を緩めた。穏やかに「ええ」、と返された俺は、それ以上何を言うこともなく歩みを再開した。

キラバットが居た場所の先に階段を見つけた俺は、なんだか迷宮に励まされてる気がして余計悲しくなった。

ともあれ、シアに合図を送り、その階段を降りていく。

そろそろ宝箱から装備品が出る階層なので、この階層を探索するのもセオリー的には悪くないのだが……文字通り後がないヤツが後ろに着いてきているので、階段以外の探索にうつつを抜かしてい

る暇は無かった。

そうしてたどり着く、未知の階層第九階層。

「この階層を抜ければボスだ。なるだけ戦闘は避けたいから、頼むぜ」

シアが付いてきている後ろを見ること無く、俺は呟いた。

言葉が返って来る事はなかったが、頷いた気配を後ろに感じた。

……意外と素直だな。

さて。前々階層の様に行き成り団体さん、なんていうのは避けたいな。

この階層には再びユニゾンデビルが主な魔物にノミネートされている。戦ってみた感想は、強くは無いが疲れる、と言ったところだろうか。

群れごとに打ち合わせでもしているのか　ユニゾンデビルの群れは統率があるとは言え、戦法は群れごとに偏りがある。習ったとおり、フェイント等の高等戦術は使ってこないし。

それに慣れてしまえば、あとは後ろの魔術師が詠唱する時間を稼ぐ程度なら容易い。

一人ならば結局敵を倒さなければいけないのは自分なので、なんだかんだでプラスにはなっているということだろう。

新出の魔物も誰かが作ったりガードモノリスの元になったと言われるリザードマンくらいで、これまたキラーバットと同じく単体で行動する魔物。

下のほうの階層に現れる、リザードファイターと違い武器を使うことが無いので、一対一なら俺でも勝てるだろう。

ゴーストタッチの効果を説明しておきたいので、できればこの階層での戦闘はリザードマンとの一戦のみ、が望ましい。

ドロップアイテムの『リザードの鱗皮』は、迷宮の浅層ではそれなりに強力と言われる腕輪に加工できるので、あれば欲しいし。

とはいえ、階段を見つければ俺は迷わずそれを降りるだろう。

どうせボス戦になれば俺の仕事はエセ前衛なので、スキルを唱える必要　　というか余裕　　はないしな。ゴーストタッチがよほど強力なスキルであればその限りではないが。

ともあれ、俺とシアは歩き出す。

……やはりと言うべきか、階段傍の曲がり角にはユニゾンデビルが群れていた。

さっきの教訓が活きたぜ。

シアに合図をし、しばらくこの場で待機する。

気は張るが、こうして居る間にも少しだけ体を休める事が出来る。魔力は待てば少しずつ回復していくので、先ほどエナジーボムを使用したシアの魔力も、これで少しは回復するだろう。

少々の時間を待つと、やがてユニゾンデビルたちは全員で道の向こうへと移動していく。

巡回型の魔物は、こうして回避する事も出来るから楽だ。……迷宮内の魔物が多いときにこの方法を取ると、別の魔物と戦闘に入つて、その戦闘で立てた音により気付かれる事もあるが。

さっき、シアと会った時なんかその典型だろうか。さっきは二連戦で済んだが、深層の魔物は喧嘩っ早いのが多いらしく、あぁなつてしまえば十連戦もザラらしいが。

ユニゾンデビル達が見えなくなったのを確認し、手招きをして歩く。

臆病すぎるかもしれないが、流石にもう無駄な戦闘はしてられないのだ。

シアにエナジーボムでも打たせて一掃するのも悪くはないのだが……初級冒険者にとつて魔力の回復手段は乏しい。使わないで済むのなら、温存しておきたい所だ。

ただ、こういう戦法……と、いつか探索方法に慣れていないシアは不満げだ。

自分のエナジーボムなら一発で殲滅できるのに、とか考えているのだろう。

(あんた、さつきから意外とせこいよね)

現に、こうして耳元で囁く。一応警戒は覚えたようだ。感心感心。これで行動の意図を察してくれたら見事だったのだが、今まで四人でパーティを組んでたやつじゃそうは行かないか。

あの場合先制攻撃を仕掛けてしまふのがセオリーだもんな。

(ほつとけ。それに俺達は今ボスを『倒さなきゃいけない』んだから、余計な事をしてるヒマはないんだよ。

温存できる魔力は温存しとけ)

(あつ、そっか……ごめんなさい)

意外と素直に謝ったシアにもう一つ感心しつつ、俺は歩き出す。慌ててついて来るシアの気配がなんだがおかしかった。

ユニゾンデビルが屯って居た場所を過ぎ、今度は左右の分かれ道。あいつらは確か、右に行っていたかな？ 曲がり角をそつと覗き込む。が、敵の姿は見えない。

止まって喋ってたぶん、あいつらの方が先行したか。なんにせよ、

いま多数戦は一番避けたい事項なので助かる。

ただ、代わりにリザードマンが、反対側の通路に居た。

視線は此方を向いていないが、足音でも立てれば気付くだろう。

……そして、シアに忍び足は期待できない。

早々に理想の一戦を使ってしまうのは不安が残るが、戦うしかない場面が其処にある。

(やるのね)

(一応詠唱しといてくれ。先制ゴーストタッチから入りたい。

撃つたらずくに射線から逸れるから、それからぶっ放してくれ)

戦闘の簡単な流れを伝え、二人でリザードマンの姿を目に入れる。

ギリギリ、二人パーティなら不意打ちが可能か……？

さつきから不意打ちが成功している事に対し、そんな考察を抱く。

そして、詠唱の開始。

集中して一句一句を紡がなければいけない詠唱は、一見短い文章でもそれなりに長い時間を要する。

その点で行くと、ゴーストタッチもそれなりに長い詠唱時間を持っている。

……対象指定スキルの弱点はここにあって、こうして詠唱している間に

「ッシャー!？」

魔物に気付かれる事が多々あるのだ。

今回は違うのだが魔法を使ってくる、魔力に敏感な魔物相手に気付かれずに魔法スキルを放つのは難しいと聞いた。

しかし、此処で集中を切らしては、スキルは完成しない。
此方に向けて走ってくるリザードマンから視線を放さずも、俺は
詠唱を完了させた。

「『ゴーストタッチ』！」

放たれるスキル。しかし、視覚に訴えかける要素は全くない。
状態異常のスキルにありがちなのだが、効果が分かってない以上、
効いたかどうか判別しづらいのが問題だ。

……だが、今回は敵に大きな変化が発生する。

転倒したのだ。リザードマンが、スキルが放たれた直後に。

シアのエナジーボムの射線から離れようとしていた俺の目に、盛大にコケるリザードマンの姿が映った。

直後。

「『エナジーボム』！」

詠唱を完成させたシアの魔術が、リザードマンへと襲い掛かる。

ただ指定したリザードマンが転倒している為に、最初にロックした射線から若干下を行ってしまったのだろうか。

魔力の球はリザードマンの　こちらから見た　奥へと向かっていき、いつもの爆発を巻き起こす。

魔力に吹き飛ばされるリザードマンだが、流石に今までの魔物とは違うと言ったところか、空中で器用に重心を操って、地面に着地する。

しかしそのまま此方には向かってこず、近接戦闘に入ろうとする俺の一撃を爪で受け止めた後に、バックステップで近距離から離脱してしまった。

しきりに自分の体を見るリザードマン。その姿は、何かしらの違和感を感じているように見える。

勿論、ソレを黙ってみている俺ではない。

「ファイアボールを頼む」

「了解っ」

シアに最低限の指示を出して、リザードマンに追撃を加えんと肉薄する。

……動揺が見て取れる。間違いなく、何らかの違和感に戸惑っている。

比較的賢く、二足歩行。開いた両手で、時には蹴りで攻撃を行うという、人間に近いスタイルで戦うリザードマンだからこそだろう。その仕草からは、明らかな戸惑いを感じた。

それに ステータスで前衛職に劣る俺が、リザードマンのように近接戦闘を得意とする魔物を圧倒できている。

やはり敏捷は落ちていると見るべきか。一撃一撃にキレがない。

呪術師である俺でさえ、簡単にさばける程に。

攻撃にも重みがなく、ショートソードの腹で受けても大丈夫なくらいだ。

ならば、たやすい。

「『ファイアボール』！」

シアの声にあわせるように、下から潜り込むようにして剣を降り上げ、ガードを弾く。

同時に、右方へ転がるようにして射線避ける。

小さな火球が、リザードマンの目を抉ったのは直後の事だ。

全てを忘れ、右目の痛みを覆うリザードマン。

無防備なそれに、止めを刺すくらいは簡単だった。

目を覆う掌の上から、ショートソードを突く。

中々出来ない大振りのモーションで、その力を切っ先の全てに集約したショートソードは強い抵抗を感じつつも、リザードマンの脳天を貫いた。

一瞬だけ体を振るわせるリザードマンは、数秒すらを要せずその力を抜く。

死の重みを感じた剣を引き抜くと、その体は糸が切れるように地へと接吻をかました。

……期待していたのだが、アイテムは出なかったか。

剣に付着していた血が消えていくのを無感動に一瞥し、それを鞘へと仕舞った。

辺りに魔物の気配は 散っていく群れが見えるな。

さっきのユニゾンデビルだろうか？

「お疲れ様」

小さく息を吐く俺に、透き通った声が柔らかにかけられる。

今回の立役者は、シアだろう。

魔術師は動かし方を間違えなければ、凄く強力な要素だ。それを

再確認した一戦だった。

「あいよ、お疲れさん」

差し出された手にハイタッチ。

これで先へと進むことが出来るのだが、俺の脳内はいま、ゴーストタッチでいっぱいだった。

少し前 分かれ道の前に戻って、考え事をしたいという旨を伝える。

シアもそれに賛同してくれ、数十歩の距離を俺達は戻る。

今の戦闘で、ゴーストタッチの効果がいくらか理解できた気がする。

候補として真っ先に浮かんだのは、三種類ほどだ。

壁に体を預け、ずるずると腰を落とす。折角だ、疲労回復もかねておこつ。

さて、導き出した三つの推論だが 先ずは、強力な能力低下スキルである可能性から。

正直に言えば可能性はかなり薄いのが、明らかに下がっていた素早さと攻撃力を考慮しての可能性だ。

敵が近接攻撃に必要な能力を、最低二つも同時に下げるスキルなんて、強力すぎるのも良いところ。

……初級からこんなスキルを覚えていたら、流石にもう少し呪術師の地位は高いであろうという結論から、かなり低い可能性となっているが。

二つ目は、疲労を与えるスキル。

疲れれば足はもつれ、敏捷は落ちて攻撃は軽くなるだろう、という経験と情報から導き出した可能性だ。

名前的にもゴーストタッチ、だとソレっばいといえはソレっばい。体力を奪っていく幽霊、見たいな感じか。

ただまあこれも可能性は低いと思う。息が切れてたりする様子は無かったし、動き自体は一つ一つの動作を見たら遅くとも、動作の数自体は活発だった。

疲れていたのなら、もう少し仕草が違うと思う。……リザードマンは所詮魔物なので、完全に人間と仕草が同じわけないので、結論は出せないが。

最後は 俺はこの可能性が一番高いと思っている 対象に『重さ』を与えるスキルであるということ。

急に体の重さのバランスが変われば、足がもつれて転倒に至ってもおかしくはない。

素早さは勿論落ちるだろうし、攻撃力そのものを落としているわけでもなくとも、攻撃は自然と遅く、軽くなるだろう。

敏捷を下げるというスキルならば、動作そのものの速度は遅くならないため、攻撃力が下がる事はないという事から導き出した答えだ。

これも、名前的には遠くないと思う。詠唱的にも、符合がある。

まあこんなところだろうか。

現段階では考えていても仕方が無いが、どれであっても使えないスキルではなさそうだ。

三つの推論が全くかすらない可能性もあるにはあるが、結局のところ効果は間接的な要素を挟もうと『攻撃力と敏捷を同時に下げる』ことは変わらないと思う。

もう少し 前の呪術師が気張ってくれてたら、このスキルが広まっていれば、呪術師の扱ひも少しは違ったかも知れない。

説明するまではどうにもならないので、いまのところはそれなりに使えるスキル、とっておけば問題ないだろう。

辺りに魔物の気配が無い事を確認し、小声ながらも推察をシアに伝える。

一応はパーティを組んではいる現状、戦法の一つとしてスキルの情報を伝えておくのは悪いことではないだろう。

俺の推察はシアの好奇心を満たすには十分なものだったらしく、真剣に頷くシアを見るのは、なんだか少し楽しかった。

「……うん、なるほど。確かにそれならリザードマンの反応も理解できる。」

私は三つ目の論を推したいわ。『元』！ 仲間から聞いた話になるけれど、能力としての敏捷を下げられても、動作が遅くなるわけじゃないらしいしね」

それは初耳だ、と肩を竦めて見せる。

敏捷の低下はあくまで移動速度が遅くなるだけなのか？

そういえば、その辺りの話はまだ授業じゃ習ってないな。

やっぱり成績だけは良いだけあるな、しっかりとした場を設ければ、実のある話が出来そうだ。

そう考えていた矢先の事だった。

シアが親指を立てて、何かを言い放つ。

「でも、地味ね！」

一瞬、何を言っているのか分からなかった。

嫌というほど理解しているからだろうが、俺の脳はその言葉の意味を理解したくなくて必死のようだった。

我が脳の健闘空しく、その言葉は耳を通して脳みそをかき回してくれやがったが。

……フフ、いいさ。虚を捨て実を取る、つてのは大切な話。スキルの見た目や映えなんざどうでもいい。だが、なんでだろうな、こんなに心が傷つくのは

「ちょ、ちよつと！ あんた何してんのよっ!？」

「ご、ごめんつてば、謝るからそれだけは許してえっ!？」

シアがなにやら叫んでいる。

おいおい、そんな大声出したら魔物が来るぞ。そんなまでして止めたい俺の行動つてなんなんだ

と、そうして叫ばれて初めて、俺自身は何をしていたかを知ることとなる。

俺の右手には転移符。左手には転移符の反対側。

完全に無意識の行動。俺は転移符を破ろうとしていた。

「お、おおっ!？」

慌てて左手を離し、転移符を荷物袋へと突っ込んだ。

正直、胆が冷えた。無意識のうちに、間接的には言え暫定仲間を殺そうとするなんて。

一瞬正気を失っていたようだ。シアの叫びが無ければやばかった

……

「す、すまない。完璧に無意識だったぞ、今……」

未だ高鳴る胸を押さえつつ、俺はシアへと謝罪する。

「わ、私も悪かったけど其処まですること無いじゃない……」

対するシアは涙目だ。よっぽど怖かったらしい。それはそうか。

しかし、妙だな。多分、今改めて言われても、地味なんてそんな傷つくワードでもないぞ。

いや……多大な精神ダメージは受けるが、正気を失うほどでは……

と、其処までを考え、思考が違和感に引っかかる。

……馬鹿か、俺達は。辺りに敵の姿が見えないからって、仮にも迷宮の真っ只中で談笑だつて？

愚行もすぎる。組みあがっていく思考のパーツ。この階層でも居るじゃないか。見えない場所から攻撃できる魔物！

「キラーバットだ……！」

曲がり角を見据え、苦々しく呟く。

さっきはこっちの先制だったから直接戦闘が始まったが、何も先制でスキルを放てるのは、冒険者達だけではない。

『パニックエコー』と呼ばれる蝙蝠型の魔物が使うスキルがある。音の波……と考えられてる、固有の波長を飛ばす事により、音を受けた相手を混乱状態にするスキルだと聞く。

今の俺の行動は、それによる混乱状態だろう。無意識に取った行動が、シアへの攻撃じゃなくて良かった。

……くそ、油断してたと言わざるを得ないぞ。もう少しシアの叫びが遅ければ、本当にシアは死んでいたかもしれない。

「えっ？ キ、キラーバットって……あっ！」

俺が発した敵の名に、動転するシアが一拍遅れて事態に気付く。

自分達を叱るのは後だ、と視線で合図を送り、曲がり角へと直進する。

其処にあったのは、予想通りに紅い蝙蝠の姿。

……と、分かれ道の中心を対象にして戦闘態勢を保つ、リザードマンの姿。

現在一番厄介な組み合わせに出くわしてしまった。……さっさと前に進んでおくべきだったか。

「うわ……ど、どうする？」

どうするって、逃げ道が無い以上戦うしかないだろう。

しかし挟み撃ちか……一人だったら詰みかねなかったな。

キラーバットさえ居なければ分かれ道の前まで戻るのだが、キラーバットが居る以上、そうすると敵に前後衛の關係を作ってしまう。異種だから統率らしい統率は無いだろうし、片方を叩いて潰したところだ。

「この際しようがない。協力してキラーバットを叩くぞ。

お前も敏捷は無駄に高いし、何とかなるだろ」

「うえ！？ わ、私も前衛やるの？」

「キラーバットを倒す目処が付くまでで良い。殺れるやつから殺らないと、状況が好転しない。

行くぞ！」

行き成り前衛をやれ、と魔術師が言われたらそりゃあ驚くと思うが、この場限りは我慢してもらおうしかない。

有無を言わせないよう、俺はキラーバットへと突っ込んだ。

後ろから迫ってくる二つの足音にほんの少しの意識を向けつつ、

キラーバットに斬りかかる。

……流石に、ゴーストタッチがかかってないと速いな。俺の斬りは、いとも簡単に避けられた。

だが、その避けた先にはシアがいた。杖を振った経験など殆ど無いだろうに、恐らくは当てずっぽうで振った杖が、キラーバットに直撃した。急な方向転換が出来なかったのだろう。

空中で攻撃を受けたことにより、大きく飛ばされるキラーバット。さつきからこんなばかりな気もするが、止めを刺さんと駆ける。

……が、すんでで体勢を整えたキラーバットに対し、ショートソードは蝙蝠の腹部を掠るだけに終わる。

そうこうしているうちにリザードマンが戦線に到着。ああくそ、邪魔臭いっ！

「ゼフィスっ！」

後ろからの存在を知らせる為に、シアが叫んだ。

気付いてる、大丈夫だ。喋っている暇が無いので、向きを変えて、振り下ろされる強靱な爪を剣で防ぐ事で示す。

手首の辺りを狙って剣を置いたのだが、剣がリザードマンの腕を切断する事はなかった。くそ、硬いなあ鱗……

リザードマンの手を押し上げるようにして、剣を上にも跳ね上げる。力じゃほんの少し俺のほうが上か？ ゴーストタッチが無くて、それなりのタイミングを整えれば競り勝てるようだ。

「攻撃避けてる！ ムリに攻めなくて良い！」

シアに次なる指示を飛ばす。

リザードマンが追いついてしまった以上、魔術師に無理をさせる

わけには行かない。

こうなってしまったら、キラーバットを倒すまでは回避に専念させておこう。

指示に対し返事が帰ってくることは無かったが、シアの姿はほんの少しだけ遠くに離れていた。

ダメージ目的ではない、距離を離すための蹴りをリザードマンの腹部に見舞い、体勢を崩しつつも反動を利用してキラーバットへ駆ける。

キラーバットの紅い体からは、先ほどつけた傷からそれよりも紅い液体が零れていた。

ヤケクソになって噛み付いてくるキラーバットに対し、あえて利き手でない左の腕でそれを受ける。

「つつ！」

痛みに思わず息がつかまるが、やっとこさ捕まえた。

枝を払うかのように、剣を薙ぐ。腕に強く噛み付いていたキラーバットは、あっけなくその頭を半分に分けた。

「エナジーボム頼む！」

矢次早に叫ぶは、砲撃の指示。

ファイアーボールで節約するより、エナジーボールで吹き飛ばしてしまった方が楽だ。

いまは魔力より、体力の方が持つか怪しい。

わかった、と短く聞こえる声に更なる返事を返す事も無く、時間稼ぎに移行する。

性分に合っているのか、こういう戦法は苦手じゃない。
ただ防げばいい、と言うのは自分で止めを刺さなくていい分、気をつけることがぐんと減る。

ソロの賜物か、自衛の技術だけはそれなりに身に着けたので、足止めをするのはさほど難しいことではない。

先制攻撃に胆を冷やしたが、何とかなりそうだ。
なぜならばそろそろ、後衛の魔術が完成するから。

「『エナジー』……『ボム』っ！」

いつもよりも余計に気合の入った魔術が解き放たれる。

俺はその射線から外れるよう、無茶な体勢から無様に転がっていく。

戦闘より、むしろこの瞬間にこそ気合を全力全開している様な気がする。

剣を振るっている体勢からの離脱なんて、これが限界だ。

射線からは外れたものの、容赦ない爆発の余波で俺は更に回転速度を上昇させた。

転がった勢いのままに、迷宮の壁に頭をぶつける。

「っおおお……」

思わず頭を抑えた。ダメージが予想外に大きい。

ひっくり返った無様な姿のまま、回復薬を取り出し、頭を起こしてソレを飲む。

……頭の痛みは少し残ったが、キラバットに噛まれた傷と、今転がる事で作られたあちこちの擦り傷が治っていく。

「あつ！ ……」
「あつめん」

そんな俺を見て、焦るシア。

一応フレンドリーファイアじゃないって事にしておく……と伝え
ると、あからさまにホツとしやがった。

やった後に気付くとは、戦闘中はよっぽど集中しているのだら
うか。

ともあれ、服に付いた埃を払いつつ、立ち上がる。

シアから緊張が抜けているので、魔物はもう倒したと思うが、念
のため辺りを確認。

残っているのは、紅い翼膜のみだった。うーむ、キラーバットは
アイテムドロップしたか。リザードマンのアイテムの方が欲しいん
だけだな。

近くに落ちていた蝙蝠の残骸を袋に突っ込む。

くそう、凄まじく疲れた……今回の探索で一番大きいダメージを
受けたな。

予想以上の体力の消耗だ。こりゃあ強壯薬を飲むしかないな……
しぶしぶと袋から強壯薬を取り出し、飲む。

どうせもうこれ以上は飲めないし、一本シアにも分けてやろう。

「ほらよつと」

シアでも取れるよう、ゆっくりと浮かせるようにその琥珀色のピ
ンを投げ、強壯薬をシアへと渡らせる。

慌ててソレを受け取ったシア。戸惑うようにして、その口が開く。

「いいの？」

「俺、これで五本目だからな。 迷宮を出たら買えば良いし、やるよ」

「……ありがとう。 何時も一人で居るから誤解してたけど、あんた意外と優しいのね」

好きでいるんじゃないよ。

溜息と同時にその気持ちを吐き出すと、シアはそれ以上何も言わずに、強壮薬に口をつけた。

「あう…… やっぱ苦手だなあ、この味……」

俺は好きなんだけどなあ。

苦手な人が多いと聞くし、まあしょうがないか。

疲労を回復する事が目的の薬だ、不味かろうと効果があれば十分。 それ以上は何も言わずに、シアは一気に強壮薬を飲み干した。 ちよつと渋い顔をしている。

「そろそろ行くか。 今度こそ敵に会わないように注意するぞ」

頷くシア。 出会った時と比べて、素直になったもんだ。

しかしシアもこれでパーティの大切さが身にしみた事だろう。

俺と違って探せば仲間なんぞいくらでも見つかるんだし、もうちよつと仲間は大切にな。

そんなことを伝えると、シアは黙り込んだ。

やがて何かを決心したかのように、重々しく口を開く。

「……なんだったら、迷宮を出た後も契約続けてあげても構わないわよ」

シアなりの、遠回しのパーティ申請なのだろうか。
不器用ながらも発されたそれに対し、俺は

「え？ 嫌だよお前の魔法怖いし」

つい、心の中身をそのままに即答してしまった。

わなわなと震えるシア。や、やべえ。

今日一番の冷や汗をかきながら、俺はごまかすように歩き出す。

数歩進んだ後に、杖が飛んできた。

先ほどの申し出に何の思惑があったかは知らんが、流石にあの言葉に即答はまずいだらう。

己の失礼をわきまえる。あえて避けまい。

軽い木の杖が、迷宮に空しい音を響かせた。

地味な用語解説

『キラーバット』 魔物/魔獣

第一話の冒頭にて、レーゼが戦っていた洞窟こもりの上位種。

紅い蝙蝠という、序盤らしからぬお強そうな外見を持つ。

蝙蝠類の魔物にしては、群れる事が少ない。

ステータスはAGI以外はそれほどではないが、壁を反射する混乱音波『パニックエコー』が非常に厄介。

歩いていくくらいでは気付かれないが、喋ると音を察知して割と遠くから先制でスキルを打ってくるのがしばしば。

混乱事態は危ない状態異常だが、声かけや衝撃で直るので、落ち着

いて対処しよう。

ドロップアイテムは『キラーバットの翼膜』。

それなりに綺麗だが装飾品に加工するにはちょっと扱いづらく、眺めて楽しむくらいしか使い道が無い、換金用のアイテム。

『リザードマン』 魔物/亜人

全身を硬い鱗に覆われたトカゲ人間。

ユニゾンデビル等の亜獣よりも人間よりな亜人類の最弱モンスター。最弱とは言っても、亜人類自体が強い種族なので油断は禁物。

群れる事が少なく、道具も使わないので知能は低いと言われている。それでも、彼らなりに戦闘技術は磨いているっぽいのでやっぱり油断禁物。

ドロップアイテムは『リザードマンの鱗皮』。「りんひ」と読む。

腕輪に加工することで、それなりの防御力を持つ装備を作成できるので、ダンジョン内での人気は高め。

反面、見た目は良くないので外での需要は少ない。

『ファイアボール』 スキル/魔術師

エナジーボムよりも下、魔術師の初期スキル。

火球を飛ばすというオーソドックス中のオーソドックス呪文スキル。エナジーボムに比べると威力・消費・詠唱のどれもがコンパクト。弱点を付いてもエナジーボムに威力で勝る場面は少ない。

が、その使いやすさと燃費の良さから多くの魔術師が好んで使用する。

第六話 おひげの素敵なあいつ

「ようやく、か」

か細い声で、呟いた。

未探索の道への唯一の通路、そこに陣取っていた魔物たちが揃って移動するのを見て、俺は口内で言葉を溶かす。

何か言った？ と視線で訴えかけてくるシアに、道の先を指差す事で確認させ、頷きを得る。

再び後方の警戒を指示し、俺は去っていく魔物たちを見つめている。

……そろそろ良いだろうか。

既に探索を終えた道へと魔物たちが消えていったのを確認し、俺はようやく息を吐いた。

「行くか」

顔を後方へ向けて、シアへと呼びかけた。

後方への警戒を解き、此方へ歩いてくるシア。

ゴーストタッチの効果にあたりをつけてから数十分、迷宮内のおよそを探索しつくした俺達は、唯一未探索の通路へと歩みを進める。

先ほどまで、魔物が陣取っていた為に探索を後回しにしていたのだが……結局、他を探索しつくしても階段は見つからず、ならばとこうして帰ってきたのだ。

探索していない場所が此処しか無いため、当然といえば当然だが、その通路の先には予想通りのものが存在した。

……そう、第十階層、ボスフロアへの階段だ。

此処を通れば後戻りは出来ない。

転移符が無い（俺は持っているが）いま、此処をくぐってしまったらもう、本当に生きるか死ぬかの問題になってくる。

くそ、なんで初めっからこんな修羅場をくぐらねばならんのだ。

シアと出会った時の自分の行動にあつた甘さを呪うが、いま同じ場面にあつたら同じ事をしてしまつたろうなあ、と思うと不毛な考えに決着を付けるほかは無いです。

ふと、シアを見れば此方もいろいろ考え込んでいる様子。

無理も無いのか。生きるか死ぬかの瀬戸際に立っているのだし、多くの心配を抱えているだろう。

「不安か？」

とりあえずのところ、後は魔物が来ても階段を降りればそれで事足りる状況にはこぎついた。

あとは可能な限り会話でもして、緊張を解くと共に多々ステータスの回復を図ろう。

こうした階段前での休憩は、道具の揃わない金欠冒険者がよく用いる方法だ。もしくは、俺のように強壮薬をがぶ飲みした後とかも行われることがある。

ただ待つよりは緊張をほぐした方がいいだろう、お互いに。

正直に言えば、俺も中々緊張している。

転移符を破る、という最終手段もあるが、やはり出来る限り封印

したい。自業自得とは言え、同級生を見殺しにするというのは嫌だから。

自分は兎も角、他人の生き死にかかった状況なんてコレが始めてなので、胸が苦しいというのが正直なところだ。

階段近くの壁に寄りかかるようにして、出来る限りのリラックスをする。

そんな俺を見て、シアも隣の壁に寄りかかるようにして、座り込んだ。

「……不安、だよ。でも、いざここまで来てみると、ゼフィスを巻き込んだ方が苦しい。」

いざ自分の命が危なくなれば、やっぱりそっちが気になるんだろ
うけど……」

胸のうちを吐露するかの様に 事実、真実の気持ちであろうツレを、シアはばつが悪そうに語り始めた。

顔は組んだ腕の中に仕舞われていて、伺えない。だが、恐怖からかその声は震えていた。

「私さ……学園に入ってから、こんな風に同じ年の子と話すの初めてなんだ。」

探索に関するのある業務的な会話は、パーティ内でよくやったんだけどね。

だからあなたと話ができて、実はちょっと嬉しい」

続いた言葉は、俺にとっては思いがけないものだった。

あの傍若無人ガールが、こんなことを言うとは思えなかったから。急にしおらしくなった……なんて言っている空気じゃないな。

迷宮前での喧嘩を見るんじゃ、性格に難があると思ったが……実

は不器用なだけなのか？

俺は、黙してシアの言葉を待った。

まだまだ言いたい事がある。……そんな感じがしたから。

「守ってもらえた事もね、感謝しなきゃいけないことなんだな、って思った。

魔法の射線にあんたが入っていても、文句一つも言わないしさ……怒るのが普通なのにね。

……私、ゼフィスに感謝してる。だからこれだけは言っておきたいの」

伏せていた顔が、上がる。

その目は……俺が見たことも無いような、不思議な色に染まっていた。

「私を守って欲しい。私さ、友達をつくってみたい。たぶん私、いままで友達が居た事ないんだ。

でも、危なくなったらすぐに転移符を破って逃げて欲しい。

こうなったのは私の自業自得なの。私に付き合っただけで死ぬ事は、絶対にだめ」

さっきの言葉よりも、もっと思いもかけない言葉が飛び出した。

決して勇気があるほうじゃない、俺が転移符を破ろうとしたとき、目に涙をためて焦ってたような子から。

態々俺にこんな釘を刺す、ってことは、俺が自主的に転移符を破る可能性を考えなかったということ。

……軽く考えすぎてた、と言わざるを得なかった。

最終手段として転移符を破る、なんて逃げ道を考えていた自分が

恥ずかしい。

確かに俺は、こいつに付き合う義務は無い。

けど、卑怯だ。

たったいま、こいつに付き合う義理が出来てしまった。

コレでも俺は、人の嘘には敏感だ。だからこそ、不器用に輪をか
けたようなシアのこの目が、嘘偽りないものだど判ってしまった。

こいつのが一番逆効果なんだよな、逃げる、とか言うときにさ。

「断る」

シアの顔から目を逸らし、答える。

意地でも取り合わない、という覚悟だ。

「……ゼフィス」

それに対して、少し怒ったような声と顔が、俺に突き刺さって
くる。こいつなりに考えに考えたことなんだろうから、無理も無い。

でももう決めてしまったので無駄だ。

俺は今日始めてパーティを組んだこいつの為に、命を賭けてみよ
うと思っってしまったのだから。

「こつなつたら一蓮托生だ。最初の友達には俺がなってやるからさ、
どうせなら一緒に出ようぜ」

少し……というか、かなり恥ずかしい台詞を吐き、シアを視界の
外から外す。

今の俺は絶対顔が赤い。こんな臭い台詞を言ったのだから当然だ。
見られたら恥ずかしさでMPダメージを食らう勢いだ。

だが、一瞬そんな様子を見られたのか、小さく笑われた。

見られた以上意味が無いので、顔を戻す。
シアはといえば、上品に、でも可愛らしく笑っていた。

「うん、そうね。頼りにしてるわ、呪術師さん。」

私、ここから出られたらまず、前のパーティーの皆に謝ってみるわ」

元の目的は、緊張をほぐすと言う目的は、少しくらい達成できたろうか。

少なくとも俺の胸のうちにある緊張は、使命感という少しばかり違うものになっていった。

……会話で少しはリラックスできたかな。

体力とコンディションは問題なさそうだ。

「俺はそろそろいけるぜ。お前はどうか？」

「魔力は問題ないわ。どうせ何回も唱えられる隙があるとは思えない、十分に過ぎる程よ」

そうか、と呟き、階段を見据える。

気がつけば魔物が近くに居る。踏み込んでくるとは限らないけど、そろそろ進んでおいた方が無難そうだ。

「行くか」

「ええ、行きましょう」

心なしか、会話する前とはシアの様子が少し違っていた。

ただしそれは良い方向へと向いていたようだ。先程よりもなんというか、覇気がある。

精神の状態は魔法スキルの出来に影響を及ぼす。今、シアの魔法

は中々の好コンディションとなっているはずだ。

二人で頷きをかわし、階段を降りていく。

他の階段とは一線を画す長さのそれを降りていく。

眼下に広がったのは、大きな扉だ。

聞いた話になるが　この扉は一度先に進めば、ボスを倒す以外では開かないらしい。

外に出る方法は、ボスを倒して先に進むか、転移符を破るのみ。後者が使えない今、もう俺達にはボスを倒すほか道は無い。

ついでに言うなら、フロアに下りてしばらくすると扉は勝手に開く。

多分、この階層で回復させないための措置だろう。誰が得するんだか知らないが。

「ケンタウロスは強敵よ。

弓の遠距離攻撃と、脚の近距離攻撃に気をつけて。

敏捷と防御がそれなりに高いから、あたしとあんたで協力しないと厳しい戦いになるはず。

……頼りにしてるわ、ゼフィス」

扉へと向かう少ない余裕の中、シアが敵について語る。

そういえばこいつ、二十階層手前まで行ってるって聞いたことがあるな。

一度倒した者の意見というのは、初見の俺にとって心強い。

ゆっくりと、しかし確実に扉へと歩みを進める。

両開きのドアは俺達が近づくと、触れても無いのにさび付いた音を立てて開いていった。

ボスフロアは言うまでも無く初めての俺だが、その異質さは扉をくぐるまでも無く理解した。

途轍もなく広い、通路ではなく部屋と言つべきその構造。

壁際以外は地形の有利など何処にも無い、実力のみがモノを言う、広間だ。

そして、その最奥に佇む、馬身人頭の異形。

腕を組み、頭を垂れるその姿は、よく出来た彫刻のような神々しさすら感じた。

……おいおい。最初のボスがこれでいいのかよ。

一人で勝てる気なんか微塵もしないぞ……

ソロで百階層超えた凄さまじい変人も居るらしいが、この魔物を見ると与太話の類なのでは、と疑ってしまいそうだ。

しかし、相手が弓を持っている以上、ここで止まったらただの的だ。

俺達は、意を決してあいた扉をくぐった。

先ほど緩やかに開いていった扉は、今度は大きな音を立てて一瞬で閉まった。逃がさん、と言わんばかりに。

その音に追従するようにして、今度はケンタウロスがその頭を上げる。

ひげを蓄えた中年の顔、と表現するのが一番近い筈だ。

種族が違う以上、あくまでも人間に喩えるならば、だが。

「……来るわ。弓矢に気をつけてね」

戦いに向けて、シアの緊張が強まるのが分かる。
俺も、付き合いの長いショートソードの柄を強く握った。

そして

「オオオオオオオンッ！」

前足を高く上げ、弓を掲げて嘶くケンタウロス。

雄たけびで巻き起こった強烈な風の壁が、脚を後退させる気がしたが、後ろに居る魔術師を見て、風の壁なんて無い、錯覚だと自覚する。

腰引いてる場合か、俺のやりわり決意は、いまや石化の呪術がかかってるぜ。……石化させる呪術スキルなんてあるか知らんが。

よし、冗談が言える程度には余裕が出てきた。

なあに、やる事は変わらねえ……

後ろの固定砲台を守って、爆弾ぶつ放してもらっただけさ！

「来いよ、馬野郎！」

自分の罵声ボキャブラリーの少なさに呆れつつ、地面を強く踏みしめる。

そんな俺の罵声など気にも留めぬケンタウロスは、前足を地面に下ろした。

遂に戦闘が開始したのを、全員が感じた事だろう。

……まあ、言っても最初に動けるのはケンタウロスなんだがな。

今の俺達の遠距離攻撃手段なんて、シアのスキルのみ。その詠唱にそれなりの時間がかかる以上、初めに動けるのは弓を持つケン

タウロスの方だ。

背中
の矢筒から矢を番え、弦を引き、放たれる。

目を凝らせば見えない速度ではない。このくらいは、潜命石の加護を受けた人間ならば珍しいものでもない。

避けるのは容易いが、後ろには詠唱中のシアが居る。故に、俺はそれを剣で叩き落した。

ケンタウロスにとってもそれは様子見の一射だったのだろう、予測済みとでも言わんばかりに、四足で駆けてくる。

事前の忠告どおり、その速度は今までも魔物と比べてもトップクラスだ。

これでその他のステータスも高いとか、流石にボスクラスか……！

しかし、やはり退く訳にはいかない。

やつのステータス……防御（DEF）が高いのならば、なおさらだ。

決定打を与えるには、シアに頼るのが一番効率が良い。そして、突っ込んできてくれるのなら好都合！

「ぐぎっ！」

勢いを付けた突進から繰り出される、弓での殴打を何とか剣で受け止める。

一撃が重い……っ！ 上からの力に、膝が砕けそうだ。

それでも何とかそれを受け止め、弾こうとした……が、力（ST R）が相手のほうが高いらしく、簡単には弾けない。

ならばとばかりに蹴りを繰り出すのだが

「がっは!？」

腹部に突き刺さる、鈍い痛み。

どうやら、先に蹄で腹を蹴られたらしい。なんて前蹴りだい、馬の動きじゃないぞこれ……っ!

あくまでも、馬と人のハーフではなく、ケンタウロスという事だろうか。

こみ上げる吐き気がキツいが、体勢はなんとか保てた。

まだシアの呪文が組みあがるまでは少し時間が要るはず。ここで倒れているわけには行かない。

だが　その辺は流石ボス、と言ったところか。

俺の決意をあざ笑うかのように、弓が腹部を殴打する。

怯んでいる隙に、罅迫り合いから開放された弓を振るったのだ。前からではなく、急な横からの力に踏ん張りを入れる事が出来ず、大きく吹き飛ばされてしまう。

ダメージの大きさより、何よりも血の気が引いた。

不味い。シアは今、俺と言う守りを失って完全な無防備だ。

地面に着弾した俺は、吹き飛ばされた勢いのままに転がってダメージを軽減しつつ、立ち上がる。

一瞬見失う敵の姿だが、こんな広間じゃ見つけられない方がどうにかしている。

一秒すらも要さずに見つけた敵は　無防備のシアに対して、弓を振りかぶっていた。

「シアあッ!」

思わず叫ぶ。

仮にその声が魔物を呼んでしまうことになるうと、構わず叫んで
いただろう。

急いで駆けだすが、間に合うとは思えない。

己の無力に歯噛みする。が

「『エナジーボム』っ！」

シアの詠唱が直前で完成したらしく、魔力の球が精製される。

あの距離じゃ、ダメージが軽減される術者として大きなダメージは
免れないだろうが　あの強靱な腕で頭を殴られて、即死するより
マシだ。

当たるまでに距離も時間も要さないそれは、ほぼノータイムでケ
ンタウロスへと炸裂した。

直後、爆音と共に吹き飛ばされる両者。

地面を抉ったのであろうか、土煙が邪魔で様子がよく見えないが
弾かれた小柄な体は、シアのものだろう。

あの威力のスキルだ、軽減があるから死にはしなくても、怪我は
しているはず。

駆け出す勢いを弱めずに、俺はシアへと向かった。

いくらゼロ距離とはいえ、スキル一発でボスが倒れるとは思えな
い。

戦闘はまだ終わっていない。だから、駆ける。

案の定と言うべきか　煙が晴れて見えたのは、大きな火傷を負
いつつも未だに立つケンタウロスの姿だった。

ただし　矢を番え終えた。

今度は、声すら出なかった。
矢じりの向きは、未だに起き上がれぬシアへと向けられている。
ただでさえ、物理的な戦闘には向かないシアだ。あの状況から避けられるはずも無い。

煙が邪魔で狙いをつけなかったのが幸いか、ケンタウロスは未だに矢を放っていない。

一瞬意識が飛んでいたのか、上体を起こして目に映った敵の姿に凍りつくシア。

矢は、シアの眉間へと向けられていた。

つまり それは、発射される直前だったということ。

大きな傷を負ってしまえば、いくら上等な回復薬だってその傷を塞ぐ事は出来ない。

まして、死んでしまえば 治せるのは、歴史上二つしか確認されていらない最上級の宝物である『虹色の霊薬』くらいだ。

妙にクリアな思考が、そんなことを考えていた。

やめるよ、やめる。こいつが死んだら、何の為に俺は此処にいるんだよ。

何を叫んでいるかも分からず、夢中で手を突き出す。剣はさっき殴られた際に落としたらしく、俺は無手。

俺がシアを突き飛ばすには少し離れすぎている。

シアを救うには

「ぜ……ふいす？」

こうするしかなかった。

利き手である右の掌に、深々と矢が突き刺さる。

矢は開かれた手の中心を器用に貫いていた。何にも考えずに突き

出した手にしては、なんとも良いコースだ。

……なんて、冷静を努めてみるけど今までの人生で一番痛い。止め方も知らないが、嫌な汗が吹き出してくる。

「ゼフィス……ゼフィスっ！」

面食らっていたシアに正気が戻る。

必死に、心配そうに俺を呼ぶ声で、俺は少しだけ痛みを忘れた。焼けるような痛みというのはこういうことを言うのかもしいない、なんて下らないことを考えるが、あんまり痛みは紛れなかった。

俺を心配する呼びかけに返事もせず、動く左手でシアを抱えて駆け出す。

女の子を抱えて逃げるなんてちょっと良いシーンかもしれないが、これで待つてくれるような魔物は魔物じゃない。

落ちた速度ながらも、なんとかといったところで放たれた弓を避け、シアを放る。

少し乱暴だが、文句は無い。というか、いまシアの頭の中は心配で一杯だろう。

「怪我っ……！ 怪我がっ！」

こんな状態を見れば、逆に冷静にならざるを得ない。

半狂乱、と言った状態のこいつが居るからか、俺の心は対照的に落ち着いていた。

心配は嬉しいが、今は敵を見て欲しい　と伝えると、シアの表情に冷静が戻っていく。

ケンタウロスは、様子見と言ったところか。

二人固まっている上に矢は避けられるという現状、シアのスキル

を警戒して突っ込む事を忌避しているのかもしれない。

好都合だ、とばかりに矢を折ってから抜き、回復薬を飲む。

……傷は深いが大きくない。内臓にさえ届かなきゃ、コレぐらいはすぐに回復できる。

一応は傷が塞がった右手を動かす。

痛みは無い。剣の回収さえ出来れば、まだ前で戦える。

「ゼフィス……ごめん」

「気にしてないって。まあ、これが前衛の仕事だからな」

呪術師は後衛なんだけど、と付け足す。

俺の冗談に、シアは軽く微笑んだ。

……いいぞ、少し精神的に余裕が出てきた。

どんな状況であれ、心は冷静に。

これは迷宮探索全てにおける鉄則だ。

こうして心を落ち着けて、相手を見れば対処できない攻撃なんてない。

いや、まあ深層の敵には太刀打ちできないだろうけど。

ともかく、とりあえずはアドバンテージをとったと思う。

警戒されるようにはなつたが、ダメージの交換じゃ回復できた此方の方が得をしているはずだ。

さっきのエナジーボムの様な綱渡りはごめんだが、気をつければ勝てない相手ではないと思う。

「……頼りにしてるぜ、後衛」

敵を見据えながらも、後ろにシアを庇う俺は呟いた。

シアの様子を探っている暇なんぞないから、後ろでどんな顔をしているかは分からない。

だが、俺の意図するところは分かっている筈だ。

返事が返ってくる事は無い。

ただ、後ろで詠唱を始めた気配を感じた、それだけで十分。

後は暫定前衛の俺が、時間を稼げば良い。

ダメージの交換をしていれば、勝てないはずが無い。

しかし、こいつ相手にソロで戦おうとしたとは、俺も大概馬鹿だな。

転移符を破れば尻尾巻いて逃げれるとは言え、最早ソロで勝てるとは思えん。

ポイズンプールなんて長詠唱スキル、唱えてる暇もねえ。

けど流石に素手じゃあどうにもならないな。

始まった詠唱を危惧し、それを阻止せんと駆けるケンタウロスを見て、俺は冷たい汗を流した。

慣れてないしな。なるべく使いたくなかったのだが、仕方ない。

俺は、先ほど回復薬を取り出した小さな袋に手を突っこみ、小さなナイフを取り出した。

正確に言えば、それはナイフではない。

初期に作成して一度使って以来、その性能のゴミさ加減に売る事すら忘れていた装備アイテム。

先生という愛称で呼ばれる迷宮最弱のモンスターの牙を、鉄製の棒にくつつけただけの、ナイフとすらいえない何か。

それがこのクロウバイツの牙剣だ。

迷宮の探索が解禁されて間もなく。二階層にすら進めない俺が大量のクロウバイツを狩っていた頃の話。

換金するには大した金額にならず、かといって捨てるのも と思つた俺が、大量に手に入れたドロップアイテムを処分するため鍛冶屋に依頼して作つた品だ。

攻撃力は低いし、大量の素材を要求する割りにリーチが無いし…
…良いところといえば、作成に必要な時間と安価さだけが長所
という、ある意味で凄まじい性能に存在すらを忘れ去っていた装備品。

まさか再び握る事になると思わなかつたのだが 運命とは分らないものである。

最大の長所はないよりマシ。まるで呪術師の様なナイフだが、今回はクロウバイツ先生の手でも借りたい気分だった。

そうこうしているうちに、ケンタウロスが俺に肉薄する。

狙いは後ろのシアなのだろうが、そうはさせるか。

こつまでして詠唱を止めたいのだ、先ほどの一撃はよく効いたという事だろう。

「ふっ！」

今度は縦ではなく横に薙がれる弓を、牙剣で受け止める。

…すると、どうだろう。並べられた牙の間に弓がかみ合い、先程よりもしつかりと受け止められた。

先ほどのエナジーボムが効いているな、さつきよりも明らかに力が弱まっている。

それに、牙と牙の間が櫛のように作用している。これならば俺は、今度こそその弓を弾くよう、手を大きく上に上げた。

ガードなんて考えていない行動だが、先程より更に崩れた体勢からの蹴りなんぞ、それほど怖くは無い。

あちらの方が力は有りそうだし、同じような事をされたら危ないかもしれないが、その時はその時。……所詮元素材はクロウバイツの牙だし。

使えるカードは使えるうちに切っておこう。いざとなれば、手放すのも悪くない。

「お返しだっ！」

先ほどのうさを晴らすかのように、脚を薙ぐ。目標は敵の前足。

所謂ローキックの要領で放たれた蹴りは、体勢の崩れたケンタウロスの目標部位に命中し、更に体勢を崩させる。

次いで行われた牙剣による斬撃は 弓でガードされた。あわよくば、程度の一撃だったので、さほど驚きはしない。

それよりも

「いくよゼフィス、しっかり避けてねっ！」

……『エナジーボム』！」

そろそろ後衛の詠唱が完成……って、なんだと!?

あのシアが俺に対して忠告するなんて!

驚きが大きいが、事前から詠唱状態には気を配っていたので、回避行動にはスムーズに移れた。

避けるついでに相手の体勢を崩す目的で、蹴りを穿つ。

……この戦法、そろそろ得意になってきた気がするぜ。

地面の代わりに敵を蹴り、射線の外へと移動。

二発目のエナジーボムだが、さて。決まってくれると良いんだがな。

離脱した勢いを殺しつつ、敵を目視で確認する。……前足が崩れ、膝を地に付いている。

よし……あの状態から完全に交わすことは出来まい。

現に、ケンタウロスは回避を捨て、防御行動に移っていた。

弓を持ったままに人間の両腕をクロスし、顔を庇っている。ケンタウロスにとっても、頭は急所らしい。

「シアも撃つたら逃げる、の要領で、かなり離れた場所にいた。いいね、ちゃっかりしてるぜ。」

眼球の動きのみで敵と味方という対象的な二つの命を確認した俺は、詠唱に入った。

流星にポイズンプールを唱えているだけの余裕は無い。

これが成功すれば、詰みとは行かずとも王手は同然。

「全てに仇成す存在よ」

力在る言霊を、紡ぎだす。

直後に、凄まじい爆音。エナジーボムが、炸裂したようだ。

「生ける者を呪おう、我らの怨恨を分かち合おう」

視界の端にケンタウロスの姿を捉える。

両腕でのガードは功を成したらしく、未だに生きているのは流星の一言。

しかしシアの魔術もまた流星なもので、より前にあって直撃を受けたケンタウロスの左腕は、消滅していた。

「足を引け肩を引け頭を掴め」

怯むケンタウロスが、ようやく痛覚を押さえ込んで、俺を発見する。

いままで前で戦っていた俺が詠唱をしている姿を見て、一瞬固まっていた。

矢は放てまい。シアのエネルギーボムに食いちぎられたから。

魔物でも驚くんだな、と。集中の外で、そんな思考が頭をよぎった。

「我らと同じ位置へと引きずり込もう」

詠唱を阻止せんと、慌てて駆け出すケンタウロス。

だが、スキルを唱えるまでも無く、その行動は傷によって脚を引っ張られていた。

「『ゴーストタッチ』」

そして静かに、呪いは解き放たれた。

おん、と静かに、濡れたずた袋を引きずるような湿った空気が巻き起こる。

……なんだ、これ。

さっきは状態異常が起きたただけだったのに、今は

ケンタウロスに纏わり憑く怨霊の姿が見える。

ゴーストタッチが成功した事は 先ほども成功していた事は、間違いないと思う。

ダメージと、自らの体にのしかかる何かの存在に、ケンタウロス

が転倒したから。

ただ先ほどとは違って、俺の目には『その者達』の姿が映っていた。

……どういうことだ？

「まあ、いいか！」

気にはなるのだが、効果が消えないとも限らない。例えば、あの怨霊が打ち払われでもしたら。

だからこそ、この状況のままに押し切る！ ……あの怨霊、こっちに牙むいたりしないよな？

「シア！ ファイアボールだ！」

「まかせて！」

遠くのシアに指示を渡すために叫ぶ。

俺はというと、クロウバイツの牙剣を投擲しつつ、駆けた。

ただし、ケンタウロスではなく、ショートソードへと向かって。

それを阻止しようとするケンタウロスだが、飛来する牙剣に気付き、それを回避する為に上体を伏せていた。

それだけの間があれば十分。

体勢を屈め、ショートソードを回収。その勢いのままに、只管走る。

突撃する俺を迎え撃たんと、片腕で弓を構えるケンタウロス。自慢の剛弓もこうなっただけの鈍器。

「弦いらんじゃねえのか……よっ！」

走りの勢いを利用して、前転宙返りからの斬り付け。
全体重にプラスして、猛ダッシュの運動力。が、そんな全力斬り
を持ってしても、切断できぬその弓。

「硬つてえ……！」

ただの鈍器とは言ったが、十分に脅威だなこれ。

……っていうか、怨霊怖いなこれ。いつこちらに来てもおかしく
なさそうだ。

防がれた事で崩れたバランスを直し、地面に降り立つ。

こんな状況ですら防がれるとか、ソロじゃ本当に毒以外口クナダ
メージが入らなそうだ。

「行くよっ……『ファイアボール』！」

けど、今は一人じゃない。

声掛けてくれるようになったし、さっきの誘いを受けておいても
良かったかな、なんて考える。

将来性を見抜けなかった俺のミスだな、っと！

ファイアボールの射線から隠れるように、ケンタウロスの影へと
回り込む。

ゴーストタッチの効果で、露骨にスピードが落ちているな。ファ
イアボールを避けた上で足止めするのも容易い。

頭に血が上っているのか、ケンタウロスは俺のみを見ている。

避けようともしない魔物の頭に、ファイアボールが当たったのは
当然といえよう。

小規模な飛び火が、ケンタウロスの頭から隠れ見える。

質量を持った火球に、弾き飛ばされる頭。

「 終わりだ」

それに、ショートソードを突き立てる。

強烈な衝撃を与えたファイアボールは、代わりにケンタウロスから余裕と行動を奪っていった。

流石に防御なしじゃ、素の防御力はリザードマンより低いようだ。……人の顔に良く似たモノに剣が刺さっているのを見るのは少し気味が悪いが、さておき

その巨体からは力が抜けていき、それでも俺がその巨体を支える前に、ケンタウロスは魔力へと還って霧散する。

残ったのは、四つの蹄のみ。

勝った。

安堵すると共に、腰が抜ける。

顔を動かしてみれば、後衛の魔術師さんも同じのようだ。

シアは杖を本来の目的で地面につくも、よりすぎるようにして座り込んでいた。

一言を掛けようと思ったが、ちよつと遠いな。

笑う膝をなんとかなだめつつ、ドロップアイテムを回収してからシアへと歩み寄っていく。

「よっ、お疲れさん」

軽口を叩くけれども、俺は体中が震えていた。

「……うんっ！ お疲れ！」

体中が震える俺を茶化す事もせず、満面の笑みを返すシア。
……ようやく実感が湧いてきた。
十階層、突破出来たんだなあ、俺。

とりあえずのところ、シアを見殺しにしなくても済んだ。
一人じゃ突破できそうに無い壁を、突破する事が出来た。

何より、パーティの大切さを知った。それは、お互いに。

もう外には出る事が出来るのに、俺達はそれをしないでいた。
非常に気だるかったし、シアが何かを喋りたそうにしていたから。

「ねえゼフィス」

俺もいくらかこいつのことを理解したということか、そんなことを
思い浮かべた直後のことだった。

さっき九階層の階段前でのよう。背もたれである壁が無いけども、
シアは組んだ腕の中に、顔を半分くらいうずめていた。

「なんだ？」

返すのは、簡潔な続きの要求。

もうちょっと気の利いた事を言っても良いのかもしれないが、強
い疲労を感じている俺には出来ない芸当だ。

だがシアはそんな事は気にせず、恥ずかしそうに続けた。

「階段降りる前に、言ったこと覚えてる？」

遠慮がちに紡がれたのは、少しばかり恥ずかしい、掘り返された
くない過去。

「……ああ、覚えてる」

まあ、覚えてるんだけどさ。
シアの顔が少し、明るくなる。

「あんたさ、俺が最初の友達になってやる、って言ったよね」
向こうも覚えてたみたいだ。
恥ずかしい。

でもまあ、シアが何を言いたいかは、大体は分かっていた。

「あの言葉……まだ有効？」

「……そうだな、有効だよ」

そこで、お互いの言葉が途切れる。
けれどここで話を終わらせる気は無いらしい。
真っ赤な顔のシアが、此方に振り向いた。

「じゃあ、レーゼって呼んでも良い……？」

友達ってさ、名前で呼び合っんでしょう？」

聞いているこっちも、真っ赤になりそうだった。
断る理由なんぞあるはずも無い。

「ああ……よろしくな」

肯定の意を伝えると、シアの顔に満開の花が咲いた。

……こうしてみると、かなり容姿が整ってるんだよね、こいつ。
友達になろうって言われているだけなのに、何故だか気恥ずかし

くて、視線を逸らしてしまった。

恥ずかしさを紛らわすように、立つ。

このままじゃ恋の一つもしてしまいそうだ。

「そろそろ行こうぜ？ 流石に疲れちゃったよ……と、ホラ」

何かを言われる前に、先ほどのドロップアイテムを二つ渡す。

「あ……っ、これさっきの……いいの？ ドロップアイテムはレゼの物なんでしょ？」

「友達へのプレゼントだよ。まあ最初のプレゼントが遺骸ってちょっとアレだけどさ。」

靴作るのは1セットで二つしか使わないみたいだしな。欲しけりやお前も作ったらどうだ」

目的と意味を伝えて、振り返る。目標は開いたドア。

習ったとおりだと、エントランスへのポータルと、此処に戻ってくるための魔石が置いてあるそうだ。

今の俺は、それを見てみたいので頭が一杯だった。これが楽しくて、冒険者になりたいと思ったからな。

再び振り返って、シアに向き直る。

「ほら、行こうぜ」

友達に話しかけるように、気安く。

先ほどまでしていたような、空気を明るくしようだとか、最低限のコミュニケーションをとっておこうなんて気は無い。

友人に語りかけるなんて気安いもんだ。そう、伝えなかったから。

伝えたかった事は、伝わったのか。
シアは微笑んで付いてくる。

「うんっ！」

そうして肩を並べて、俺達は出口へと向かっていった。

ドアをくぐってみると、其処には少し開けた空間。

台座に置かれた一つの魔石。

そして、明らかに異質な力を感じる転送陣と台座。使用した事はないが、授業の一環で見た事はある入り口のそれに似ていることから、間違いは無いと思う。

シアに聞いてみると、やはり上に乗る事で入り口まで転送してくれるものらしい。

とりあえず、と。

台座に置かれた魔石を手にとって、よく観察する。

……魔力が込められている事は分かるが、思ったより微小だな。
オレンジ色の滑らかな石に、ケンタウロスと思われる簡易な絵……
…というか、マークが刻んである。

これをかざせば十階層まで転移できるのか……早くやってみたいな。

まあ、それを出来るのは早くてもでも明後日からなんだけど。

「あう……明日がウイスプの曜日で良かったわ。

一日中走っていたから、筋肉痛になりそう」

そう、明日はウイスプの曜日。

言われずとも休みたい程度には体が疲れているが、規則なので明

日の迷宮探索はお休みだ。

魔石を袋に入れながら、転送陣に目を移す。

大きさから言って、六人程度は中に入れそうだな。

「あれ、どうやって使うんだ？」

指差して、シアに聞く。

「あそこの台座のボタンを押すだけよ。
分かりやすいでしょう？」

成る程な、と台座に触れてみる。

……冷たい。これもちよつと特殊な石で出来てそうだな。

本当なら余すところ無く観察したいところだが、機能と使い方が
分ければ十分だ。

とりあえず今は、早く帰って眠りたい気持ちで一杯だった。

「それじゃあ、帰ろうぜ。もうクタクタだ」

「ええ、そうね。あー……えっと、また明日！」

「……そうだな、また明日」

明日の休日にもう一度会う約束を取り付け、二人で転送陣に入る。
台座のボタンにゆっくりと手を伸ばす。

そうして俺達は、迷宮を後にした。

俺にとってこの日は初めてボスを倒したという記念と、仲間と共に迷宮を進んだという記念が重なった、忘れられない日になるだろう。

いろいろな疲れと喜びをかみしめながら、俺は目を瞑った。

地味な用語解説

『ケンタウロス』 魔物/亜人

十階層を守る、最初のボス。

弓を持つ馬身人頭の怪物。

最初のボスにしては見た目といい、強さといい、多くの冒険者を驚愕させるものを持っている。

弓の遠距離攻撃は、戦士や剣士などの前衛職ならば捌ける速度。

だが詠唱中の後衛職が狙われる事がしばしばあり、今までに無い詠唱カット率に悩まされる冒険者が多い。

多くの冒険者達が敵前逃亡を余儀なくされる、最初の壁である。

ドロップアイテムはケンタウロスの蹄。及び、ケンタウロスの剛弓、蹄は鉄よりも硬く、木製防具と同じ程度の軽さを持つため、優秀な靴に加工される。

弓は言うに及ばず、アーチャーの心強いお供となりえる。

……が、ケンタウロスの剛弓は非常にドロップ率が低く、これを狙うくらいならもう少し深層で素材を集めた方がマシと言われるほど。手に入れる頃にはそうとう強くなっている場合が多く、ある種コレクターアイテムの様に扱われることも多い。

『ゴーストタッチ』 スキル/呪術師

相手目掛けて不可避の怨霊を飛ばし、取り付かせて重さを与えるスキル。ちなみにこの怨霊、迷宮内で死んだ冒険者達がニョッキリ出てきたもの。

とはいえ、怨霊を見るには一定以上『死に対しての造詣』が必要であり、レーゼがそれを手に入れたのは仲間の死を意識してからであった。

重くなれば素早さが落ちるのはあたりまえ、遅くなったモーシヨンは物理攻撃の速度に威力をも低下させる。更には、疲労も感じやすくなる。

一見非常に優秀なスキルだが、やはり落とし穴もあり、詠唱の長さが相変わらずネックとなる。

しかし、後衛で唱えればやはり強力なスキルには違いない。呪術師の明日が試される……！

ちなみに、感想版で囁かれていた術者へのデメリットは無い。

怨霊さんたちは嘆いたり、見た目がアレだったりする割に、生者の脚を引っ張るのが大好きなため意外と気さくに力を貸してくれるとか。

会話するにはもう少し、『死に対しての造詣』を深める必要がある。

『クロウバイツの牙剣』 武器/短剣

鉄製の棒に、クロウバイツの牙を埋め込んでいった非常にシンプルな武器。

攻撃力が低い。性能の割りに大量の『クロウバイツの牙』を要求するなど、正直に言えば勢作の労力に見合わない攻撃性能のため、普段は見向きもされない。

しかし、こうして使えばソードブレイカーのような役割も果たす事には果たせ、防御性能は地味に高い。

特筆すべき点といえばそのくらい。素材が余りに余っていたら、作るのも良いかもしれない。

ちなみに、レーゼは投げたこれを回収し忘れました。疲れていたししょうがないね。さようなら大量の先生達。

第六話 おひげの素敵なあいつ（後書き）

ストックが切れたので、これから先の更新頻度は1週〜1ヶ月に
話程度になると思います。

第七話 休日中の君「いやぁ思いましたね。爆発しろって」

不意に感じる明るさで、俺はその日の朝を迎えた。

歯で何かをすりつぶすかのように、ゆっくりとした動きで顔を顰めてから目を開けると、カーテンから差し込む日の光が俺を照らしていたようだ。

どうやら、カーテンも閉めずに寝てしまったらしい。いくら疲れていたとは言え、今度からは気をつけないとな、と自分に言い聞かせる。

「……もうひと寝入りしたいな」

などと言いつつも、もう体は起き上がっていた。

普段どおりであれば実際に二度寝を敢行してしまうのだが、今日はそもいかない理由があった。

頭に浮かぶのは、昨日出会った魔術師の少女。

迷宮を出た俺達は、今日会う予定を取り付けてから解散した。

ドロップアイテムの加工をしに行ったり、消耗したアイテムを買い足しに行ったり。お互い、ウイスポの曜日である今日にする事は同じなのだから、どうせなら一緒に買い物でも と、言ったのは果たしてどちらからだったか。

疲れていて約束の時間くらいしか覚えていないが、頭の片隅に何かを言いたげにしているシアの顔が残っているので、多分言い出したのはあいつだろう。

ならば、遅れるわけにはいかないわけで。

付き合いが長いわけでもない と、言うよりも、いままでは突っかかってこられてばかりでマトモな会話をしたのは昨日が初めて

なのであいつの事はまだよく分からないが、遅れたら何をされるか分かったもんじゃない。

恐らくこの考えは合っているんだろうな、と思いつつも俺は支度を進めていった。

寝ている間に掻いたであろう汗を洗い流し、歯を磨いて、しっかりと顔を洗う。

毎日欠かすことは無い自然の動作。記憶にすら残らない呼吸の様なそれをこなして、学生服を合わせる。

学園内は卒業した外の冒険者なども溢れているから多種多様な服装を見るが、学生は基本的に制服の着用が義務付けられていた。

迷宮にもぐる時の衣装は制限は無いので、休日こそ制服、とはなともおかしな校風である。

「よし、と」

いつも持ち歩いている袋にステータスカードや財布などの貴重品を入れて、それを持つことで朝の準備を締めくくる。

朝食　とは言っても、もうじき昼食の時刻に食い込むが　は、どこかで食べるなり、買うなりするでしょう。

約束の時間は十時。現在時刻は九時十分。約束の場所までは大体三十分と少しくらいなので、余裕をもって行動することが出来る。

後は部屋を出て、ゆっくりと歩くだけ。

……と、思っていたのだが、そうそう忘れるところだった。

「行ってくるからな、イリザー」

同居人……と云うべきなのか分からないが、そろそろ一年くらいの付き合いになるウインディに声を掛けて、ケージの中の餌箱に餌

を入れていく。

殆どの生徒は、こうしてウィンディという鳥を飼っている。頭が良く、人懐こくて風よりも速い世界最速の鳥。生徒間で文書のやり取りをするに、これほど便利な生き物はそうそう居ない。

かく言う俺もウィンディを飼う学生の一人で、委員長や幼馴染との文章のやり取りに協力してもらっている。

このウィンディという鳥は魔力を感知する能力に長けていて、専用の装置に魔力を込めて、目的の場所に置くとそこを目掛けて文章を運んでくれるのだ。

赤い装置に魔力を込めてから、手紙に赤い印を押せばその赤い装置の場所へ。青の印なら青の装置へ、黄色なら黄色。まったく賢い鳥である。

俺はケージの前においてある、リンクランプと呼ばれる緑色の装置を手にとり、微量な魔力を込める。

魔力の込められた装置は、淡い緑色の光を発し始めた。

「イリザー、久々に新しい届け先追加するから、頼むな」

今しがた手に取ったそれを、ウィンディのイリザーに見えるよう、掲げる。

それを見たイリザーは、餌を食べるのを一旦止め、羽を広げた。そしてまた、間髪いれずに食事へと戻る。

本当に賢い事だ。最初は手紙のやり取りをする為に飼い始めたが、最近じゃあ一番長くを共にする親友の様に感じている。

出かける前に思い出せてよかったな、と思いつつ、俺は緑の装置を袋に突っ込んだ。

なんだか鬼気迫る表情で要求されたアイテムだ。忘れたら、約束

の時間に遅れるより酷い目に合いそうな予感がする。

昨日のエナジーボムの威力を思い出し、温度を下げた背中に肩を抱く。

しかしまあ、時間も大丈夫。持ち物も問題なしと、当面は叱られる要素もなさそうだ。

「それじゃ、行って来るからなー」

最後に一言、イリザーへと挨拶を残して、自分の部屋に鍵を閉めた。

学生寮とは言え、盗難なども無いわけじゃない。

ようやく全ての準備を終えた俺は、長い廊下を歩いていった。

待ち合わせとなっている商店エリアの入り口。

シアとの待ち合わせ場所になっているそこへと向かい、特に急ぐわけでもなく歩く。

ポケットから時計を取り出し、時刻を確認。時刻はまだ九時三十分を指していた。

休みの日だからもう少し混んでいるかと思っただが、今日は人ごみに邪魔されるわけでもなくすんなりとたどり着くことが出来た。

いつもなら、もう少し歩きづらい程度には混んでいるのだけれど、運が良いのか悪いのか。

どちらにせよ、このままでは少し待つことになりそうだな、と思った。

不測の事態でもなければ、このペースだと目的地まであと五分もかからないだろう。

それまで何をしていようかな……などと考えつつ、歩いていく。

辺りを見れば、生徒から学外の冒険者まで、老若男女多種多様な年齢層の人間が歩いていていた。

この商店エリアは生徒のみならず、冒険者は勿論、一般の人間も使用する事が出来る。

そのため、休日などは特に混むのだが　今日は平日とさほど変わらないようだ。たしか外で祭りでもあったんだっけな。

まあそれで約束の時間に遅れるよりはマシなので、運が良いと思っても問題ないだろう。

結局のところ、俺の行動を妨げるような自体は何も無く、予想していた通り大分早く目的地に到達してしまった。

時刻は、九時三十三分。少なくとも、あと十分程度は待ちそうだ。

などと、考えていたのだが

「……あれ、シアか？」

待ち合わせの場所には、既に知った顔がいて、そわそわと時計を確認していた。

言うまでも無い、シアだ。……街灯の柱にもたれかかるようにして、しきりに掌の時計へと目を移している。

まだほぼ三十分前だぞ？

勿論約束の時間には早いし、あの様子だと既に何分かは待ってい

そうだ。

一応はあいっだって女の子。待たせるのは悪いと思って十五分前には此処に来る……つもりで、十五分どころかその二倍近い余裕を残して到達してしまったというのに、何故当たり前の様にヤツが待っているのだろうか。

……まあ、いいんだけどさ。

大方時間を間違えたとか、その辺だろう。

三十分前行動とかしそうなヤツじゃないし。

「あっ……おはよ、レーゼ」

「おう、おはよう」

とはいえ、待つ予定だった時間を待たなくて良かったのは素直に嬉しい。

気安く手を挙げながら近づいていくと、待ったであろう時間なんて気にも留めずに、シアは挨拶を交わしてきた。

向こうが気に留めていないようなので、俺もそれに対して挨拶を返す。

昨日よりもいくらか、態度が柔らかくなっている気がするな。

さて。とは言え女の子と出かけるのなんて、子供の頃を除いたら初めてだ。

俺は一体なにから始めればいいんだ？

……いや、恋人でもあるまいし緊張するのもなんだか馬鹿馬鹿しいな。

普通にしていれば、普通にしていれば。

「とりあえず、移動しないか？　どこかで朝飯を食べたいんだけどさ」

適度を感じた空腹感に従うかのように、当面の目的を提示する。
シアはもう食べたのだろうか、もし既に済ませていたようだったら、どこかで買つとしよう。

「そうね、そういえば今日の予定は何も決めてなかったから、どこかに入って食べながら決めましょう」

口ぶりからすると、シアも朝食はまだのようだ。

シアの言葉に頷き、じゃあ行くか、と商店エリアへと親指を向ける。

するとシアも簡素に頷いて、一緒のペースで歩き始めた。

歩き始めてから一分も経たないうち、シアが並び歩く俺へと振り向く。

何かを言いたそうにしてる。まだ少し距離感を感じているのだろうか？

友人との談笑をしたこと無い、と言うのは本当なのかもしれない。いや、疑っているわけじゃないんだが。

「ん、どうした？」

だからこそ、此方から聞きやすいように、シアに疑問符を投げかける。

少しだけ目を見開いて、顔の方向を前へと向きなおすシア。
俺も、それに釣られてシアから視線を外した。

「……昨日のこと、ちゃんとお礼しておきたいなって。」

レーゼ、迷宮を出たらすぐに帰っちゃったから、言いそびれたのよ」

意外と律儀だな。

お礼を言い忘れたことに後ろめたさを感じる、か。

俺はシアの成績がいいからか迷宮前での出来事からか、勝手に高飛車なイメージを浮かべてたみたいだな。

やっぱり不器用なだけなのかもしれない。あと短気。

「大丈夫だって、お陰で俺も十階層を突破できたしな。

一人じゃムリだったと思うし、結果オーライってな」

親指を立てて、シアへと笑顔を向ける。

確かに昨日は厄介ごとと思うことも少しはあったが、今となっては感謝しているくらいだ。

パーティ戦の立ち回りが少しは理解できたし、何より一人じゃ太刀打ちできないようなボスも倒せた。

迷惑を差し引いても、プラスで返ってくる。そんな出来事だったと認識している。

だからなにも問題ないんだぜ、と。

笑顔のままに答えて見せる。

すると、顔をそらされた。

……解せぬ。まあ正面から見詰め合うのは俺も恥ずかしいが。ただ、謝罪ムードはシアから少しだけ消えていた。

折角の休日だ、友人とどこかに出かけるのは久しぶりなので、目一杯楽しみたい。

それから少し、談笑が続く。

これから何しよう、だとか。それはメシを食いながら決めようぜ、とか。

休日の友人同士らしい会話だ。シアもこんなやり取りに積極的に色々話題を振ってきた。

下らない日常の会話が続く中、ふとシアが足を止めた。

視線の先には、サンドイッチを売りにしているらしい喫茶店、カフェ・ヴァランタイン。

そういえば最近委員長が美味しいって言ってた気がするな。

「ねえレーゼ、ここ入ってみようよ。前から気になってたんだ」

そうそう、たしか委員長から女の子を中心に人気がある、と聞いた店だ。

シアもすっかりと『女の子』という枠の内側にあるようで、目を輝かせながら聞いてきていた。

サンドイッチなら朝食にはちょうどいいかな。昼飯に片足を突っ込んではいるが、そんなにしっかりと腹を満たしたいわけではない。

「ああ、いいな。俺も少し興味がある。」

混んではいけないみたいだし、今のうちに入って座ろうか」

朝食時でも昼食時でもない、という時間帯のせいだろうか。

店内を見れば、いくつか空席があった。

これからの予定を決めるというのも目的の一つなのだし、出来れば座れる方が好ましい。

そこまで考えているかどうかは分からないが、シアも座れるという状況は嬉しいらしい。

一応は女性にカテゴライズされるシアをエスコートするため、一歩先んじて店のドアを開ける。

扉に付けられたベルは乾いた音を鳴らして、俺達を迎え入れてくれた。

「いらつしやいませ。お二人様でよろしいですか？」

次いで、店員の挨拶が俺達へと掛けられる。

接客態度の良さ、店内の清潔さ、落ち着いたイメージ。今のところの印象は完璧だ。

流石に評判なだけはある、味の方も評判どおりが期待できそうだ。

だが今の俺には、どこか冷静な頭で店の評価を付けつつも、もっと大きな 聞き逃す事が出来ない事があった。

「お二人……様だと……？」

いつもはデフォルトで「お一人様でよろしいですか？」と聞かれる俺に お二人様という単語が染み渡る。

単語の中の数字が一から二に変わった。たったそれだけだというのに、なんだろう……この気持ちは！

別に、仲が良い人間がいらないわけじゃあない。むしろ友達が多いほうだと思っし、幼馴染との手紙のやり取りだってある。

けれど休日に誰かと出かけたのなんて本当に久しぶりで。お二人様、なんて言葉を掛けられたのは 何年ぶりなんだろう。

「あつ、申し訳ございません。本日は何名様のご利用でしょうか？」

違う、違うんだ。そんな顔をしないでくれ。

思考を丁寧語に変えてそう、可愛らしい制服に身を包んだウェイ

トレスを制止する。

さあ、言うんだ。憧れたあの言葉を。はいという、たった二文字を！

「はい、二人です」

「かしこまりました。ではお席にご案内致しますので、此方へどうぞ」

目を瞑り、そして開く。

隣には、いぶかしげな視線を送ってくるシア。

その目の意味は分かる。だがお前には分かるまい、お二人様、という言葉の偉大さが！

「えっと、レーゼ？ どうしたの？」

「いや……なんでもねえよ、なんでもないんだ……」

兎も角、感動ばかりもしてられない。

別に構わないとは言え、可哀想な子扱いは出来れば避けたい。

ゆっくりと歩みを進めるウェイトレスを追随しながら、俺は心を落ち着けた。

外から少し見えたが、テーブルと椅子も店内の雰囲気と良く調和している。こだわりが垣間見えるデザインはやはり良い物だ。

「ご注文がお決まりになりましたら、お手数ですが私どもをお呼びください。」

では、「ゆっくりどうぞ」

席に着いた俺達を見て、抱えたメニューを丁寧な仕草で置き、にこやかな笑顔で去っていくウェイトレス。

可愛らしく揺れるスカートを見送りながら、俺達は顔を合わせた。

「良い雰囲気だね、このお店」

向き合っていた視線を外し、店内を見渡すシアは、楽しそうにその語りかけてきた。

やはり良い物は誰が見てもそれなりに良い物なのだろうか。シアに同調して、内装を褒める。

「ああ、落ち着いた雰囲気も接客態度も良いよな。

これで味がよければ完璧だけど、さて、どうかねえ」

置いていかれた、ブック状のメニューを開き、左の上から順番に見ていく。

……流石サンドイッチカフェ。思いつきもしないようなサンドイッチが沢山だ。

勿論、王道といえるサンドイッチも多数。見るだけでも飽きないな。これは、確かに人気が出そうだ。

「うーん、迷うなあ」

シアも俺と同じようで、迷うとはいいつつもその顔は非常に楽しそうだ。

さて、朝食とはいえメニューを見ていたらお腹が空いてきたな。

何らかの肉類を取りたいところだ。そしたらハムか、魚肉か……悩ましいな。

お、このスモークサーモンとマヨネーズのサンドイッチ美味しそうだな。

しかし、オーソドックスなハムとレタスのサンドイッチも捨てがたい……くそっ、俺はどうしたら良いんだ……？

「ねえ、レーゼ、ものは相談なんだけど」

俺がメニューと格闘していると、向かいのシアからなにやら相談が持ちかけられる。

……まあ、内容なんて聞かなくても分かるんだが。

「あたし、このハムとレタスのサンドイッチ頼むんだけど……レーゼの頼むやつと半分こしない？」

そんなにいっぱい食べれそうにないんだけど、どれも気になるのよね」

予想通り、というべきか。

コレだけ多くの種類のサンドイッチが在るのだ、一種類だけでは少し寂しいというか、勿体無いというか……

しかし、ハムとレタスのサンドイッチとは、堅実ながら素晴らしい選択だ。意外とコイツとは気が合うかもしれないな。

変なところの大雑把さが目立つ割には、堅実なんだな。

「喜んで。俺はこのスモークサーモンとマヨネーズを頼むつもりなんだけど、それでいいならだけどな」

「あ、良い選択ね。あたしもそれ気になってたの。それじゃ、店員さんと呼んでもいいかしら？」

ほほう。良いセンスだ。

少なくとも、食べ物好みは合いそうだな。

シアの言葉に首肯し、俺はメニューを綴じた。

折角決定したのだ、これ以上見ていて目移りしては困る。

他のサンドイッチは今度来たときにも食べたいな、なんて考えながら、俺は店員を呼ぶシアを見ていた。

……うつむ、こうしてみていると結構可愛いんだよな、こいつ。
目に優しい水色の髪に、幼さを残しつつも凜とした瞳。
俺は芸術家じゃないから上手くは表現できないが、こんなに整った顔のパーツを持つてるヤツはそう居ないんじゃないかな。知っている中じゃ、委員長とコイツを含めても三人しかいないな。
……やばいやばい。俺は結構惚れっぽいからな、これ以上考えたら本当に惚れちまいそうだな。

一度深呼吸。うん、落ち着いた。

「……どうしたの？」

注文を済ませたシアが、頬杖を付きながら首を傾げる。

冷静を取り戻した俺は、焦る事無くなんでもないと返した。

それでも友人をそんな目で見ていた、とはなんだか気恥ずかしくて、視線を逸らしてしまった。

店内は、知らない間に結構込み合っていた。

「さて、それよりもこれからの予定を決めようぜ。
行かなきゃ行かないのは最低二店舗、道具屋と素材の加工屋なん
だが」

店内が混んでいる以上、長居するのモナ。

注文したサンドイッチが届く前にも、少し今日の予定を決めておいたほうが良いだろう。

俺は周囲から視線を逸らし、再びシアへと向けた。

すると、何故だか慌てて顔をそらされる。……なんだ？ 向こうも俺と同じ事を考えていたとか？

……まあ、無いか。俺だったら俺を見ても、お世辞でも格好良いとは思わないし。

特に気にする事も無く、シアの反応を待つ。

先ほどの俺の様に深呼吸してから、シアはようやく俺へと向き直った。

「そうね……此処からだど、道具屋よりもあたしが何時も使ってる加工屋の方が近いかな。」

レーゼが何時も使ってるのはどこの工房？」

「俺はエノク工房。店主が良い人だし、たまにおまけしてくれるしな。」

因みにここも道具屋よりは近いな。歩いて十五分くらいか？」

「エノク工房ってあそこかな？ だったらあたしの使っているところより近いかも。」

レーゼが使ってるんだつたらそこ行ってみたいな。あんたしっかりしてるからアテになるし。」

あ、他に行っておきたい場所とかある？」

話題は、本日の目的から、何時も使っている加工屋へと移り、そして元の目的へ。

この商店エリアには、道具屋は一つしかないが、素材を加工する工房はいくつか点在する。

なにせ命を預ける武器防具を製作する場所だ、冒険者達はその中で自分が信頼できる工房を探し、そこをひいきにする。

店主と良い関係を気付けばそれだけ手を抜かれる事はなくなるし、何より信頼できない人物に信頼せざるを得ない装備を作らせる筈が無い。

俺も例に漏れず、使う素材加工屋はエノク工房ただ一つと決めている。

このエノク工房の店主、エノクさんは非常に実直な人物で、職人ながらに物腰が柔らかな事が利用者からの評判だ。

見た目もなんか、眼鏡をかけてて知的だし。いや、見た目は関係ないうえ、結構マツチヨだけど。

まあ兎も角、自分の使っている工房は胸を張って誇れるものだ。エノク工房製装備の品質と価格は俺が保証する。

例えば、クロウバイツの牙剣だ。劣悪な素材で製作したものながら、市販の鉄製ナイフと変わらない威力は脅威といわざるを得ないって、あ。クロウバイツの牙剣投げたまんまか、ひよっとして悪いことしたな、エノクさんと大量の先生達に。

っと、いかんいかん。自分の世界に入ってたな。とりあえずシアに返答せんと。

「いや、特には無い。しばらくは防具類を新調する気はないし、日用品は揃ってる。

シアはどうだ？」
「んー、あたしもないかな。……必要なお店以外行った事無いからあんまり分らないし。

でも用事が終わったら、ちょっとぶらぶらしてみたいかな。折角のお休みだし、それに……」

少し赤くなつた顔を隠すように、シアはうつむいて言葉を切った。……どうした、と聞こうとするが その前に、シアは顔を上げる。

「『友達』と出かけるの初めてだから、それだけで終わらせたくないよ。

……あの、迷惑だったら、断って良いのよ。昨日の出来事で、疲れてるだろうし……」

赤みを増した顔で、シアは途切れ途切れにそう言って、また顔を

伏せた。

友達が居なかったなりの精一杯なんだろうな。

俺の返答を聞くのが怖いのか、顔を伏せたままに上目遣いで此方に視線を送るシア。

……はあ、バカだな。

そんな顔されたら、断れるやつのが少ないってえんだよ。短く息を吐く。

「断るわけないだろ。どうせ帰ったってやることないしな。

遊ぼうぜ、シア。迷宮探索と勉強だけが学生の本分じゃないんだぜ」

苦笑ではない、ありったけの笑顔を込めて。

友達つてさ、そんな気兼ねするもんじゃないって。

そう続け、軽くシアの額を弾く。それに目を丸くするシア。

……赤くなっていた顔が、少しだけ元の綺麗な白を取り戻していた。

「うんっ！」

そして、満面の笑顔。

女の子のこういう表情、反則だよな。

今度は自分自身に対して苦笑し、頬杖をついて窓の外を見た。

相変わらず多い人通りだな。少ないって言っても、多いことには変わりはない。

流れていく人の川を見つめる事をやめ、シアを見る。……嬉しそうだな。

「お待たせいたしました。スモークサーモンのサンドイッチと、ハムとレタスのサンドイッチです。」
「ごゆっくりどうぞ」

落ち着いた気分で静かな空気を楽しんでいると、丁寧な物腰のウエイトレスがサンドイッチを運んできた。

さっき案内してくれた人とは別の人だったが、この人の雰囲気もまた、店に調和している。

水が注がれたコップをどかして、皿は此処に置いてくれと伝えると、ウエイトレスはやはり流麗な動きで配膳を完了させる。

ありがとうございます、と。

シアと共に声を揃えて、配膳を終えたウエイトレスに礼を言う。

それを受けたウエイトレスは伝票を置き、恭しく一礼をして店の奥へと帰っていった。

「よし、それじゃ、頂きます」

「頂きますっ！」

先ほどとは比べ物にならないほど上機嫌なシアと調子を合わせ、また声を合わせる。

先ほどの契約どおり、お互いのサンドイッチを一つづつ交換し、俺達は食事を開始した。

味は、いままで食べてきたサンドイッチの中で最高だった、と言っておこう。

「はあ、流石に疲れたな」

「でも、凄く、すつごく楽しかった！」

泥む西日の中、俺達は一緒に歩きながら、会話を楽しんでいた。シアは今日の一日、とても満足だったらしい。興奮冷めやらぬ、といった様子で前方で俺の方を向きながら、後ろ歩きを続けていた。

良くも悪くも真面目な人間だったんだろうな。連れていく所連れていくところ、シアはどの場所でも来るのは初めて、と言っていた。

休日だというのにあちこち歩き回って疲れたが、相棒は大満足の様子だ。

この笑顔が見れるのなら、疲れに見合う成果は出せたかな、と思う。

気がつけば、辺りに見える人々もその数を減らしていた。

明日からまた迷宮の探索に戻る人間が殆どだろうしな、疲れを残

さないために早めに帰っているのかもしれない。俺も普段はそうするし。

空はすっかり赤く染まって、もうじき夜の帳が落ちるだろう。夕焼けの街、か。最近ぜんぜん見てなかった気がするな。たまにはこんなのも良いかもしれない。

空を見上げて、俺は微笑んだ。

そんな俺の様子を見てか、前を歩くシアが足を止める。何か言いたいんだろうな。俺は、そのまま歩を進めた。

「ねえ、レーゼ」

「ん……なんだ？」

横を通り過ぎるか否か、のところでシアが横並びに歩みを再会する。

自主的に話を切り出せるようになったんだ、大分、友達してるんじゃないか？

俺は、またふと笑顔を作った。

「また来ようね。来週のウィスプ曜日、空いてる？」

それは、先ほどまでのシアならば「また来たいんだけど駄目か」と聞いていたような言葉だった。

小さくも大きな変化に、思わず頬が緩んでいく。

「今のところはな。今度は別のサンドイッチが食べたいんだよな、俺」

「あは、いいなあ、それ。そしたらさ、また半分こしようね。絶対」

自然と早くなる足並みを抑えながら、それでも前に出ていたシアがまた俺の方へと向き直り、微笑む。

顔は、赤かった。けれどそれは恥ずかしい、とかじゃなくて夕日に照らされた、満面の笑顔。

不器用なだけで、多分良い奴なんだな、こいつ。
純粋な笑顔を見て、そんな事を思った。

「 そうだな。毎週通つてもしばらく飽きそうに無いな、ヴァラントインだったら」

釣られて、俺も笑う。

なんだか今日はやたらと笑う事が多いな。

笑えるって事は幸せって事だろう。たまにはいいな、こんなに忙しく過ごす休日も。

赤く焼けた空が良く見えるように、腕を組んでそれに頭を預ける。
うん、綺麗だ。なんか明日から頑張れる気がする。

疲れを癒したり、色々な手続きや依頼した靴を取りに行ったり
色々な準備があるから迷宮探索は二三日お休みとなりそうだが、
まあ構うまい。

それなりに急ぐつもりではあるが、まあまだ残り三年もあるんだ。
急ぎすぎて足を踏み外したらしゃれにならないし、確実に一步を
踏みしめていこう。

明日からの予定を大雑把に組みつつも、俺は前ではしゃぐシアを見ていた。

よし、明日から頑張るぞ。

足を止め、空に在った視線を自分の横へと移動する。
気がつけば、商店エリアの入り口まで帰ってきていた。
ここからはシアとは反対方向だ。男子寮と女子寮は、意外と遠い。

「それじゃ、ここまでだな」

「……うん」

両腕を学生服のズボンに突っ込み、立ち止まる。

俺が歩みを止めた瞬間、シアも一定の距離で急静止する。まるで、ヒモか何かで繋がってるみたいなきだ。

その声と表情は明らかに先程よりも沈んでいた。名残惜しいのかな、分かりやすいヤツだ。

「また来週、かな？ 迷宮探索、頑張れよ」

「……うんっ！」

だからこそ。

さっきの約束は忘れていないと暗に語る。

やっぱり分かりやすいな。コロコロと反転する表情に、柔らかい苦笑を浮かべてしまった。

「帰ったら、手紙送るからっ！ ちゃんと見なさいよ！ 絶対だから！」

視線を此方に固定したまま、小さくなっていくシア。

良い奴なんだけだな。もっと色々な友達を作れることを祈るばかりだ。

……俺も、パーティが作れると良いなあ。

苦笑を続けたままに、小さく息を吐いた。
とにかく、頑張らないとな！

最期に一度、商店エリアの入り口を見て、俺も自分の寮へと帰っていった。

……その後、シアのウインディが運んできた異様な長文を見て、ちよっと付き合いを考えたのはまた別のお話。

地味な用語集

『ウインディ』 動物/鳥類

最も賢く、最も疾い人々の共。

魔力を感知する能力に優れ、気性は穏やか。特筆すべきはその速度。便利とかそういうレベルの生物ではなく、情報伝達能力は現代社会における携帯メールに迫る。

迷宮内の魔物と、古くから人類と共に生きてきた伝書鳥を掛け合わせた品種で、多くの学生が手紙のやり取りに使っている。

魔力を感知する能力に優れ、リンクランプに込められた持ち主の魔力を感知してそこを目掛けて飛行する。

ごくたまに配達ミスが発生するので、複数の恋人を持つリア充なんかは良く修羅場に遭遇したりする。

便利なのは良いが、あくまでもウインディは生物。連続での依頼は避けよう。

『カフェ・ヴァランタイン』 店舗/料理店

落ち着いていてお洒落な内装、内装に調和した接客、何よりも多種

多様なサンドイッチ。

学園の女の子達が大好きな要素を多分に含んだ最近のひそかな流行店。

カフェとは名がついているが、実際は殆どの客がサンドイッチ目当てで訪れる。

午後のティータイムから軽食、ときたまガッツリと食事までなんでもござれ。

その落ち着いた雰囲気はデートスポットとしても有名で、ケイリオス学園新聞部調べ「彼氏と行きたいお店No.3」を受賞した。

お値段もお手ごろ。店主はイカついが、こだわりを持って店舗を営するオススメの店である。

最近の店主の悩みは、紅茶がおまけ程度に扱われている事。ちなみに、紅茶の味は中の上。

第八話・前 嵐は急にやってくる

「あれ？ レーゼ君だよな？ これは珍しい人に会ったなあ」

その日初めて聞いた知り合いの声は、週に一度ペースでしか会わない親友の声だった。

本当に珍しそうな声は、しっかりと俺の名前を指している。

「んあ……おはよう、委員長」

あくびをかみ殺しながら、俺は腕に埋めていた顔を上げた。

そこに居たのは まあ声を聞いている以上間違えるはずはないけれども、我がクラスの委員長、イレイン「カートニックスさん」だった。

自分の名前を呼ばれたことで、俺の意識が深い黒の中から引き上げられる。

いつの間にか眠っていたみたいだ。昨日遅かったからなあ……

「ふふっ、眠そうだね。でも本当に珍しいな。今日は何かいいことがあるかも」

楽しそうに笑いながら、委員長は俺の隣に腰を下ろした。相変わらず可愛い微笑だ。シアの奴もかわいかったが、やっぱり知り合いの中じゃ委員長が一番可愛いと思う。

……っと、思わず見とれてしまった。返事が遅れないうちに、俺は委員長の言葉に返答をする。

「ちょっととした心境の変化があったんだよ。まあ確かに珍しいかもしれないな、呪術師が『前衛の戦い方・基本』なんて講義を受けに来るのはさ」

手のひらを見せるようなジェスチャーをとって、苦笑する。

先日シアと戦ってわかったのだが、俺……というか呪術師というジヨブはギリギリ前衛が出来なくもない。

だったら、使える手は多いほうが仲間も探しやすいのでは　と　というのが、いまここに俺が居る理由だ。

ぶっちゃけなりふり構っていられないとも言う。

そんな自身の考えを、殆どそのまま委員長に打ち明ける。

自虐的ながらも明るく　といった感じで話したのだが、委員長の表情は暗い。

「そっか……ごめんね、私が組んであげられたらな……」

こちらとしては半分笑い話のつもりだったのだが、結構本気になられてしまった。

あわてて委員長のせいじゃない、と弁明すると、委員長は少しだけ笑顔を取り戻した。

……うーむ、この前も思ったけど、この話題は委員長には良くないな。

なぜだか、委員長は俺がソロ活動しているのを自分の所為と思っている節がある。

全く持ってそんなことは無いのだが、なんでだか……

「気にすんなって。一年次の実習のときに組んでもらっただけでも嬉しかったし、そこまでしてもらっても悪いしな」

そんな様子を見てしまうと、こちらとしても苦笑するほか無い。

やたらと気にかけてくれるのは嬉しいんだが、ここまで深刻に考えられるとちょっと悪い気がするんだよな。

「うーん……そう言ってくれるとありがたいんだけどね。でも、何かあつたらすぐに言っつてね。」

迷宮探索が無い日なら仮パーティーも組めるし、無理はしちや駄目だよ？」

なにか釈然としないものを感じてそうだが、それでも委員長は心配してくれている。

本当に良くできた子だなあ……見習いたいけど俺には無理なんだろうとも思う。

「ああ、わかった。なんかあつたらその時にはよろしく頼む」

なので、とりあえずは当たり障り無く返しておく。

……このやり取りも何回目になるんだろう。結局、頼ったことが無いあたり俺もいい加減というか。

委員長もそんな俺の態度で手ごたえを感じることは無かつたらしく、ため息を吐いて頭を抑えた。

俺と違って多忙だからな、委員長は。あんまり迷惑はかけたくない

いんだからしょうがない。

「……まあ、いいけどさ。本当に頼むよ？」

私は 君だけは失いたくは無いんだ。絶対にね」

そう言ったきり、委員長は前を向いてしまった。

釣られて前を見ると、すでに講師が到着していたようだ。

「よし、それではこれより『前衛の戦い方・基本』の講義を開始する。」

筆記用具を用意して、前を向け！」

講師の声が教室中に響き渡ると同時に、あちらこちらで生徒達が講義の準備を始める気配を感じ始める。

俺もそれに追従するようにして、自らのスイッチを勉強用へと切り替えた。

「では、以上で『前衛の戦い方・基本』の講義を終了する。」

各自でよく理解し、また復習するように。それでは解散。
昼休みを挟む次の時限、この教室では『基本的な罫とその対処』
の講義を行うので、自信の無いものは受講するように」

一息を吐いた後に、講師が事務的に連絡事項を述べ、教室の入り
口へと歩いていく。

無機質に靴の音を響かせながら、教室のドアを開け、静かに閉め
る。

それと同時に、教室に授業前のような活気が戻ってきた。

今までの静けさが嘘のように、席を立つもの、友人と談笑を始め
る者が現れ始める。

基本的に、平日に行われる講義は自由参加だ。

ノーム曜日の授業に比べ、講義に参加する生徒には真面目な者が
多いのだろう。授業中の雰囲気は厳格というに相応しい。

「んー……はあっ！ 終わったね、レーゼ君。感想は？」

手を重ねて伸びをする委員長が、明るい笑顔をこちらに向ける。

丁寧な物腰を持ちつつも活発なその笑顔は、見とれるのが礼儀と
言えよう。

つまり、委員長に見とれた俺は何も悪くない、正常だ。

「ん、ああ。そうだな……色々と勉強にはなった。

流石に耐久ステータスで劣る以上、そのまんま参考にすることは
出来ないけど、いくらかマシな動きが出来そうだ」

講義を受けた感想のほうは、まあそんな感じだろうか。

戦士じゃあるまいし、講義通りの戦い方をしていたら呪術師であ
る俺なんかはすぐに戦闘不能になってしまっが、それでも学ぶこと

は多かった。

とはいえ、今日教わった戦法の殆どはパーティ戦を前提としたものなのだが、それはそれ。

耐久面で低い分、戦法の中になんとかゴーストタッチを組み込むことが出来れば、前衛職とはギリギリで差別化が出来そうだ。

……最近じゃ、呪術師は後衛よりももう少しだけ前で戦うのが正しい職なんじゃないかと思いついたくらいだ。

あえて言うなら中衛職、といったところだろうか。平均的な能力値は特化した特技を奪う変わりに、少しだけの対応力を与えてくれたように思える。

「そっか。ふふ、何か見えたのかな？ 今のレーゼ君、結構楽しそうな顔をしているよ？」

「え、そっか？ ……あー、確かにちよつと笑ってる、か？」

どうも俺は迷宮探索に関わる事を考えるのは嫌いではないようだ。委員長に言われて始めて、口の端が釣りあがっていることに気づく。

「うわ、本当だ。良く見てんなあ、委員長」

自分でも気づかなかった変化に良く気づいたなあ、と。

たったそれだけの意味を込めた言葉は

「えっ！？ え、えと、その……」

何故だか委員長を混乱させた。

解せぬ。観察力をほめただけだったのに、何をそんなに焦るんだか。

まあともかく、だ。

これで今日の所の予定はあとひとつを残すのみ。
依頼していた靴を取りに行ったらあとはゆつくり休んで、明日からの迷宮探索に備えよう。

そうと決まればとにかく、荷物をかばんに詰め込んでゆく。
委員長はまだあせっている。これじゃ別れの挨拶をしても届くかわからないが

「ま、いいや。んじゃ、委員長、またノーム曜日に」

会おうぜ、と。続けようとして、俺の声は……

「レーゼ！ れええええぜえええっ！ 居るんでしよう！？ 出てきなさいっ！」

教室の入り口から突如響いた大声に、かき消されていった。

高級な楽器のように美しくも、しかし惜しげなく張り上げられた大きな声。

そんな声が自分の名前を呼んでいる。大声で。もう、この時点で誰が声を上げたかなんて、容疑者は一人しか居ないと言えよう。

……ああ、教室中の視線が教室の入り口からこちらに向かっているのがわかる。

顔、上げたくないなあ……顔を下げたままで居られたらどんなに嬉しかったことか。

座学成績だの呪術師だの色々と有名にはなったが、それでもこんな目立ち方は恥ずかしいの一言だ。

「おはよう、レーゼ。いえ、この時間だとこんにちわ、かしらね？」

顔を上げると、そこにはやっぱり昨日見たばかりの顔があった

もう、どんな反応をしていいのかわからん。

一応天才で通るも悪名高い魔術師・シア＝ウィーアディと超地雷職の呪術師が一同に会するなんて、流石に注目せざるを得ないぞ。

「……どつちでもいいよ」

なので、とりあえずローテンションで応対。

ああ、みんなこっち見てるよ……他人のフリしたい。

ちらりと横目で委員長を見てみる。先ほどまでのあわてっぷりはそこには無く、あるのはただ驚きの一言。

ドン引きされて友達やめられたらどうしよう。委員長に限ってそんな事はないと思うが。

「えっ、ちよつと……あれ？」

ちなみに、その委員長は現在も混乱中だ。おそらく混乱の原因はシアへと変わっているが

俺だつてこの状況に出くわしたら驚くだろう。

俺とシアという悪名高い二人でなくとも、女子生徒がいきなり大声上げて教室に突入してくるというだけでも、それなりにびっくりすると思うが。

「なによ、テンション低いわよ」

「そついうお前はやたらと高いな」

可愛そうだが、委員長にはもう少しの間混乱してもらおう。

なによりも、まずはこの状況から脱却したい。唯でさえ悪名高い呪術師だ、これ以上悪い意味で有名になるのは避けたい。

ため息を隠すことなく吐きながら、自らの眉間に軽い圧力を加えた。……なんだか、頭痛がある気がするんだよな。

「ふふ、ちよつとね。それより、授業はもう終わったのよね？
少し用があるのよ、レーゼ。この後は空いているかしら？」

人差し指を可愛らしい唇へとあてがい、シアは悪戯っ子のように笑う。

何かを企んでいる様子だ。もっとも、この感じじゃ悪意は抱いていないだろうが。

「……空いてるよ。まあいいんだけどさ、もう少し普通に誘えないもんかね……」

行くならさっさと行こうぜ、この状況はちよいとキツいんだが」

だが今はそんな事よりも、一刻も早くこの場から立ち去りたかった。

教室全体の目を一箇所に集めているこの事態、立った二人しか居ない当事者というのは気持ちがいいものではない。

シアは平気なのだろうか。この場における注目度は俺よりも遥かに上だと思っただが

考えてみれば、俺もシアを意識したのはあの日の喧嘩騒ぎが初めてか。慣れているのかもしれない、人の意識を集める出来事に。

「なんだか投げやりね……まあいいわ。行きましようー！」

そう言って、俺の手を引くシア。

他意はなかるうが、これは流石に恥ずかしい。

放してくれ、とか細い声ながらも懇願するが、起源の良さそうなシアの耳に届いている様子は無かった。

もういっそ諦めようか。一体何処へ連れて行かれることやら……

これ以上考えても疲れるだけだと判断した、俺は流れる川の流れに身を任せようとした。

だがその川の流れをせき止める、思わぬ障害物が立ちふさがった。

「ちょ……ちょっとウエイト！ い、一体誰なんですかあなたはっ！？」

……いや、思わぬというのは嘘だ。

出来れば気づかれないうままエスケープしたいなあ、なんていう感情の行き先が、そこに居た。

言うまでも無く、委員長にして我が親友であるイレイン「カートニックス」だ。

「……あんた誰よ」

一方で、相対するシアの態度は冷たい。

基本的には誰に対してもこうなんだろう、だから友達が出来ないんだよ。

とはいえ、思わぬタイミングで拘束が外れたのもうけもんか。

シアに捉まれた腕をするりと抜き、俺は斜めになった体を立て直す。

「え、あ……ごめんなさい。私、イレイン「カートニックス」と言います。

その 貴女が捕まえていたレーゼ君の友達です」

「友達、ね」

ドアの前に立ちふさがる委員長は、少しだけ落ち着きを取り戻したのか、丁寧な自己紹介を行う。

普段の様子を取り戻した委員長と違い、シアはまだ不機嫌そうだが、
って、こっちが普段のシアなのか？

委員長の言葉を反復したシアは、同時に俺へと視線を投げかけてくる。

俺はそれに対して首肯で返すと、シアはようやく吊り下げた目の傾斜を緩くした。

「私はシア＝ウィーアデイよ。……よろしくね。
それで？ 私達に何か用かしら？」

棘はあれど、言葉のリズムもやや柔らかくなっている。
基本的には悪い奴じゃないんだし、もう少し素直になれるといい
んだけどな。

「用っていうか……えっと、私の友達がウィーアデイさんと一緒に
どこかに行くのが意外で……
ちょ、ちょっとだけ心配かな、なんて……」

言葉を選びつつ喋っているのか萎縮してか、委員長の言葉はただ
たどしい。

これは少し助け舟を出さねばなるまい。

「大丈夫だよ、委員長。キツイ所もあるけど、シアはいい奴だよ」
友達の友達が友達になるか、というところだが、緩衝材
くらいにはなるだろう。

シアとは出会って短いが、その不器用さと本質は少しだけ理解し
ているつもりだ。

なんか仲間が居ないせいか、友達が居ないシアには親近感のよう
なものを感じるし、友達作りを手伝ってやりたいとも思う。

間に俺が入ったからか、シアの態度も段階的に良くなっている。
委員長はというと

「えっ……すでに名前呼び合っ仲!？」

あ、でも仲は良いつてこと……? なら安心……かな?」

思わぬ人間から言葉が入ったからか、また少しだけ混乱したよう
だ。

一瞬、逆効果かと思ったが、この様子なら少しばかりは効果があ
ったようだ。

「……そうだな。仲は悪くないぞ、友達だからな」

自分にだけ聞こえる場所で、友達の前に最初の、と付ける。
横目でシアを見ると、その目は俺の知るシアのものに戻っていた。

そんな俺たちの様子を見てか、委員長もいつもの委員長に戻って
いた。

いつもの柔らかな微笑み。見ていて安心する。

「そっか、うん、レーゼ君がそういうなら安心だね。」

「ごめんなさいウィーアデイさん、レーゼ君は私の大切な友達だか
ら、急に連れられてびっくりしちゃったんだ」

「……ええ、私こそごめんなさい。態度が悪かったわ」

丁寧な物腰を取り戻した委員長はシアに対して頭を下げ、それに
釣られるようにしてシアの口からも謝罪の言葉が紡がれる。

やっぱシアは素直になる方法を知らないだけなんだな。こうやっ
て、しっかりと理解してやろうとすれば応えてくれるんだ。

どこか生暖かい視線で二人を見ることにより、彼方へ行っていた意識を取り戻すと、二人は握手をしていた。

……流石委員長。人の心を掴むのが上手い。

気づけば、教室全体から降り注ぐ視線の数は減っていた。

落ち着いた空気に波乱を感じなくなったか、此方を見ているのは一部の生徒だけだ。

「シアちゃんって呼んでいいかな？ 私も貴方と友達になりたいな」

「じゃ……じゃあ、私もイレインって呼んでいいかしら？ それを、答えよ」

そこにはもう平和な空気が流れていて、シアは早くも二人目の友達を獲得したようだ。相変わらず不器用だが。

「レーゼ君」

シアへと向けていた視線を戻し、委員長と向き合つ。

優しいその微笑みは、他の視線を集めていることすら忘れるほどに安らかなものだ。

「友達が出来て、よかつたね」

「いや、俺はぼっちじゃないって」

「『は』って何よ、『は』って」

軽い冗談で笑いあふ。

シアに出来る二人目の友達が委員長でよかつたな、と思った。

「じゃあ、私達は行くわ。イレインはこの後の講座も受けるのよね？」

今度は三人でヴァラントインでサンドイッチを食べましょう。あ
そのサンドイッチ、美味しいんだから！

ね、レーゼ？」

「ああ、そうだな。それじゃ、委員長。またノーム曜日に会おうぜ」

方角の位置を委員長と入れ替え、今は俺たちがドア側。そこで、
別れの挨拶を交わす。

「うん、二人ともまた今度。

ヴァラントイン、気になってたんだ。楽しみにしておくね。じゃ
あ、またね」

笑顔で手を振る委員長。

俺達もそれに手を振ることで応え、長い廊下を歩き出した。

ほんの少し前を、先導するように歩くシア。

柔らかな日差しに染められた、優しい色の声で、シアが語りかけ
てくる。

「ねえ、レーゼ」

「ん……どうした？」

「えへへ、友達が出来たよ」

それは、心底嬉しそうな、柔らかくも暖かいお日様のような笑顔
で。

見ているこっちが嬉しくなってしまうそうだった。

「ああ、おめでとつさん」

「ありがとう、友人第一号さん」

二人で笑いあつて、廊下を歩く。
そうだな、こんな笑顔が見れるなら、もっと積極的に友達作りに協力してみようか。

釣られて出来た微笑を崩すことなく、ゆっくりと歩みを進める。

さて、一体何処へ向かっているんだろうな。

「……あれ？ さっきのシアちゃん、もしかしてレーゼ君と二人でヴァラントインに？」

今日も二人で何処かへ出かけて……あれ？」

地味な用語解説

『講義』 学校ノシステム

受ける義務がある授業を行うノーム曜日と、休日であるウィスプ曜日を除いた平日に行われている、任意参加の授業のこと。

一週間のうち、おなじ講義を大体3回くらい繰り返し返しており、冒険

に必要な知識を無償で提供している。

筆記試験には関係が無かったり（それでも受けていると有利だが）、出席を強制する要素は全く無いが、それでも受講する生徒は多い。また、任意参加であるためか、ノーム曜日の授業と比べて全体的に意欲的な生徒が多い。

前衛・後衛の戦い方を説明する講義や、アイテムの効果的な使用方法など、様々な講義が行われている。

第八話・前 嵐は急にやってくる（後書き）

ギリギリ予告通りで更新完了！

といっても、まさかの前後編。これ以上続けると長くなりそうなので。

第八話・後 嵐は急にやってくる

上機嫌なシアにつれられて、俺は商店エリアの入り口付近を歩いていた。

何処へ向かっているのか、とたずねても、シアは笑うばかりで教えてはくれない。

その様は悪戯っ子のようにもあり、褒めてもらいたがる子供のようでもあり……見ていて微笑ましいのだが、行き先くらいは教えてくれないのではないか。

まあ忙しいという訳でもないのに、別に構わないのだが。

「ちゃんと付いてきてる？ うん、付いて来てるわね！」

そんな俺の心情なぞ露知らず、出会ったばかりの友人は非常に上機嫌だ。

俺よりそわそわしている気もするが、そんなにも早く見せたいものなのだろうか。

「逃げたりしねえっての、ちゃんと付いて行ってるよ」

可愛らしい妹を見るような感覚に近い。ついつい表情が緩んでしまっ。

ともすれば、それは見下している様に感じる人が居るかもしれない。

妹を見るようなそれは同年代に向けるような眼差しでは無いのか

もしねないが、その眼差しを向けられるシアは全く気にしていないので大丈夫だろう。

ふと、辺りを見る。

昨日シアと通ったばかりの道。

少し人が少なかった昨日と比べても、平日である今日は人の通りはやや少ない。

それでも回復薬や転移符などの必需アイテムを買いに来た、もしくは食事をしにきた冒険者達で、辺りには人の流れが出来ていた。

……食事が。そういえばそろそろいい時間だな。調度いい具合に腹が減ってきた。

「なあシア、少し腹が空いたんだけど、ヴァランタインで何か食べないか？」

今の腹具合なら、軽食程度のサンドイッチを食べればしばらくもつだろう。

場所的にも近いし、ヴァランタインはシアも気に入っていたはず。時計の針もそろそろ昼を指そうか、という時間帯だ。色々調度いいかな、と思いつつの提案なのだが

「え？ うーん、すごく魅力的な提案なんだけど……ごめん、後でじゃダメ……かな？」

意外にもシアの答えはNOだった。

一刻も早く思惑を達成したいのか、後ろ髪を引かれつつ、といった様子だ。

意外な反応だな、シアもヴァランタインは気に入っていると思っただけだ。

身長差が生む上目遣いが俺の瞳を捕らえる。

……まあ、我慢できないほどじゃあないし、別に構わないかな。

「む……まあ、いいか。先にそつちを優先しても」

「ごめんね、お腹減ってるところ……そんなに時間はかからないと思っから！」

少しずつ主張を始める腹の虫を無視した俺は、気がつけばそんな風に応えていた。

これで我を通せる奴はある意味すごい。

再び笑顔に戻ったシアを見て自分の決断を納得しつつ、俺たちは再び歩を進める。

ふむ、しかし何処へ向かっているのだろうか。

商店エリアへと連れて来られた以上、シアの目的は何処かの店なのだろうか……

買い物だろうか？　だとすれば俺を連れてきたのは荷物持ちに、と言った所だろうか。

……いくらシアでもそれはなさそうだな。荷物持ちを連れてくるだけにしてはテンションも高いし。

聞いても無駄だと解っている以上、これ以上問い詰めるつもりは無いが、やはり気になる。

顎に手を当てて思索していると、いつの間にかシアは歩みを止めていた。

テンションの高さの差異とも取れる、シアとの距離をゆっくり詰め、おそらく目的地であろう建物を見上げる。

……って、本当にここが目的地なのか？

ただ立ち止まっただけなのではなかるうか。疑問の意を込めた、

息のような声が、喉から漏れる。

「……エノク工房？」

「そうよ。っていつても、ここはレーゼのほうが馴染み深いだろうけど」

誰に向けるとも無く、強いて言うならば自分に向けた疑問にシアが答える。

「どうやら、ここで間違いないらしい。」

「意外だったかしら？ それとももう私の狙いがわかったちゃったり？」

「意外は意外だが……目的はわからないな。靴を受け取るだけじゃないのか？」

その表情に少しだけ影を落とすシアに対して、素直な気持ちを吐露する。

正直に言えば、ほんの少しだけ頭を過ぎった事があるが　まあ、このセンは薄いだろうと思ひ、あえて口には出さなかった。

自分の計画の完璧さを再確認でもしたか、シアの表情には再び日が昇った。

まあ俺に感づかせていない、と言う点ではシアの計画はそれなりに成功しているのだろう。

ならよかった、と言うなり、シアは工房のドアに手をかける。

「こんにちは、おじさん」

「こんにちはー」

シアの後を俺が付いていく、という昨日とは逆の形でエノク工房

のドアをくぐる。

工房の奥は見たことが無いが、客とやり取りをするカウンターはいつも綺麗に掃除してある。

お手伝いのティセさんがいつも掃除をしているおかげだろう。

「はい……っと、君達か、いらっしやい」

その工房の主は、そんな俺達の呼びかけに応じてにこやかに奥から姿を現した。

いつもの……といっても、今年からの付き合いだが、ともかく。もう何回か繰り返し返したやり取りだ。勿論、俺の隣に誰かが居るのはこれで二回目だが。

「思ったより早かったね、頼まれていたものはもう出来ているよ」

とはいえ、エノクさんはいつもどおりの様子だ。

奥で作業をしていたのだろう、メガネの汚れに今気づいた……とばかりに、エノクさんはメガネに付着した汚れをタオルでぬぐった。

工房の主、というといかついおじさんを想像しがちだが、このエノクさんは違う。

清潔感を感じさせる短い髪、知的さを伺わせる整った瞳、そして知的な雰囲気を増大させるメガネ。

話し方も丁寧で、それでいて仕事には頑固。

しかし工房の職人だけあり体はムキムキ。

顔と見た目はインテリ、しかし体とこだわりは職人そのもの。

なんだかつかみ辛いキャラをしているが、気さくで話しやすい柔らかな物腰から、その人間性を評価する利用者は多い。

勿論、腕の方も立つ。まあ、駆け出しである俺が知っている限りで、と付け足さなければならぬが。

「いつもながら早いですね、出来の方はどうですか？」

「個人的には上場といったところだね。流石ボスドロップといった所かな。」

「少し待ってね、今取ってくるよ」

その表情を自身ありげなものに変えて、エノクさんは店の奥へと戻っていく。

どこか楽しそうなのは、仕上がり良かった故のものか。やはりこの仕事が好きでやっているのだろう。

「お、っと。シアちゃんはついて来てくれるかな？」

だがエノクさんはその表情と足を止め、俺の隣に居る少女の名を呼んだ。

シアが俺をここに連れてきたことと関係しているのだろうか。俺だって奥に行った事無いのにな、少しうらやましい。

「ええ、わかったわ」

呼ばれたシアも、この出来事は想定内だった様子。

ちよっと思って行く、と残して、シアはエノクさんの後姿を追う。

奥へと消えていく二つの姿を見送ると、俺は入り口近くの椅子に腰をかけた。

何度も着た場所だから目新しいものはもう無い。辺りをきよろきよろ見渡すのは最初に来たときにやったし、することが無いので座っておこうといったところだ。

とはいえ、結局辺りを見回してしまうのはクセか本能か。

今日はテイセさん居ないな、だとか。カウンターの奥に飾ってある剣かつこいいな、だとか。

毎回のようには繰り返しているあたり、意外といつもと変わらない自分に笑みがこぼれる。

いつもなら二・三分もせずに戻ってくるのだが、今日は時計の針が余分に動いている。

奥で何をしているのか、少しだけ気になるな。

時計の針が円形に振られた数字の間を渡ろうとした辺り。

本でも持ってくればよかったかな、なんて思い始めたころ、二人は帰ってきた。

先ほどまでのテンションは何処へ行ったか、シアはエノクさんの後ろに隠れていた。

「やあ、ごめんねレーゼ君。待たせちゃったね」

申し訳なさそうに頬を掻くエノクさんを見て、俺は椅子から腰を浮かせる。

エノクさんとシアの手には、デザインの違う靴が載っていた。

シアは一足早く靴を受け取っていたようだ。人を待たせておいてズルい。

「はい、これレーゼ君の。靴装備としては軽さも防御力も二十階層くらいまでなら問題ないはずだよ。

でも靴底以外は今まで装備していた物と変わらないから、加護があるとはいえ過信はしないでくれよ」

靴を渡して親指を立てるエノクさん。覗いた白い歯がさわやかで

ある。

渡された靴を持ってみると、なるほど。確かにコレは軽い。

ボスドロップだけあって、軽さの割りに防御力も優秀。

エノクさんに任せてよかった、と思える出来だ。

ちなみに、ドロップアイテムで作成した防具には、物質としての性能以外にも『加護』が付加される。

軽い能力アップスキルのようなものだろうか。魔力で構成されたドロップアイテム製の装備品は、身に着けるだけで防御力や攻撃力を引き上げることが出来る。

この加護というのは装備品に釣り合う技量が無ければ発揮されることは無いとはいえ、冒険者の心強い共だ。

「ありがとうございます」

礼を言うと同時に、持ってきた靴に入れる。

今日は迷宮探索をしないので、後で履いて慣らしておこう。エノクさんが優秀な職人とはいえ、こういった確認は必要である。

「それでね、シアちゃんが少しお話があるみたいなんだよね。

ほら、いつまでも僕の後ろに隠れてないでさ」

「あつっ……」

苦笑いしながら、エノクさんはシアと俺を結ぶ直線から横へとそれる。

本当にどうしたんだか。

シアがうつむいているとき、大体は何か言いたいことを言えずにいる。

たった二日の付き合いだが、そう断言できるほどにこいつはわか

りやすい。

もらったばかりの靴を抱きしめて、沈む日のようにゆっくりと歩いてくる。

それを俺は、ただ見ていた。

目をそらすのも失礼だろうし、何か言葉を掛ける雰囲気でもなし。まあじっと見つめられるのもつらいだろうが、ほかに出来ることはない。

「あ、あのね……」

詰めれる距離がなくなって、シアはようやくか細い声で呼びかける。

なんだろうこの胸がときめく感じ。

普段のシアがあだからか、しおらしいシアはとても可愛らしい。ギャップって大切なんだなあ、なんて思うことで、強烈な精神攻撃から正気を保つ。

「ど、どうした？」

何故か緊張する俺。

エノクさんの視線は生暖かい。事情を知っているんだろうな。くそう、常連客を裏切りおつて！

出所不明のむずがゆさのような感覚を抱きつつ、シアの行動をただ待つ。

数分間は待ったんじゃないか、というたったの数秒を過ぎた後に、シアはようやくやく喋りだした。

「昨日のことなんだけどね。」

……レーゼと一緒にここに着たでしょ？　そのときに頼んでいたものがあるの……」

目は伏せたままに、小さく握られたこぶしが伸びてくる。
その行動の意図が見えず、俺は息を呑んだ。

「手、出して」

短い言葉でそういわれると、意味を理解する前に俺は手を出していた。

手を伸ばしてようやく、その手に握られているものを俺に渡そうとしていたことに気づいた。

ゆつくりと、シアの手が俺に近づく。

差し出した俺の手のひらに、雪のように白い、それでも暖かなシアの手が重なるように降り積もる。

新雪のまま溶けていく雪みたいに、するりとシアの手が俺の手から零れ落ち、俺の手のひらには小さな円形の何かが残った。

強く握り締めていたのだろう、俺の手に残ったそれは、確かな重みを感じさせつつも温かい。

シアに釘付けられていた瞳を自分の手へとむける。

そこには、小さな金属が置かれていた。

授業で見たことしかないけれど、俺はコレを知っている。知らない冒険者なんて、いないだろう。

「これ、共鳴鋼？」

自分自身に聞かせるようにつぶやいた、返るはずの無い言葉はシ

アが受け止め、その頭を垂れる。

共鳴鋼。同じ鉱石から作り出すアクセサリーは、冒険者たちを同じ迷宮へと導く絆の証。

これを渡すということは、それは共に冒険をしよう、という意味の証明で

「受け取って、もらえる？」

視線を上げれば、シアの瞳はまっすぐと俺を捕らえていた。

冗談ではないのだろう、真剣なその瞳から、目を放すことができない。

「たった一回一緒に冒険しただけだけどき、私、少しでも探索を楽しんで思ってたのは初めてだったんだ。

それにレーゼは、私の一番最初の友達だし……

感情だけじゃない。私が、自分自身で判断したの。レーゼと組まない、私はきつとダメなんだって」

恥ずかしがる事も無く、しっかりと発される強い意志。

俺はこれを受け取っていいのだろうか。

一回、大して考えもせずにパーティの誘いを蹴ってしまったというのに。

それを口に出すと、シアはようやく笑った。すこし罰が悪そうに、
だが。

「あの時は、私も悪かったから……スキルの撃ち方とか態度とか、最初の印象は最悪だったとおもうもん」

言葉の最後を小さな笑い声で締めて、シアは再び顔を上げる。数秒が経って、顔を上げたときには、もう真剣な目が戻っていた。

「だからもう一回、改めて申請しておきたかったんだ。ねえレーゼ。お願い。私と、パーティを組んでくださいっ」

見開かれたその瞳は、ただただ俺からの返事を待っている。

そんなシアに対して、俺は

「喜んで」

そう答えて、共鳴鋼で出来たバッジを握り締めた。

「もう返せって言っても返さないからな」

言葉を噛み砕くのに、幾つかの瞬きを要するシア。

やがて、俺の言っている意味を理解したのか、満面の笑みが花開く。

「返品なんて、受け付けないんだからっ！」

今までの神妙な顔が嘘のように、シアは飛び跳ねる。

嬉しいときは本当に嬉しいが奴だな、今まで見てきた仏頂面とは大違いだぜ。

「いやあ、良かったねレーゼ君、パーティが組めて。

シアちゃんから二人組み用の共鳴鋼を作ってくれ、って言われたときは僕まで嬉しくなっちゃったよ。

これで少しは安心してみているかな」

そんな俺たちに、優しい目で微笑みかけるエノクさん。
この人も色々と気にかけてくれたからなあ、その気持ちはやはり
素直にありがたい。

シアにはこのことを秘密にしておいてくれと頼まれたんだろうな。
そういえば昨日も、なんだかニヤニヤしていた気がする。

「シア」

とはいえ、まだ俺には言っていないことがある。
それだけは言っておかないと、申し訳なくてパーティが組めない
ぜ。

「ありがとう」

いまや、俺の認識はパーティを『組んでもらう』というところ
にある。

だからこそ、感謝の意を示す。
そうしたら後は対等であればいい。ただ、こいつの期待にさえ添
えられれば。

「えっ？ あっ………どういたしまして！」

あちこちを跳ね回っていたシアが、俺の存在に気づいてその動き
を止める。

なんか少し恥ずかしそうだ。まあこんなシアはめったにお目にか
かれるものではないのだろう。

とりあえず冷静に戻るその様がほほえましい。

「と、とりあえずこれからよろしくねレーゼ！」

呪術師が地雷ジョブじゃないってこと、世に知らしめてやりましよう！」

「あー……うん、まあ先は長そうだけど頑張るか」

新しく出来た相棒にとりあえずの目標を示され、肩が落ちる。

仲間が出来ようが、俺が呪術師であるという事実には変わりがないんだよなあ……

とたんに現実に引き戻された俺のテンションを見て、シアが俺を励ます。それを見て笑うエノクさん。

なんだかいいな、こんなのも。ちよつと暖かい気分になれた。

「えっと、私の用はこれで終わりなんだけど、レーゼはまだ何かある？」

ようやく落ち着いてきたのか、シアはもう、いつもの彼女に戻っていた。

靴は受け取ったしその料金は昨日払っていたし、シアの用事も終わったというのならば、とりあえずの所は今日の予定を終えたといつてもいい。

強いて言えば腹が減ったので、何処かで食事をとろうと思っていたくらいだ。

「そつえばさつきもそんな事言ってたわね。

じゃあそろそろ行きましよう。おじさん、ありがとうございまして！」

「いえいえ、構わないよ。それよりもレーゼ君の事を頼んだよ。彼、結構無茶するからさ」

自覚症状があるため俺はあえて何も言わず、一礼をして店を出た。シアもまだ少し嬉しそうに、俺の後ろをびったりとついてきてい

る。

目的地は先ほど告げたヴァランタイン。シアも、聞かずともそれは分かっているのだろう。

なんだか、俺も舞い上がってるな。

いつもよりも体温が高い気がする。

渴望していた仲間と、一緒に並んで歩いている。

他の冒険者にしたら当たり前前かもしれないが、やっぱり嬉しいもんだな。

「なあシア」

「ん……どうしたの？」

「今日はちよっとパーッとやるか」

「あ、いいわね！ 目指せ全メニュー制覇！？」

「いや……そりゃちよっとムリだろう」

冗談なんか言い合って、笑いあって。

久しぶりな気がするなあ、こんなの。

俺よりも少し遅いシアの歩調に合わせてながら、ヴァランタインに到着する。

そろそろいい時間帯だからか、店の中は昨日よりも混んでいた。

それでも、なんとか座れそうだな。昨日と同じように、先立って扉を開けて、シアをエスコートする。

「いらっしやいませ、本日は何名様のご利用ですか？」

シアと、顔を見合わせる。

息をそろえて、こう答えた。

「二人で！」

地味な用語解説

『馬人の蹄靴』防具/靴

10階層のボス、ケンタウロスの蹄で作成した軽量・高防御力の靴装備。

まあ、高防御とはいってもこの辺りの階層で、だが。

性能はいいが、基本的に素材を使用しているのは靴底のみなので過信は禁物。

ケンタウロスの蹄自体のドロップ率はそう低くなく、20階層にいたるまでの道が厳しければ、修行をかねて当該素材のドロップを狙ってみてもいいかもしれない。

ちなみに読み方は「ばじんのていか」

『加護（鍛冶アイテム）』

モンスタードロップで作成した装備品に付加されている不思議な力のこと。

素材としての強さは重要だが、それ以上に重要なのはこの加護。

靴装備だろうが頭装備だろうが、潜命石の加護を受けたものが装備すればあら不思議、ステータスが加護の分上昇する。

迷宮のモンスターはそもそも魔力できており、その体の一部もまた魔力で出来ている。

この魔力が潜命石と元を同じくしているものなので、その魔力が体

に取り込んだ潜命石に操作して……というのが一応の理屈。

装備品の素材となったモンスターのレベルが高すぎると、潜命石がその魔力に耐え切れず、身に着けても効果が得られない。いわゆる装備Lv。

頭・体・左腕・右腕・足・靴と6つまで装備可能。部位ごとの装備制限は無いので、鎧を6枚着込んだりも出来る。でも動けるものなら動いてみやがれ。

第八話・後 嵐は急にやってくる(後書き)

真・日常編完！

バトルが書けるよ！ やったねDDZちゃん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1998w/>

バッドカクテル！

2011年12月1日22時28分発行